

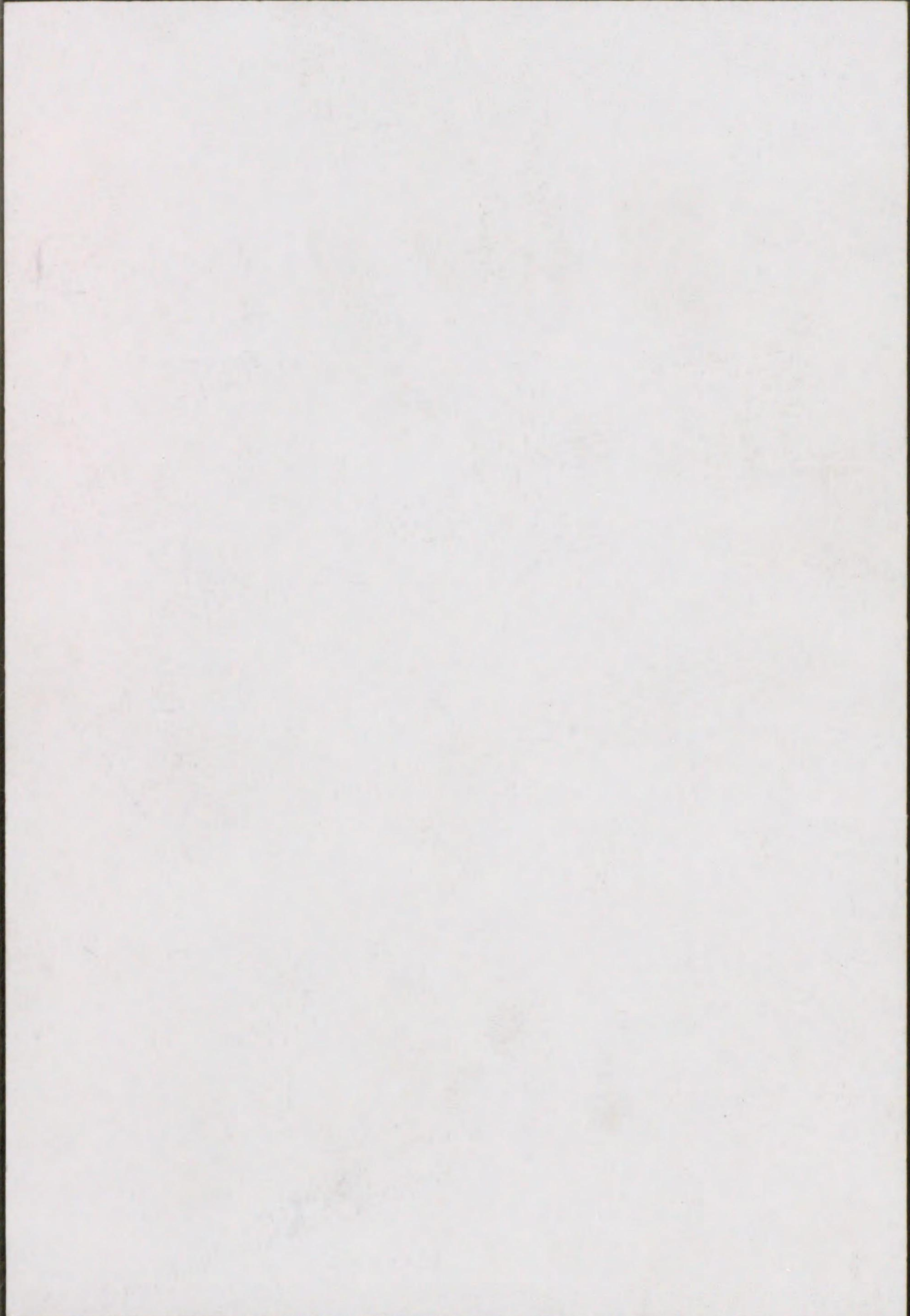
597

597-106

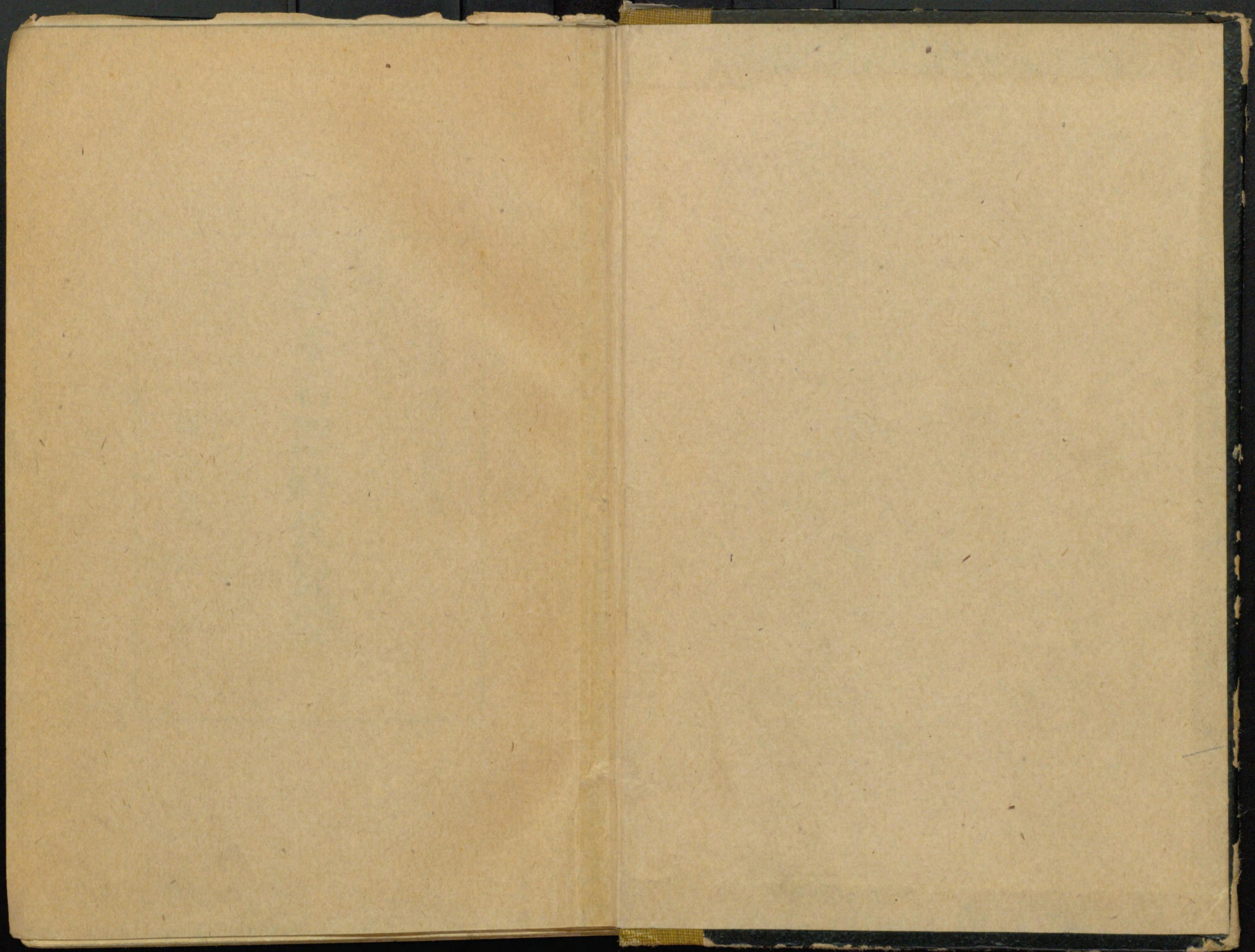


\*1200501528325\*

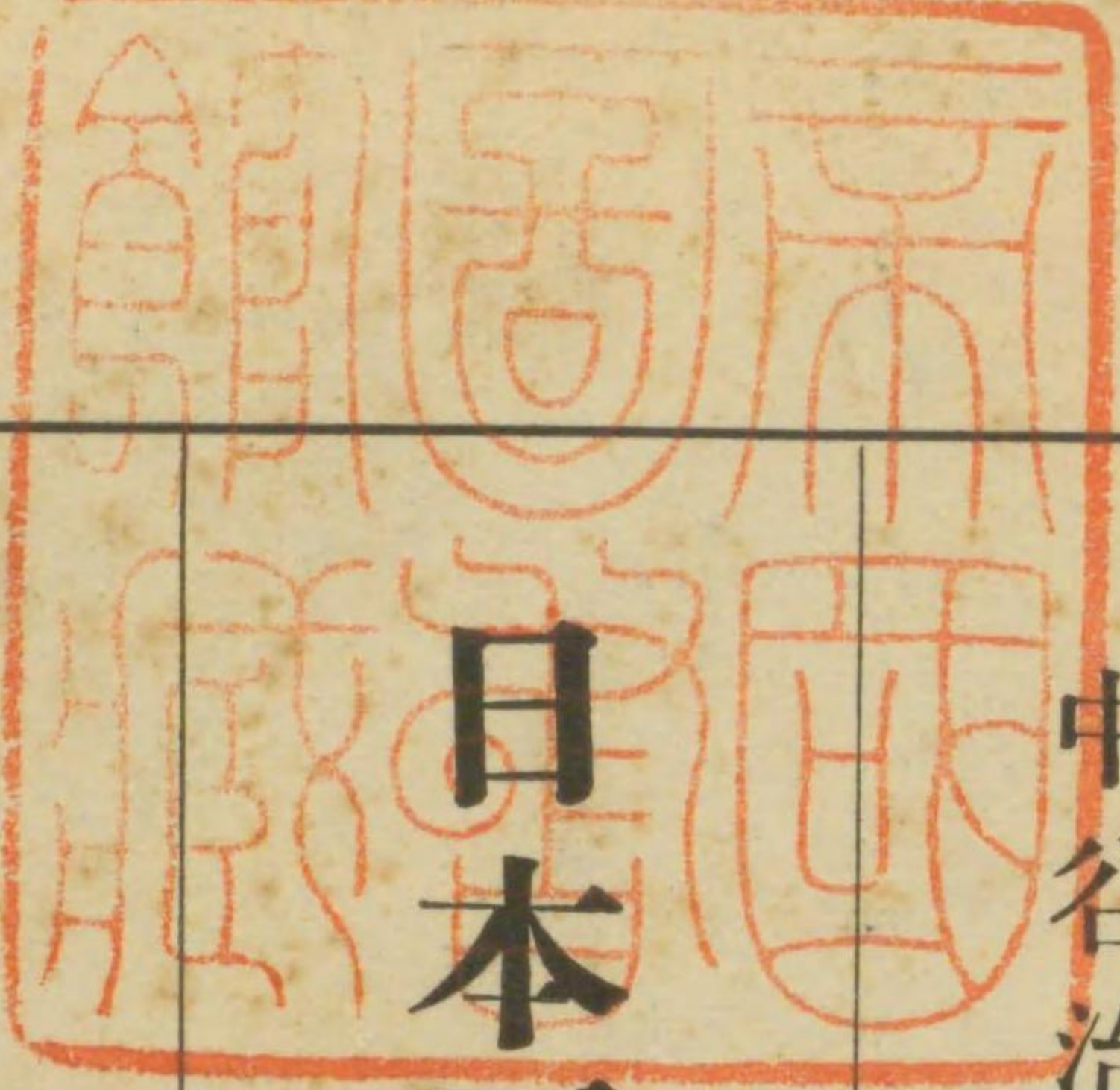
口  
複  
写











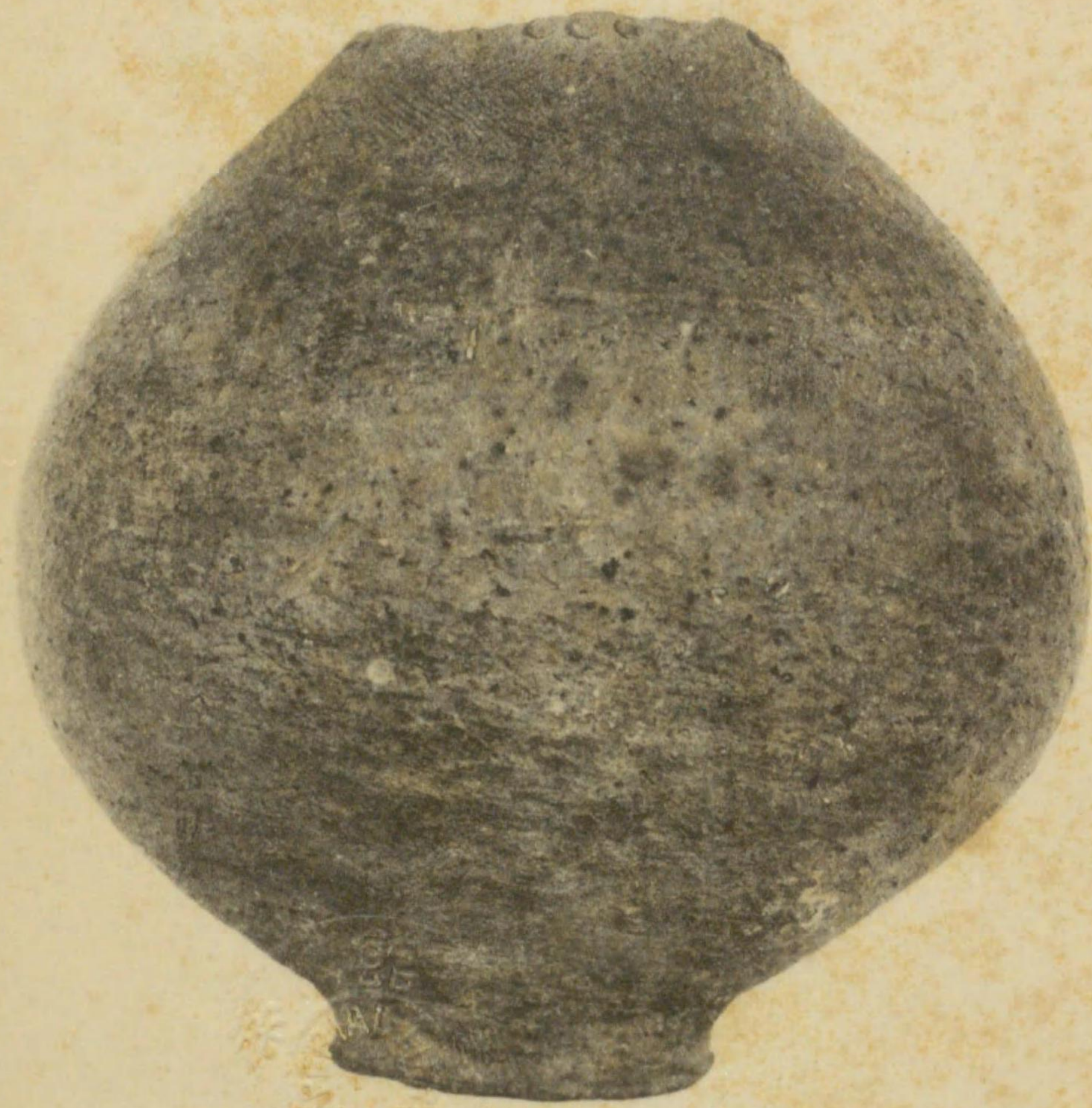
中谷治宇二郎著

日本石器時代提要

岡書店版







最初に発見された彌生式土器

明治二十二年東京本郷彌生町貝塚から最初に発見された土器である。  
彌生式土器の名はこれから興つてゐる。(東京帝大人類學教室藏)



597-106

### 自序

本書を我國石器時代に關心を持たるゝ諸君に贈る。

私は日本石器時代文獻目錄の編纂中、その用語が餘りに亂雜であつて、學の普及の上に大なる障害を與へてゐる事に氣附いたので、自ら先史考古學語彙を編まうと志したが、稿を起すに當つて、本書の様な體裁に改めたのである。

本書は序説、各説、餘説の三部に分れてゐる。序説は全く初心の方々の爲に書いたもので、云はゞ採集の手引である。然しその遺物の處理や研究の方法の條にあつては、隨所に私の考が記されてゐる。大方の示教を得たい



と思ふ。

各説は各種の用語を一定の方針に配列したものであつて記述に當つては自づと主觀の筆も加はつてはゐるが、過去に用ひられた語彙は、文獻目録のそれから抜き來つて、一通りは收めた積りである。若し本書卷末の索引を充分に利用されるならば、多分これは同時に語彙としての利用が出来るであらう。その個々の遺物の研究、並に一々の言葉の歴史に對しては、拙著文獻目録を参照され度い。

餘説は文獻の紹介を試みたものである。初め私はこゝで、學史と特別な語彙——例へば先史時代と石器時代、彌生式と金石併用期、人種論と遺物の事に關して書き度い希望を持つてゐたが、多少重複の厭もあり、今は私としてもその時期でないと思へたので、單に文獻に關する二三の舊稿を掲ぐる程度で止めた。

我國考古學の現状にあつては、一つの學としての提要書を書く事は、或は何人にとつても困難であるかも知れない。それより先に、考古學が學としての存在を確める爲の、多くの仕事が残されてゐる。然し私のこの試みは、一には語彙の爲のものであり。又同時に、何であるかと云ふ過去の教への代りに、何であらうかと云ふ考への考古學を將來させ度い爲のものであつた。たゞ不敏、埒を越ゆる點多く、過を傳ふる事の多きを懼れてゐる。先輩諸先生の示教を得ば幸である。

本書を草するの日、中頃から微恙を得て地を轉ずるの止むなきに至つた。故に参考書としては、僅に拙著文獻目録の校正刷を携へたのみである。記述の粗略、挿圖の不選擇等も従つて生じ勝であつた。これ等は將來増訂の日を得たいと思つてゐる。

本書の刊行について坂口保治君は校正を擔當せられ、今井富士雄君は索



自序

引をつくられた兩君に對しこゝに感謝の意を表する。

昭和四年七月佛國に發つ日

著

者

四

目次

自序

序説

第一章 遺跡の調査

第一節 遺跡へ行くまで

はしがき—遺跡の數—遺跡への携帶品—遺跡の發見—遺物の採集

第二節 遺跡の發掘

發掘の前に—試掘の實際—發掘の方法

第三節 遺物の處理

採集の遺物—遺物の整理—遺物の保存

目次

五

三

三

一九

三〇



第四節 遺物と資料……………三六  
 發掘物と資料——郷土博物館——資料の扱方——資料の整理——資料の比較

第二章 研究と報告……………五一  
 第一節 研究の方法……………五一  
 層位的研究法——形態的研究法——綜合的研究法——土俗的研究法——心理學的方法

第二節 記述の方法……………七四  
 遺跡の調査報告——記載の選擇——遺物の報告——記載様式と圖表——報告と論文

第三節 研究の目的……………八六  
 先史考古學とは——考古學の區分——關係學科——先史考古學の立場

各説

第一章 遺跡汎論……………九七

第一節 遺跡とは何ぞ……………九七  
 從來の見解——遺跡と遺物——遺跡の概念——遺跡に於ける地理的なるものと歴史的なるもの

第二節 遺跡の分布……………一〇七  
 居住地と遺跡——遺跡の國別表——遺跡數に地方的差ある理由——分布と地域

第二章 一般的なる遺跡……………一三〇  
 第一節 遺物包含地……………一三〇  
 遺跡の類別——遺物包含地——土器塚——泥炭層中の包含地——瀝青土中の遺物——火  
 山灰下の包含層——熔岩流下包含層

第二節 遺物散布地……………一三四  
 散布地とは何か——海中に於ける石器の發見——湖底に於ける遺物發見地——高地に於ける石鏃發見地——砂丘上の遺跡

第三節 貝塚……………一四二



貝塚の歴史——貝塚と包含地——貝塚研究の効用——鹹水貝塚と淡水貝塚

第三章 部分的なる遺跡

第一節 堅穴及敷石住居址

部分的なる遺跡とは——地面の窪める堅穴——貝塚層下の堅穴——敷石住居址

第二節 配石遺跡と丘陵築造

配石遺跡——爐——チャシ(蝦夷砦)

第三節 巨石遺跡

巨石文化とは——北海道の環状石籬

第四節 人骨埋葬

埋葬といふこと——伸葬屈葬——合葬並に抱合葬——甕葬、甕被葬、附甕棺——石棺、積石塚——赤い人骨燔火——副葬品

第五節 製造址並に洞窟遺跡

製造址とは——洞窟遺跡

第四章

第四章 遺物汎論

第一節 遺物とは何ぞ

遺物の定義——遺物と文化——遺物價值の問題——文化と人種

第二節 遺物の種類

種類分の場合——遺物分類表——分類の説明

第五章 自然的遺物 一 (人骨)

第一節 人骨の發見

發見の歴史——國別人骨發見地名表——分布上の考察

第二節 人骨と人種の研究

人種決定に於ける人骨の重要性——日本石器時代人骨の計測學的研究

第三節 人骨に現れたる變形・風習

齒牙變形の風習——頭蓋變形——人肉食用——化石病理學的事象



第六章 自然的遺物 二 (動植遺存物).....三四三

第一節 貝塚を構成する貝類と水産動物.....三四三

貝の種類——貝殻による研究——水産動物

第二節 陸産動物並に植物遺存物.....三五四

野猪と鹿——其他の動物——植物遺存物

第七章 人為的遺物 一 (石製品).....三六三

第一節 打製石器.....三六三

打製石器とは——石鏃——打製石斧——石槍——石錐——石匙——錘石

第二節 磨製石器 (一).....三六四

磨製石器の種類——磨製石斧——抉入石斧——有角石斧——青龍刀石斧——有孔石斧——獨鈷石——環石並に多頭石斧——石冠——石庖丁

第三節 磨製石器 (二).....三六八

石棒——乳棒狀石器——猪頭形石槌並に所謂御物大石器——石劍——石製短劍——石皿——凹石——敲石——砥石

第四節 磨製石器 (三).....三五五

玉類——子持勾玉——玦狀耳飾——ボタン狀石器並に鈎錘車——裝飾石器

第八章 人為的遺物 二 (土器類).....三七九

第一節 土器發見史.....三七九

土器研究の重要性——最初の發見——土器と名稱——土器と民族論

第二節 土器の形式.....三五四

土器形式の分類——甕形土器——壺形土器——鉢形土器——皿形土器——注口土器——片口形土器——臺形土器——釣手形土器——香爐形土器——双口土器

第三節 文様の分類.....三七五

土器と文様——施紋法——文様の分類——結繩紋——懸垂紋——渦卷紋——入組紋——波狀紋——弧線紋——爪形紋——並行線紋——羊齒狀紋——雲形紋——巴狀紋——隆起——裝飾紋——人面文様



第四節 土器の製法

土器の原型—製作法—土質焼成—土器修繕法

第九章 人為的遺物 三 (土偶類其他土製品)

第一節 土偶 汎論

土偶發見史—土偶の分布—土偶とその類似遺物の關係

第二節 土偶の分類

土偶の形式分類—寫實的なる土偶—厚手式土偶—山形土偶—木兔土偶—陸奥式A型土偶—陸奥式B型土偶

第三節 土版その他

土版—岩版—岩偶—土面—顔面把手—人面土器—動物土偶

第四節 土製裝身具等

土製耳飾—土製玉類—ボタン及スタンプ—その他異形土製品

第十章 人為的遺物 四 (骨・角・牙及木製品)

第一節 骨角牙製品

骨角牙製品の種類—骨斧、牙斧—骨鏃、牙鏃、鮫齒の鏃—骨針、角針、鳥骨針—骨刀、骨鎗—骨製盤—骨銛鹿角製銛頭—骨角釣針—骨角ヒ—浮袋の口—骨角製腰飾其他裝身具—牙製勾玉

第二節 貝製品

貝輪—貝製勾玉その他

第三節 木製品其他

木製品その他の遺存と其種類—木刀様製品—木製弓—木製椀—櫛—木製腕輪—籐製品—敷物—獨木舟

餘説

一 石器と傳説

目次



目次

二 德川時代の石器時代文獻……………一四

三 明治期以後の地誌と先史時代の記載……………四七五

四 主要文獻解題……………四六八

索引

挿畫目次

第一圖 土器片の接合……………三五

第二圖 土器の實測圖……………四

第三圖 遺跡断面と層位……………四

第四圖 陸奥是川遺跡遺物包含狀態……………一三三

第五圖 陸奥龜岡泥炭地遺跡……………一九

第六圖 羽後西目海岸砂丘上遺跡……………一四〇

第七圖 地形的貝塚分布系統圖……………一〇

第八圖 石狩川神居古譚附近の竪穴群……………一五

第九圖 下總姥山貝塚貝層下の竪穴……………一五九

第一〇圖 武藏高ヶ坂に於ける敷石住居址……………一七三

第一一圖 人骨埋葬の狀態……………一七三

第一二圖 齒牙變形頭蓋骨……………三九

第一三圖 石鏃分類圖……………二六九

第一四圖 打製石斧……………二七五

挿畫目次

第一五圖 石鏃と石鎗……………二七七

第一六圖 石匙の堅型と横型……………二八一

第一七圖 磨製石斧……………二八九

第一八圖 有角石斧集成圖……………二九四

第一九圖 青龍刀石斧……………二九六

第二〇圖 有孔石斧集成……………二九八

第二一圖 獨鈷石……………三〇二

第二二圖 多頭石斧……………三〇四

第二三圖 冠石……………三〇六

第二四圖 石庖丁……………三〇七

第二五圖 石棒並に石劍……………三二二

第二六圖 所謂御物大石器……………三二四

第二七圖 石皿と磨石……………三三〇

第二八圖 石器時代玉類……………三三〇

第二九圖 玦狀耳飾……………三三三

第三〇圖 裝飾石器……………三三六

第三一圖 土器の形式別……………三五〇

第三二圖 壺形土器……………三六二



挿畫目次

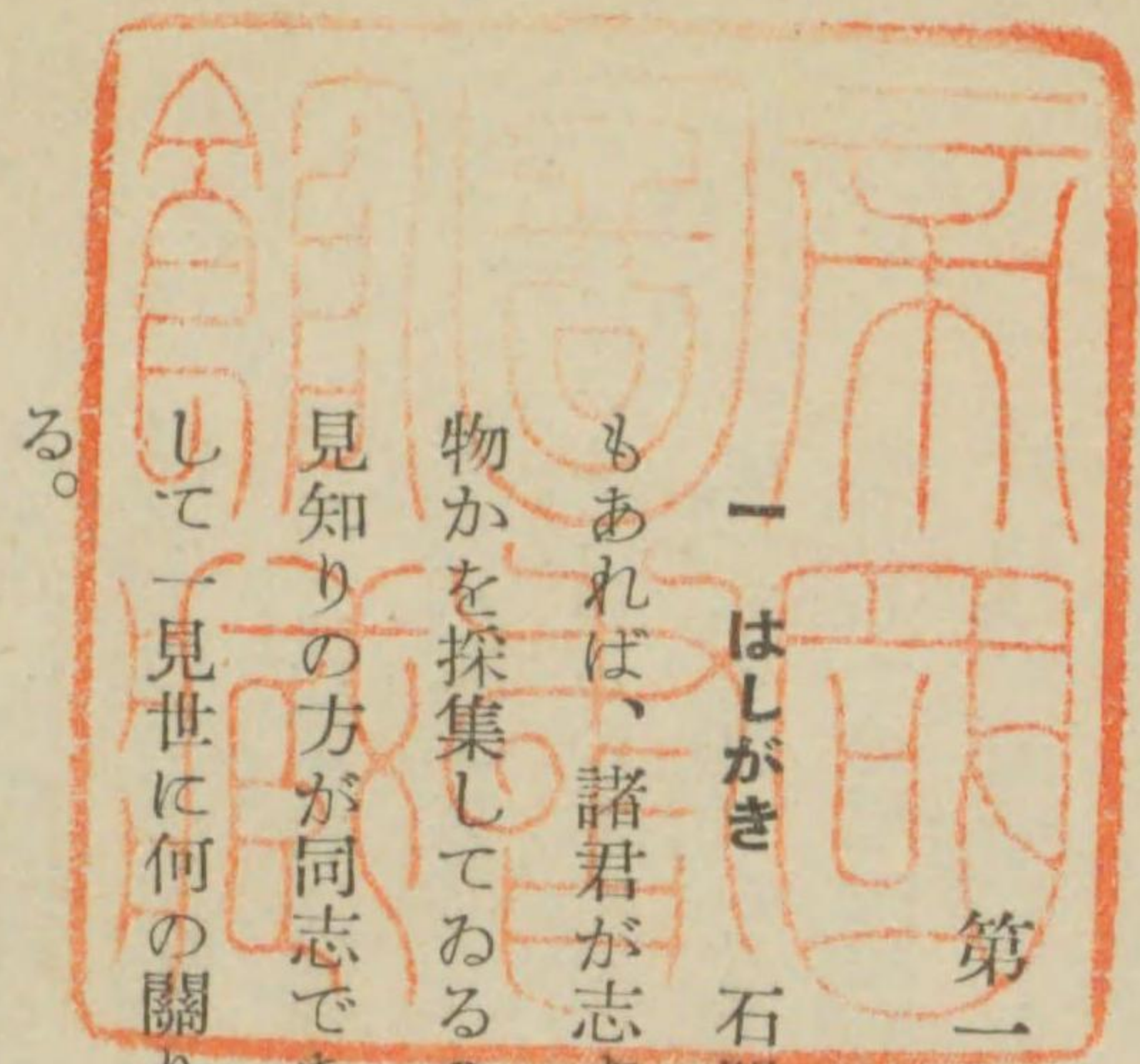
第三三圖	鉢形土遺俯瞰圖	三六四
第三四圖	鉢形土器と皿形土器	三六六
第三五圖	注口土器の分類	三六八
第三六圖	壺形土器と鈞手形土器	三七二
第三七圖	香爐形土器	三七三
第三八圖	彌生式土器の鹿の圖	三七八
第三九圖	結繩紋	三八四
第四〇圖	入組紋と波狀紋	三八八
第四一圖	弧線紋	三八九
第四二圖	工字狀紋	三九二
第四三圖	羊齒狀紋	三九四
第四四圖	陸奥式雲形紋	三九六
第四五圖	寫實的な土偶と厚手式土偶	四一三
第四六圖	山形土偶と木兔土偶頭部	四一五
第四七圖	陸奥式土偶	四一七
第四八圖	土偶的土版	四二〇
第四九圖	土面	四二三
第五〇圖	顔面把手	四二四
第五一圖	動物土偶	四三七
第五二圖	土製耳飾	四三九
第五三圖	骨角牙製品	四四〇
第五四圖	下總古作貝塚發見の貝輪入蓋付土器	四四四
第五五圖	陸奥是川發見木刀樣製品	四四八
第五六圖	陸奥是川發見木製品	四五二
第五七圖	土器底部壓痕より復元せる編物	四五三
圖版	彌生式土器	卷頭
地圖	遺蹟分布圖	卷末

序 說



# 第一章 遺跡遺物の調査

## 第一節 遺跡へ行くまで



一 はしがき 石器時代研究の第一歩は遺跡廻りに始まる。若しそれが秋晴れの日曜でもあれば、諸君が志す貝塚や遺物包含地の附近には、既に一二の人の姿が、丹念に地上の何物かを採集してゐるのを見るであらう。同好者に乏しい地方でもあれば、これは諸君の顔見知りの方が同志である、然し貝塚の多い東京附近では、全然知合はぬ人の顔が多い、そして一見世に何の關りもないこの好事が斯くまで多くの同趣者を有してゐるのに驚くのである。

吾々の立場からすれば、同好の人は多いほどよい、そうしてその各々が、尊敬すべき研究家として、専門に事に當つてゐる者を助け、相提携して行つて下さる事を希望してゐる。何

第一節 遺跡へ行くまで



が爲に先史考古學は専門家以外の助力を必要とするか、そうしてそれが只單に石器時代遺物に興味を持つ人にも期待されてゐるか云ふ事は、自づと説く機會もあらう。こゝでは諸君と共に、遺跡廻りの第一歩から入つて、アマチュアの研究者として一人立ち出来るまでに歩んで行き度い、詳しいお話は途々です。

二 遺跡の數 我國に於ける石器時代の遺跡は、今日學界に知られてゐるものゝみでも一萬ヶ所以上に及んでゐる。武藏信濃の一千ヶ所以上を筆頭に、少くも各國數十ヶ所は算せられてゐるのである、先づその手引の爲に、東京帝國大學編纂の、日本石器時代遺物發見地名表一本を繙こう。これは明治三十年以來、東大理學部人類學教室が、東京人類學會の人々と協力して、順次増訂して來たものである。昭和三年第五版を出したが、それには全國（樺太、朝鮮、臺灣等をも含めて）一万百四十二ヶ所の遺物發見地が記載されてゐる。地名は國別に於て郡・村・字・俗稱を記し、こゝから發見された遺物名、報告者氏名、出典等をも併せ擧げてゐる。諸君はこの中から、自分の居村や、常に往復してゐる字の名前を見出すであらう。そんな所は氣さへつけば、一寸としたついでにの寄道でも、調査する事が出来るのである。

然しもつと手軽な事は、家で送られるその日その日、必ずしも新聞などと云ふ報道の機關によらなくとも、何處の畑から土器の破片を掘り出したとか、彼方の原野には矢の根石が出るなどと云ふ人々の噂話を、時々耳にされるであらう。

我國の面積で、一萬ヶ所以上の石器時代遺跡の數は、數に於ては寧ろ非常に多數であるが而もこの様な噂話に止つて、學界に知られてゐない遺跡が尙多く存在してゐる。更にひよつとした機會に、一時に掘り出されても、若し諸君の注意がなければ、そのまゝ永遠に未知の世界に追ひやられる遺跡もある。全然土に埋もれて、吾々には知り得ないものも多いであらう。せめて今日に知られたものだけでも、調査の出来る裡に見て置かなければならない。

若しも諸君の郷里が、遺跡に乏しい地域で、一寸と發見の機會がないとしても、今日では各種の郷土史研究の團體が、一國には必ず一二は存在して、その中には熱心に石器時代の研究をされてゐる方も大抵はある、こうした人、こうした團體に近づいて、自分も一個の會員として活動すると共に、互に連絡して廣くその地方の先史遺跡を踏査される事も出来る。

### 三 遺跡への携帶品

遺跡の位置が、自分の居村や隣村の範圍にある時には、用事の暇々



に立ち廻つてゐても、相当行届いた調査は出来る、然し三里五里と隔てた遺跡へ、たまの休日や日曜を利用して、辨當持で出掛ける場合には、多少ながら準備が必要である。

1 陸地測量部の五萬分一の地圖を、行く方面に従つてそれ／＼用意する、これには豫め地名表又は同志の報告に依て、遺跡所在地を印づけて置く方が便利である。但正確な遺跡地點の記入は、自分が親しくその地を踏んだ時注意して行ふ。

2 發掘用具として小さな馬鋤、鋤等を、一人一個の割で持つて行く、貝塚調査の爲には馬鋤が便利である大きさは潮干狩に使ふ位の物でいゝ。多少共大掛りな發掘には、遺跡所在の村から人夫を備ふ。又別に移植鋤一個、これは細心を要する發掘に用ひる。大型ナイフ一個、若し人骨や骨角器等の壊れ易いものにぶつゝかつた時、有合せの竹か木を削つてそれを用ひる。

3 袋數個、白木棉で口に紐をつけて作る。大きさは一尺に一尺五寸程の適宜なもの。これは發掘物を入れる爲のもので、尙略すれば古新聞紙でもよいが、濕つた土器を包むと破れるので始末が悪い。

4 荷物になる事を厭はなければ、小さな箕を一個、掘つた土を運ぶ爲に。

5 細身のステッキで丈夫なものがあれば、貝塚の層を探る便利がある。吾々は藤のステッキに鋼鐵針を仕込んだものを持つて、注文で作らせては多少價が張るかも知れない。

6 二米位の巻尺、時計についた磁石、ノートブック等。

7 辨當は是非持参すべきである。遺跡の所在地は必ず村の近くとは限らないし、村があつても中食を得る事は難い、他に水筒、菓子、手拭等。

以上は心の合つた友人や、一家揃つてのピクニック代りの調査である。諸君が若し一ヶ所の遺跡を數日に互つて發掘しようとする場合や、數日に互つて或一地方を踏査しようとする場合には、それ相當の準備が必要となつて来る。

1 豫め遺跡所在地の同志、地主、村長等に紹介して、發掘の許可、宿所の用意等をする。そして相當の發掘ならば一人の助手、又は時々見廻つて貰ふ専門家を依頼して置く。

2 鋤、馬鋤、竹篋、刷毛、大型の巻尺、地圖、測量用磁石、測圖板及附屬品、方眼紙等。細心を要する發掘の用具と遺跡、遺物の測量が出来る用意をする。



- 3 大型の發掘用具——鋤、ショベル等はその地で借り得るが、木棉袋は相當用意してゆく。
- 4 寫眞機、なる可くならばキャビネ型組立のものがよい。寫眞師を出先で得る事は不可能だし、刻々の發掘品の状態を記録する爲には、是非用意すべきものである。
- 5 場所に依ては多少の食料品、嗜好品を持参する。

調査は出來得る限り同志と連絡をとつて行ふべきである。我國に於ける過去の石器時代遺跡の調査が、主として珍奇な遺物を收得するにあつた爲、各人はむしろ抜き駆けの功名を争つて幾多の貴重な遺跡を不注意の裡に破壊した。又個人が收得を誇る心から、發掘された遺物は得勝手に選擇され、個人の祕庫に收められて比較研究の資となる場合が尠かつた。吾々は此の如き態度を排斥しなければならない。

四 遺跡の發見 遺跡の存在してゐる部落に入つた時、案内の人がなく、その地點が明らかでない場合、野良の老人達に就て聞合はす。向ふにして見れば忙しい手を止めて、用もない瓦片などの出る場所を聞かれるのだから、迷惑な事に違ひない、故に出來るだけ丁寧に尋ね可きである。「この邊に矢の根石の出る所はありませんか」「土器の缺を出す畑はありませんか」又は「貝殻の出てゐる畑はありませんか」幸ひ多少の好奇心からでも、話に乗つて道を教へて呉れた場合、若しそれが部落から遠く離れた原野の中などであれば、先に遺跡所在地の持主を訪ねて、多少發掘するとか、たゞ單に見て來たいとか、一應の了解を得て置いた方がよい、そうしてそれが村有地でもあれば、區長か總代の耳に入れる。然し實際は、一日に數ヶ所の遺跡を廻つて、表面採集でも濟ます場合、こうした交渉の時間を惜んで、直接その地に足を踏入れる事が多いであらう、こんな時でも、それが、耕作された畑地であれば、これは必ず附近に居る村の人にも言葉をかけて、誤解のない様に通して置く可きである。瓦缺を探すのもいゝが、やれ畦をこはしたり、大切な種子物を踏まれたりして迷惑だと、後に行つた者までも、飛んだ話の尻を持たれない様、各人重々に注意すべきである。時に避く可き事は、馬鋤を持つた誘惑から、つい畑の隅などに手が出て、こゝならば耕作の邪魔にもなるまいと、面白づくめに掘り散らす事である。こんな手合は初心者も多く、何の收獲も豫想できないのに、それだけ仕事も亂暴で、掘つた穴がそのまゝにされて、獨り百姓の苦痛



のみならず後で耳にし目にふれた者にも苦々しい限である。

遺物包含地は、目慣れた者にも最初の発見は困難だが、關東地方―特に東京灣霞浦附近に多い貝塚は、地形と地方の事情から、案内はなくともそれと目當のつけられる場合が多い。貝塚は後にも説く如く、石器時代の人々が食料にした貝類が、自然と居住地の附近に積まれて、今日遺跡発見の、最も顯著な目印となつたものである。黒い畑の土の中に、點々として散布した貝殻の破片は、石器時代の研究に興味を持たない者にも、厭でも氣附く特長であるが又その所在地が、大抵定つた地形の個所にある。

例を關東平野にとるに、今日殆どすべて水田となつてゐる沖積地は、石器時代當時の入江で、海水が白鷗の夢を載せながら、靜にさし入つてゐた個所である、故にこゝには大體に於て遺跡はない。陸地測量部五萬分一の地圖を開いて、十米のコントロールが入つてゐる所を辿り、これを當時の汀線と見立て、大した過はない様である。但この標準は必ずしも全國一樣であるとは云へない場合があり、東北の或地方の純石器時代遺跡などで、標高六七米の個所にある例もある。

關東平野では多く十米のコントロールは、洪積期臺地の裾を意味してゐる。こゝから急に數米高くなつて、上は平な武藏野に連つてゐる。この臺地の面が、當時の生活地域であつたのである。

沖積地と洪積臺地の差異は、東京市内の地形から説明する事が出来る。日暮里から上野公園の高臺を連ねて、本郷、小石川、及麴町の一部を含み、麻布、芝から品川に及んでゐる、所謂山の手の一帯が、洪積期の臺地である。これに對して三河島、下谷、淺草、神田、日本橋等の、下町一帯が沖積地で、これ等は何れも隅田川のもたらした土砂の運搬で、比較的近代に到つて次第に出來上つた地盤である。

貝塚は、海を生活の要素にしてゐた人々に依て築かれる。この場合海は靜穩なる入江でなければならぬ、若しそれが風波の荒い海岸でもあれば、今日に於てもそうである如く、たゞ生活の障害にしか役立たないのである。故に全國的に云つても九州有明灣沿岸とか、四國兒島灣附近とか、關東では東京灣霞浦に沿つた所に限つて多い、そして更に部分的にも十米のコントロールが出入して、臺地壁がなだらかに沖積地に臨んだ場所である。貝塚は臺地の



北向斜面に多いと云はれてゐる。その理由として或人は、南向斜面の海から生活資料を得て不要の貝殻は住居の後方の北斜面に捨てた爲とも云ふ。當否は別として、今日舌状に突出した臺地の根に、兩斜面に跨つた貝塚は相當多いものであつて、貝層が北側に厚い事も例の多い事實である。臺地の傾斜度も貝塚の存否に密接な關係があるらしく、あまりきは立つた高い丘にはそれが少い。段々慣れて來ると、汽車で通る平地の傾斜などで、あゝこゝいらには貝塚がありそうだ、などゝ氣がつく。又自分の作つた遺跡分布圖が、段々賑になつて來ると、此處と彼處の間にはあるなどゝ、次第に自信も出來て來るのである。

##### 五 遺物の採集

いよゝ遺跡のある地點へ着いて、先づ第一に取り掛るべきは、貝塚ならば地表に散つた貝の破片から、大體貝塚の大きさを調べる事である。中には數丁歩に互つて、丘一つがすつかり遺跡である様な場合もあるから、その縁を歩き廻つて大體の概念を得て置く。又貝の散り工合で、時には幾つかの遺跡群ではないかと思はれる様な場合もある。二つの貝塚が、隣り合つてゐる場合もある。いきなり遺物の地表採集に夢中になつては、こんな關係が遂に分らずじまいに終る事も多いであらう。大體の廣さが分つたら、地圖の上に

磁石を合せて、自分の歩んで來た道を思ひ合せ、正確な地點を記入する。この仕事は、不知不知の間に最も正確な分布圖を作る事になるのだから、必ず實行すべきである。陸地測量部の五萬分一の地圖ならば一二萬五千分一があれば更によいが大凡の大きさも記入出来るのである。そうして地圖の餘白かノートに、村の人から聞いた俗稱や字名を記入して置く。然しこれは先に學界に報告してある地名があれば、地點の差以外は、必ず先のものに依る可きで俗稱が自分の聞いたのとは異ふから、自分はこう呼ぶと云ひ出したのでは、將來の不便を増すのみの効果しかない。

貝層の状態を知る爲には、持參したステッキで、地表から探りを入れて見る。貝層の部分ならば、押してゐる手へゴツ／＼と手筈がある、そうして土混の貝層に行けばその度合が減じ、やがて貝層下土層をスツツと重く押してゴツ／＼と盤に當る。盤とは關東では洪積期のロームの事で、赤褐色である。これは多少粘りがあつて、抜いたステッキの先に赤くついて來たりする。貝層が稠密で深ければ、ゴツ／＼の手筈が強くなつて、段々身體をのしかける様にして、ステッキでは通らぬ様な場合が多い。又この間に土器片に觸れれば、ゴツ／＼と



ひょいて、一二度ついてゐるとポリ、と割れて又通る様になる。石片などに當ればそれ切りで、いきなりガツと強く来て止つて了ふ。こんな時には少し場所を變へて探つて見る。探り（ボーリング）はなるべく多く場所を變へて試みるとよい、大體貝層の深さやそのしまり工合、又場所による深淺の度合が會得出来、時には大貝塚が幾つかの遺跡群であらうかなどとも推察出来る場合もある。一つの遺跡と二個以上の遺跡が並んでゐるものとは、勿論こゝから採集する遺物の取扱方を別にすべきである。

遺跡が貝塚でなく、遺物包含地である場合には、こう簡單に表面からの診察は出来ぬ、若しそれが耕作されてゐる土地で、又包含層が地表から浅いか上の土が削り取られてゐる場合には、後述する遺物散布地と云はれる状態になつてゐて、地表に土器の破片が無數に散布しなすに満たぬ破片になつてゐても、目慣れて來ればすぐそれと見分ける事が出来るのである。だから注意しながら歩き廻つてゐる臺地の上で、貝塚の貝と同じ様に、ひよつくり出會して發見する例も少くはない。又採集に興味が乗つて來れば、この偶然な發見が面白くて、

盛に歩き廻る様にもなる。

土器片と共に、地方に依ては石鏃に使ふ黒曜石の細片が、一面に散布してゐる所もある。こんな地方でも、何處にでもやたらに黒曜石片があるのでなく、石器時代の當時、人々が利器を作る爲に持運んで來たのだから、その存在が即ち遺跡を意味する場合が多い。又形のよい矢の根石が、徳川時代の昔から人々の興味を惹いて、これにまつはる色々の傳説や迷信も所によつてはあるのだから、矢の根の出る畑で充分村の古老にも小學校の子供にも通ずる場合がある。

遺物散布地に出會たら、先づその土器片の分布してゐる地域を歩き廻つて大體の面積を考へる。畑の畦などで土地が斷切られて、斷面が現れてもゐる所があれば、そんな所をよく觀察する。地圖への書入は貝塚の場合と同様である。

遺物の包含が地表から深く、開耕の鋤もとどかぬ所にあるか、又は未開拓の原野などでは遺跡の發見は偶然な機會か、永くその地方に居住して、村の事に充分通じてゐる人の口からでもなければ、容易に覗ひ得ない場合が多い。然しそれでも永年には、あそこの山の木を



おこした時、こんな壺が出て来たとか、あの畑には土器片はないが、星糞石（黒曜石の破片をこんな名前で呼んでゐる所もある）なら掘出すとか云ふ事を耳にもする。又溝を作つたり何かの土木工事の際に偶然発見する事も相當に多く、一度地點が分りさへすれば、同志相傳へてこれを記憶や記録に残す事も出来る友人お互に連絡をとつて置く利益の一つである。

遺物包含地は又清水湧出地に密接な關係があると云はれてゐる。信州に於けるその分布の例が諏訪史に擧げられてゐる。これなども手掛りの一つである。

貝塚か遺物の散布地では、必ずしも調査に發掘を必要としない。所謂地上採集で、初心者やアマチュアの方々に盛んに用ひられた方法である。

地上採集は名の如く、遺跡の地上をさまよひ歩いて、耕作の際や自然的に露出した遺物を拾つて歩くのである。掘れば地下に埋もれてゐるものを、自然に現れて来るまで待つて、これを拾はうと云ふのでは、何かまだるつこい様にも考へられるが、單に色々な遺物を手に入れると云ふのでは、反つてこの方が廣く獵る事が出来るだけ、收穫の多い場合もある、それに發掘と云へば混雜で、先づ専門的な人以外には弊害もある事だから、初心の方には地上採

集をおすすめする。そうして段々事に慣れて、自信も出来たら、そろ／＼發掘にかゝるがよい。

地上採集をする場合には、前述の如く一應遺跡の吟味をすませて、遺物散布の範圍を丹念に地上を見つめながら歩く、畑地ならば畦の間を、段々と往復しながら、土器片や石の欠などを、それも一々手で觸れてゐては、つい折屈みにおつくうにもなるから、杖の先で當つて見る。つまらぬ破片と思つても、起して見ると土版だったり、何でもない石片と見えたものが、思ひがけなく石劔の折れだつたりもする。このあたりが表面採集の面白味であらう。

發掘に依る場合は單なる土器の破片にでも、相當の意義があるのだから、掘出した遺物は全部持歸る必要があるが、表面採集ではその必要がなく、特に珍しいものか、氣のついたものゝみを持ち歸る。又一つの遺跡を代表させる意味で、大型な土器片を數種持ち歸るのも、段々意味が分つて來て面白い。そうして關東の様に貝塚の多い場所では、この方法で一日二三ヶ所の遺跡を歩くのも困難ではない。但これは人が行つて拾つた直後では珍しいものが出てゐても、大半は拾はれてゐるから効果は薄く、時々間を置いて、何度でも同じ遺跡を訪れ



る必要がある。

表面採集にも段々慣れて、少し度胸も出来、又自然自分の行きつけの遺跡の範囲も定ると、百姓などに顔見知になつて、頼んで置いて何か珍しいものが出たら取つて置いて貰ふ様な事にまでなる。まあこれは席上採集とでも云ふのだらうか。この方法は、私は最も避く可きものゝ一つだと考へる。何も百姓の好意のものを貰つて悪いと云ふのではない、埋もるべきものがこれで世に出れば結構だが、たゞ無償でも貰へまいと云ふ様な當方の遠慮から、つい遺物は賣買の形で受渡しされる様になり、遂には百姓もその氣なら、こちらも何かいゝ買出物でもする氣で、小錢を携へて遺跡へも行かず、つい百姓家を獵り廻る様な事にもなる、これでは何の爲の趣味なのだか分らない。もつとひどいになると、自分が頼みつけの百姓へつい友人が先廻りしていゝものを買つたと云つて、友達同志いがみ合ひ、又百姓には、研究の爲だと威かして、無理な事もすると云ふ事を、時々廻つた自分等も耳にする。物を集める事が主になつては、何れにしたところでコレクトマニア以上にはなれない、物よりも物に教へられる事を大切にすべきである。

## 第二節 遺跡の發掘

一 發掘の前に 遺物の地上採集を一步進めて、行つた遺跡で小さいながら發掘して見るとする。この場合呉々も注意すべきは、遺跡は云ふまでもなく、數千年來吾々に、過去の文化の眞を傳ふ可く保存されて來た場所である、然し一旦鋤を入れてしまへば、最早永久にその祕密を失つてしまふと云ふ事である。掘り出した遺物ならば、何處にあつても何人が所持してゐても、そこへ行きさへすれば見る事も研究する事も出来る。壞れれば、つぎ合す事も出来る。然し遺跡はそうはゆかない、諸君の鋤の一上一下毎に、事實は永遠に消滅して、ただ諸君の記憶のみが残るのである。

- 1 初心者には相當斯學に對する理解が出来るようになるまで、發掘を見合す可きである。
- 2 發掘の最初數回は、専門家が相當經驗ある先輩に就て行ふ可きである。
- 3 必ず遺物採集を目的として發掘すべきでない。

過去の専門家の發掘を除く殆どすべてが、單に遺物の採集を目的として發掘を行つた。そ



の結果、吾々は今日遺跡に就て、又遺物自身に就てすら、如何に少しの知識しか持合せてはゐないであらう。幸に我國は石器時代の遺跡が非常に多かつた、故に將來の注意に依てはこの研究を學として體系づける事が出来るであらう、そしてその責任は諸君にある。

遺跡の發掘は遺跡自身の性質を明にする爲に行はる可きものである。如何に發掘された遺物が多量になつても、遺物の研究のみで石器時代の全文化を明にし得ない事は明かである。

然し全然諸君に發掘を中止して貰ふ譯にはゆかない。専門家と云へば全國に數人の程度に止る日本の現状で、諸君の助力なしでは到底足の早い關係諸學科に伍して、學としての形づけをして行くわけには行かないからである。趣味から入つた諸君も、又關係學として研究しようとしてゐる人々も、共に鋏を執つた同志となつて貰はなければならぬ。發掘に對する理解とは、たゞ刻々に壞されてゆく遺跡を、記録に留め得る事である。

遺跡を如何に見、如何に記録するかと云ふ事は、非常に簡單な事の様ではあるが、又非常に困難な事である。發掘者は寫眞とスケッチが可能でなければならぬ、そして遺跡の層位的な意味が讀取られなければならぬ、又層位による遺物様式の差異が觀取出來なければ

ならない。最後にこれを記録に留む可き用語を心得なければならぬ、尙望むならばこの記録を學界に報告すべく連絡を持つてゐなければならぬ。

學會への連絡は、我國では紹介者なしでも東京人類學會並に考古學會に入會する事が出来る。又用語を知る爲には從來この方面に稍遺憾があつたが、本書索引を利用して各説の部に就て一通りは理解される事も出来るであらうし、又先輩の業績に常に目を通して居られれば、次第に了解されて來るであらう。寫眞やスケッチは丹念と器用で出来る。然し遺跡の層位的意味を讀取る事には相當の經驗が必要である。例へば如何なる状態にあればそれを中間層と認めて、上下の遺物を區別して扱ふべきか、又各層位蓄積の状態を如何に解すべきか。これ等は先づ先輩に就て一應は指導を仰ぐべきである。更にこれ等層位に現れた遺物様式の差異を、どの程度でスタイルの差と認定するかは全然その人の經驗に依るであらう。我國にはこれ程多量の遺物が發掘されてゐるが、未だ頼るべき分類がない。こゝではたゞ、各人自然科學者の態度を持って、出て來たものを正確に觀察記載すべきであると云ふ事のみを述べて置かなければならない。



二 試掘の實際 最初の経験には、先づ諸君が持参した小型の鍬を用ひて小規模に發掘を行ふ。先づ土地の持主に交渉して、耕作の邪魔にならぬ地域を二平方メートル借り、その程度のもので農作に被害がなければ、地主も理解して面倒なく話はずくと思ふ。而して發掘には秋から春先までの植付のない時期がよい。山林ならば木と木の間か崖の際などもよい。存外畑や山の崖際などでよい層位に逢遇する事もある。若し場所が自由に選擇出来る條件にあるならば、餘り傾斜の急でない遺跡の裾を選び度い。丘の上の遺跡は中央が頂上に當つて、反つて層も浅くすぐ地盤にぶつかる場合が多い、そうして貝塚では、無暗と貝層の厚い所は、掘る爲にはガラ／＼と氣持はよいが、結局層の變化や遺物包含の状態が悪い事がある。経験の深い人はむしろ貝層下の土壤層の厚い所を覗ふ。遺物包含地の、表土だけが無暗に厚い所も困りものである。これ等はステッキのボーリングで大體見當をつける事とする。

發掘には先づ表面の常に耕作されてゐる土壤—約四五寸を取り除く。そうして他に土除場がなければ、借りた土地の半分程を、表面から五寸なり七寸なりづゝの厚さで次第に土を取つて行く。掘上げた土は他の半分の場合に置くこととする。これ層位的な發掘法で、層の變

る毎に含まれた遺物全部を別な袋に入れる。袋には荷札が附いてゐて、これに一々その層位を記入する。1・2・3等の順序である。又後に同じ遺跡を掘りつゞける懸念があれば、(試掘) 1・2でもL<sub>1</sub>L<sub>2</sub>でもよい。I等の字は發掘地點を意味し1・2等はその層位を示してゐる。又同一遺跡の場所を變へるか、それが遺跡群と考へられる様な場合には、A、B等の地點を意味する符號を更に記入する。これ等の符號は各自が一定しておけばよい。

層位的に上から發掘して行く場合、四壁の状態に注意して居れば、中間層があつたり、貝層の状態が一段くつきりと變化して行くなどの事情が觀取される、これが明かにさへなれば、この自然的な層位に従つて、例へば1・2の二層が上層、3が中間層4・5が下層などと云ふ事が理解出来る。貝塚ならば1・2が土混貝層でシ、ミ貝が多いとか、3が純カキ貝層で遺物包含が少量であるとか、その下の4・5が貝層下土壤で遺物が多いとか云ふ事が分る。そうしてこの場合、必ず注意すべき事は、最下層の地盤まで掘り下げて見る事である。尙出來得べくば赤土の地盤を五寸でも七寸でも穴を明けて、赤土を隔て、更に黒土の土壤層がないかと云ふ事を確かめて見る事である。



我國では一般に、石器時代遺跡の多い東北關東共に、赤土色をした地盤に刊つて遺物は盡きてゐる。關東のローム層がこれで、この地層は多分洪積期に蓄積されたものであらうとされてゐるから、本來ならばこゝに刊つては早石器時代遺物はない筈である、然し風や水の作用で、二次的に蓄積された事もあると見え、まれにはこの下にも遺物の包含層が発見されてゐる事がある。こんな遺跡は、一層重要な意味を持つものであるから注意し度い。又貝塚等を掘つた場合、貝層が盡きて止める様な發掘法が従來多く用ひられてゐた、これはこゝまで來ると身體の勞れと興味の減少があつた爲であらうが、極めて愚な事である。多く遺物の包含層は、貝層下の土壤にある、又人骨等の埋葬も、こゝにある場合が多い下限は必ず赤土の地盤まで及ぶ可きである。

三 發掘の方法 試掘に慣れて、層の變化の關係も分り、出て來る遺物にも一應の知識が出來たところで、少し組織立つた發掘にかゝる事とする。發掘には前述の如く二位の人数で當る。

先づ遺跡のある土地にいたら、地主に交渉して發掘の許可を得る。この場合多く發掘に

伴ふ、土地の損害の代償が先に問題となる、山林ならば掘り倒す樹木の代を出すとか、原野ならば後の始末をよくする位で話がつくかも知れぬ。然し耕作された土地となると、その年の農作物の代償の他に、時には數年間のそれを請求される事もある。これは地盤を割る程深掘されては、後々施肥其他の關係で、損害を生ずる場合もあるのだから是非がない、何れにしても五坪十坪の代償なら、そう大した事でもないだらうから、出來るだけは先方にも氣の済む様に話をつける。農家の人が秋の收穫を前に、みす／＼育つたものを刈取られる様な事は損徳を超越した苦痛があるのだから、この邊はよく理解しなければならぬ。又發掘の範圍はよく考慮して、土を棄る爲の場所も豫め考へて置かなければならない。

地主の承諾を得たら、その日歸りの仕事でない以上、宿所の心配をしなければならぬ。幸ひ宿か町が近ければ、そこでは上等でなくとも宿屋が見つかる、然し全然の村ばかりだと、よくいらつしやいましたで迎へて呉れる宿屋はない、駄菓子屋か荒物屋の二階を、話をつけて泊り場にする様な事になる、然し出來れば一層地主の家へ頼み込んで、その一間を借りられれば、色々な點で便宜が多い一日二日の泊りなら、遺跡は多少遠くとも、乃至は少し高上



りでもどうしてもよいが、四五日にもなる仕事だと、こんな事が相當影響する。

この程度の發掘だと、どうしても人夫を必要とする。人夫は土地に慣れた人があればと云ふのだが、下等に物取り主義の採集に使はれて來た人夫では、反つて始末にいけない場合がある、どうせ自分が仕込んで使ふ氣で、一人は地主の家からでも出て貰へば何かにつけて都合である。

人夫の數は一人に一人と云ふ所が、發掘を丁寧にする爲には手頃で、先づ一人で二人使ふのが精々である。徒に發掘を急いで四人も五人も一人を使ふ事はよくない。精々二人で出掛けて行つたのなら。三四人か四五人も頼んで、一人は雜用か交代の爲に置く様にした。人夫の一日の賃金は、所と時期に依て異つてゐるが、東京附近ならば三圓か三圓五十錢見當で、地方ならば一圓五十錢から三圓位と思はなければならぬ。辨當向ふ持であるが、勿論土地の人が頼む程安くはない、それでも農繁期などでは中々人が得られないのである。

發掘の範圍は、遺跡の深さと地形に支配されるが、普通四五尺の深さがあるものとすれば一二人の人夫を使ふに二米四方、約一坪程掘る豫定でかゝればよい。以前は出て來る珍しい

遺物を取るのが主で、随分亂暴に掘り散らかしたやうであるが、それはむしろ發掘よりも遺跡の破壊である。必ず戒心しなければならぬ。遺跡の層が案外淺く、地形が傾斜地で土を棄てるに利便ならば、時には一日二單位（二米平方の地域二つ）掘れる事もあらう、二人で行つて人夫を倍使へば勿論これの倍位の地域が發掘出來る譯である。

人夫に先づ一日の豫定分の表土をはねさせる。そうして上から五寸乃至一尺位づゝの深さで土をはぎ取つて行く。一層を終る毎に全部の遺物を貝塚ならば貝の種類に至るまでをまとめて袋に入れ、札紙に地點層位を書入れる。この時人夫は隅をきれいに取らないのが普通だから一々注意する。遺物も土器の破片程度なら側で注意して掘出させて置いて差支へない。然し段々下層に行つて大型な土器片や、又は完全と思はれる土器が現れて來たら、人夫の手を止めさせて、自分で穴に入つて小型の馬鍬か移植鋤で注意して周圍から掘り起す。土器が土中にある場合、多くは水分を含んで非常に軟弱である。時間が許せば半日でも風にさらして乾すか、——この間に寫眞を撮つたり地點をノートしたりする——周圍を廣く取つて土ごと起す様にして注意する。よく土器の形はしてゐても、そのまゝ割れて埋もれてゐる場合が



ある。こんな時には特に破片に注意して、そのまゝ一つの袋に収める。歸宅後繼合せれば完全になるのだから、どんな小破片でも取らなければならない。

骨角器を出す遺跡は地方的にも定つてゐるが、こんな所では——主として貝塚、——よほど注意してゐて人夫の手で損じさせない様にする。又人骨らしいものが発見された場合、若しすぐ専門家を呼ぶ事が出来ればそのまゝにして置いて應援を頼む。發掘は他の場所をつゞけて居る。そう云ふ事が出来ぬ様な時には自分で、先づ一個體半日はかゝるものとして充分丁寧に掘る。經驗が足りないといふ指骨や齒ほどの小さなもの、又は頭蓋骨の小破片などを見落すので、後で復元に役立たない場合が多く生ずるのだから、こんな點も氣をつける發掘具は指先と竹箆以外は使はない事。

完全土器や人骨出土の場合には、出来るだけ寫眞をとつて置く、地點の一部分を寫す場合には必ずスケールとなるべきものを入れるべきである。寫眞はこの他全景、地勢、發掘状態等を撮る。

實側圖は發掘に先立つて遺跡の全體を步測でもよいから測量し、五万分一の地圖に當ては

める事が出来る様にする。そうしてその遺跡圖中に發掘地點を明記し、後で行つた者でもその圖さへ見れば、何處が發掘されてゐるかといふ事が分る様にする。そうして別に發掘の層位を記入し、主要な遺物は何處から出土したかといふ事を圖の上で明かにして置く。こんな仕事の爲には、諸君自身が絶えず鋤を執つてゐる事は出来ない。むしろ良監督となつて、記録や注意の上に缺けたところがない様にしたい。

發掘の下限は、前述の如く地盤まで掘り下げて止めるのであるが、注意しないとおろそかになる。近時關東地方の貝塚の貝層下から、竪穴住居址を發見してゐる例などもあるから、地盤は必ずさらへる事である。

發掘の方法には、前述の層位的方法の他に先づ細長い試掘溝を掘つて、自然的層位の状態を明かにした上で、次第に前方に掘り進む方法もある。豫め遺跡の状態が明かでない場合にはこの方法で無駄をしないで済む事もある。非常に範圍を廣く掘る場合、階段式に第一層を廣く掘り、二層をその半分の面積に、以下三層四層と段々に、發掘面を狭めて行く様な方法もある。然しこれは一番重大な意味を持つ下層を、最小範圍でしか掘らないのだから、餘り



我國では適當な方法ではないと考へられる。第一地點を發掘して、これに隣つた第二地點を掘り進む時その土で前の所を埋めて行く様な事も効果的であるが、何れも大發掘の際の心配である。それよりも、どんな地形の所では、どんな範圍と形で掘つたらよいかと云ふ事が、實際的な問題である。

一つの丘が幾つかの遺跡群で出来てゐるかの如く思はれる時、一二單位づゝ場所を違へて發掘して、相互の關係を見る事も適當である。又一線上を連續させて、遺跡を横斷するとか特に急傾面な地形の所では、細長く上から溝を作つて下るとか、丁字形の溝を作るとかの方法もある、然し何れにしても實際に當つて、地形、事情、發掘日數等を考慮して決すべきで、その基準としては層位的に遺物を收得し得る便宜を考へる事と、自分自身が考へる人になる事である。

### 第三節 遺物の處理

一 採集の遺物　ピクニック代りの發掘では、何れ採集される遺物は選擇されてゐるので

から、袋に一二の收獲を誇つて、その日の家土産くわどにすれば事は足りる。又持參の鋤で試掘をしても、袋が五つ六つになつて肩が重いで済む、然し數日に互る發掘を行つて、その全部の遺物を持ち歸ると云ふのでは、相當發掘品の處理に思考しなければならぬ。

發掘品が全部荷札付で袋に入つて居れば、その日／＼の分は宿の庭先にも積んで置く。そうして破れ易い完全土器等は、特に自分の室にでも置く。骨角器や小型の遺物は、袋の中では份れたり損じたりするから、煙草でもキャラメルでも、有合せの箱に入れて別にする。荷造りの時にはビール箱かサイダーの箱を買つて、その中に一般遺物はきちんとつめて釘付にする。若し遺物を一々木棉袋に入れないで、發掘地からは、かます入にして宿まで運んで居た時でも、箱一杯に遺物をつめてしまへば、その割には輸送しても中のものは壊れない。但この場合箱には充分繩掛をしなければならぬ。そうして遺物の隙間には木削かもみ殻を出來るだけ多くつめる。

壊れ易い完全土器や骨器などは、出來れば持參で歸つて來る。若し或地方の二三の遺跡を點々して發掘する等の爲、その煩に耐えない場合には、滞在中土器を陰乾にして置いて、い



くらか堅くなつた所で二重箱にするなり水張するなりして、隙間なく木削もみ殻等をつめて送る。送るのは運送屋に依頼すればよいが、近ければ村人のついでで車運んで貰ふ等適宜な方法による。

歸宅の後發掘物を整理する場合、その日に持参した程度のものであれば、すぐに水で洗つて日陰で乾かす。特に土器が水分を多く含んでゐる場合、數日そのままで乾して置かなければならない事もある。

發掘が數日に亘り、運送に托した荷が數日して届いた場合、なるべく早く箱を開けて發掘に對する興味が減少しない裡に整理にかゝらなければならぬ、發掘品を全部持ち歸る方法では、すぐにビール箱に二つや三つの荷物になる、これを少時放置して興味がそろ／＼抜け出した頃荷をほどいては、面倒な氣が出て折角掘つたものをそのままにする様な惡癖もやるのである。

二 遺物の整理 袋入の遺物は、先づ一袋づゝ水洗にかゝる。日當のよい庭先で、バケツの水を時々代へながら、片手に刷毛を持つて、乾いた後遺物を手にしても、手が汚れない程

度まで泥を落す。刷毛は靴刷毛では毛が剛すぎて、土器の面などを磨滅させる心配がある。然し齒刷子では柔かすぎる。土器の破折面は氣をつけてしないと、後の接合の妨となる場合がある。

洗ひ終つた遺物は平箱にとつて乾す。袋についた荷札の文字は、この際忘れずに平箱の兩側面に記入する。

平箱は遺物を處理する爲の蓋のない箱を意味してゐる。先づサイダー箱を平に二つに切つたものと思へばよい。大きさは一尺に二尺内外の、然るべき廢物利用でもよいが、各自一定して置く必要がある。深さはサイダー箱そのままでは深すぎるので、先づ三四寸の所である手を掛ける所が兩側にあれば更によい。

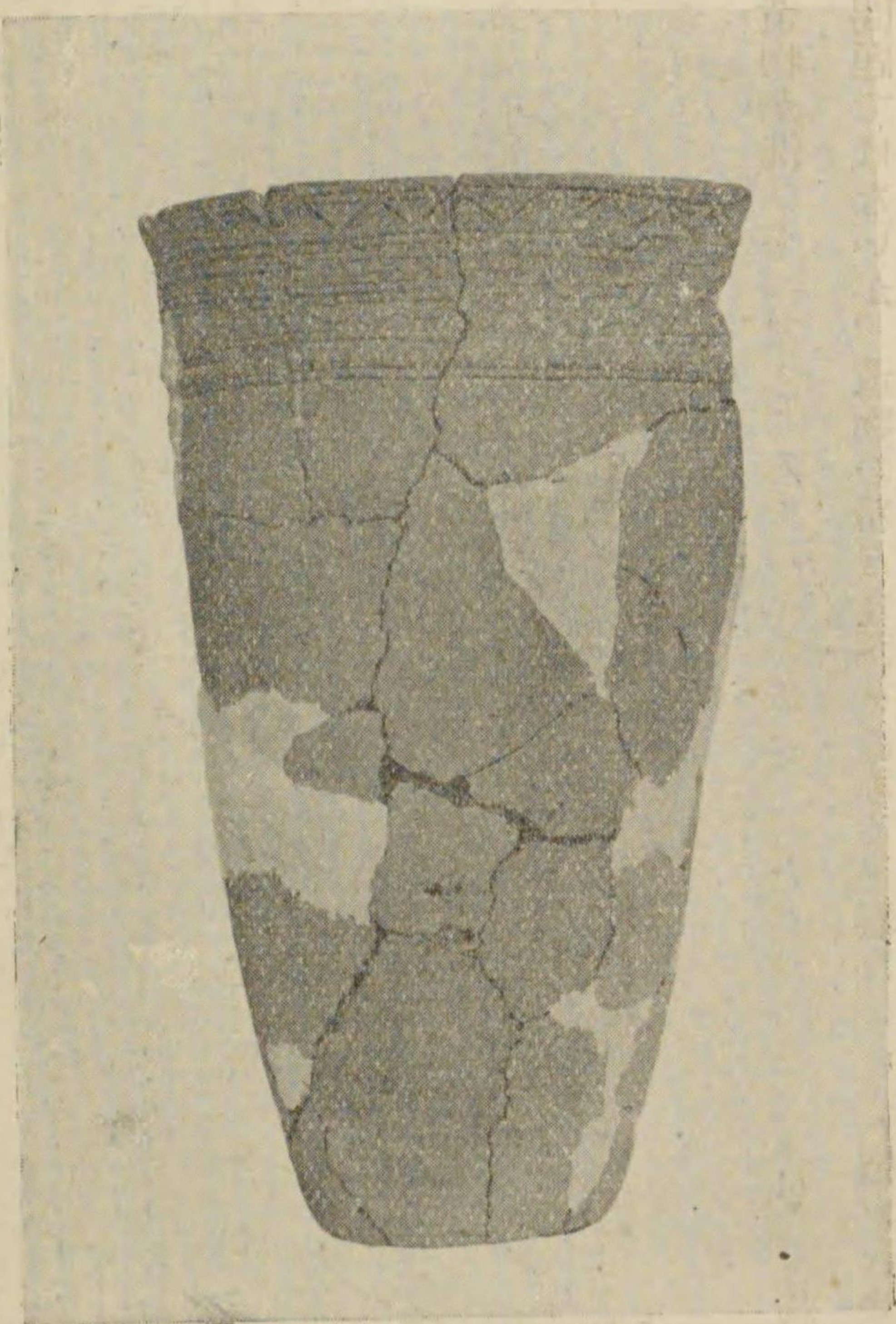
土器や骨角器等には、應々表面に朱色を塗つたものがある。これはたとへ色がうすれてゐても、水に入れるとはつきり見えて來る。こんな時、よし破片でもそのまま洗はずに乾してしまふ。又朱で描いた文様なども、今迄の發見例よりは例の多いものらしいからよく注意すべきである。



東北地方から発見される所謂陸奥式土器は、表面に煤様の黒色が塗布してある事が多い。一々の破片を特別にしても大變だが、相當形のわかるものは、水に入れずに乾し上げて、刷毛で擦つて土を落すと、きれいな光澤が出て来る。之は一旦水に入れてしまへば駄目である。遺物が段々平箱に移される様になれば、これを地點別、層位別と箱を變へて積み上げる。これ等の事は相當根氣仕事で、一日先づ三袋とか五袋とかの水洗しか出来ぬものと思つて掛つてよい。然し斯うして自分で一々の遺物を洗つてゐる裡に、色々發掘では氣のつかなかつた事實を發見する。往年鯛の頭蓋骨に打込んだ骨針を發見したのも水洗の際であつたと云ふ。平箱の数は一々の層位別だから相當數必要で、この製作費も豫め發掘の場合は豫定に入れる可きである。

遺物が洗ひ上つたところで、その復元、接合にかゝる。土偶とか骨角器などの特別なものは問題ではないが、遺物の殆ど九割を占める土器片を、一々繼ぎ合せて見る事は、一層根氣の仕事である。或知人は一個の土器を完全にするに一ヶ年を経たと云つてゐた、然し發掘法がよく、全部の遺物が持つて來てあれば、この際幾つかの完全土器を作り上げる事は容易である。

先づ各層の土器片を、廣い臺の上か椽先に出して口邊、又は底部を含む破片と然らざるもの、三つに部類分けする、そうして文様、土器の色、厚さ等で更に分類して、お互に相似のもの



第一圖 土器片の接合

この土器は大型な圓筒形土器類で破片は重量は  
この爲接合し悪いものである。空隙を補つたは  
石膏。(越中水見貝塚發見 人類學教室藏)

ものを合せ  
て見る。び  
つたり喰合  
つた所で印  
をつけて、  
次第に口邊  
腹部、底部  
と求めてゆ  
く。繼ぎ合  
すのは最後

にする事で、一部分づゝ繼いでゆくと、最後にゆがんだ土器が出来上る。



土器を継ぎ合す膠着剤には、考古學者が各々苦心する所で、丈夫な漆は操作が困難であつたり、強すぎて接合面の兩側の土質を傷めたりする。水に強い臘は熱に弱く、熱に強いセルタスは濕氣にさへ耐えられない。少し膠着度は弱いが便利なのはメンダインで、チューブに入つたものを少しづつ、押し出して、割目の兩側に塗つてつける。これならば乾きも早い。その代り、少し重量のある土器や大きなものには不適當である。ツアツボンラックはアルコールとセルロイドを主成分としたものだが、その濃度を自由に出来るのと、乾きがすこぶる早くてよい。然し厚手の大型な土器などは、やはり漆程度の膠着力を必要とする様である。この他にも押し糊、膠、千代糊などと稱されてゐるもの等があるが、その場合と便宜で次第に經驗を積んでゆかれるであらう。

土器の復元で破片が足りなければ、石膏を以て空處を補ふ。これは主として結着を強くする意味で、無暗な形の復元を試みて偽造にまぎらほしいなどと云はれぬ様にしたい。石膏は水に溶いたものを、外側にボール紙等をあて、内から注ぎ込む。乾いた所で喰み出した部分をナイフ等で削り落すのだがこの場合ボール紙代りに文様を印した抽土を充てたり、又はナ

イフで文様を描いたりする事は一得一失で、むしろ成可くしない方がよい。但石膏に土器に似せた色着けをする程度の事は、寫眞に撮す時の事なども考へて差支えないであらう。

以上の整理を終つたら、特に主要な遺物には、一々發見地名、地點、層位等を簡単に記入する。番號にして、別にカードに地名と備考が書入れられれば更に妙である。平箱の破片は後に混入を避け得られさへすれば一々に記さなくとも、箱兩側へどちらに積んでも見得る様に地名を明記する。

三 遺物の保存 平箱外の遺物は、古筆筒などを利用して收藏するのも悪くないが、硝子の入つた陳列棚の作り得る場合には、先づ棚を上下の二段として、上段には硝子戸をつけた主要遺物の陳列に充て、下半分は奥行を深くして、平箱がこのまゝ收められる様にする。これが藥屋の百筆筒の様に、多くの抽出になつて居れば更に結構で、平箱から又入れかへて表に地名地點を記した貼り紙をして、永久的な保存の場所に出来るが、それでは棚の製作費が中々に張るから、學校其他の公共的な所でない以上、たゞ木の引戸がついた平箱收藏場でよい。完全土器や石器等の數に比し、平箱入の遺物の方が中々多くなるのだから、その入



れ場を考へて置かなければ、こちらの方はつい不始末に扱はれる。たゞ眺め楽しむのみの蒐集家でなければ、破片の貴重さが完全遺物に殆ど變りないと云ふ事は理解されるであらう。

#### 第四節 遺物と資料

一 發掘物と資料 發掘的調査で得た遺物が、いよく陳列棚にも収まるまでに整理が了つたら、遺物としての研究に取りかゝらなければならぬ。

遺跡と遺物の差異については後に論ずるであらうが、遺物は多くの場合、そのまゝでは研究の材料でない事がある。諸君が手づから發掘し來つたもので、それが一つの主観の下に行はれたならば、その約束の許では、收められた遺物の全部又は一部分が諸君の研究の材料となり得る事がある。例へば遺跡を層位的に發掘して、各層間の土器の文様に現れた、編年の推移を見ようと欲するならば、その得た土器片は、發見層位を亂されざる限りそのまゝ研究材料である。又層位による各種遺物の伴出状態を明らかにしようと思へば、その條件で選ばれたものが研究の爲の材料となる。隣り合つた遺跡に就て、その遺物様式の共通性、又は相

反性が見られようとすれば、その條件で各々の材料が諸君のものとなるであらう。然し多くの場合むしろ問題は豫想を超えて、持ち來された遺物を色々と處理してゐる内に見出されて來るのである。即ち遺物の中から研究の材料が見出されて來る事となる。

遺物と材料は明かに異つた意味のものである。研究材料は同一遺物群の中からも、立場の相違、觀察的の差に依て殆ど無限に見出されて來る。勿論こうした事がなければ、先史考古學は學としての存在を疑はれる。

遺物と材料の意味の差異が明かになる事に依て、諸君の遺物に對する扱方が、從來のそれから別になつて來なければならぬであらう。遺跡を發掘した場合、全部の發掘遺物を持ち歸る事をすゝめたのもこの爲である。又諸君の收藏されたものを、進んで同志に開放さるべきであると説こうとするのもこの爲である。

我國に於ける所謂珍品考古學徒と稱されたアマチュア達は、珍しいものを發見する事が、斯學の目的と誤認した、そうしてその餘弊は、發掘遺物の公開をさへ喜ばない様な風潮を作つた事がある。珍しい形のもの、それが他種遺物に比較され、その連鎖關係を明かにされ



た場合に初めて意味を生ずる。そうして或る考へ方から一つの説明が與へられた時、初めてその主観の下では目的に近づいた事となる。珍しいきりの、他に比較する材料のない様なものは、反つて何の學の意味を持つものでもないであらう。

二 郷土博物館 諸君の遺物は同志に公開さるべきである。それはその所藏を誇らうが爲ではない、一つの實在から多くの事實を見出さんが爲である。そうして更に進んでは、各人の所藏品は、漸次地方的に共有されて行かなければならない。一町村に二人以上の同志があれば、發掘の行動を共にすると同時に、收められたものを一ヶ所にして、研究の行爲も共同にさるべきであらう。やがてそれが郷土博物館の先驅ともなれば、又郷土研究會の前提ともなるのである。

實際問題から云つても、前述の如く、相當秩序立つた發掘には相當の費用と人手を必要とする。又その後の整理にも、誰が見ても分る様にするまでには、一方ならぬ物件費も伴はなければならぬ、これは各人各々が負擔しては、耐えられない様な場合を生ずる。

郷土研究會又は博物館を含む可き地域的の廣さは、初め一村一町内から發生しても、漸次

廣められて、少くとも一郡を單位にする程度に成長させなければならぬ。一矢弱くとも結合しては強大となる。一郡で一ヶ所の遺物陳列所が出来れば、相當有力な會となつて、當局に迫つて公會堂の一室を借りる事も出来るであらうし、學校の一教室を閉ぐ事も出来るであらう。又時には専門家を招いた實地指導も受けられる。要は物慾に即せない諸君の公明正大な態度と、學に對する向上心とにある。遺物は如何に積み重ねられても、それだけでは諸君は決して學問する人にはなれない。研究の材料はその中の奥深く潜んでゐる。否諸君の心の中にのみ潜んでゐるのである。

三 資料の扱方 遺物の中から材料を選び出し、これを直接研究の資料にしようとする場合遺物自身では蒐集の不可能のみならず、表現の方法がない。これは處理に容易な、蒐集に可能な、又直に表現し得る資料の形に代へられなければならない。これには先づ三つの方法がある。

1 拓本 平盤なものゝ外形、凹凸あるものゝ姿は古來行はれてきた拓本による方法がある。我國石器時代遺物の主要部分を占める土器には、殆どすべて表面に沈紋浮紋の文様



が附されてゐる事は諸君の御承知の通りである。これは拓本にすればほど實大に稍正確な型がとれる、時間も操作も簡易である。

拓本には乾濕二法がある。乾拓本は鈞鐘墨又は油墨を用ひ、やゝ弾力ある薄美濃等の紙を上から摩擦して型をとるが、この方法は餘り用ひられない。他の一つ水拓本が土器等には適當である。

用具は拓本墨とタンポと刷毛と綿と紙である。墨肉は油の多くないものを容器に入れて置く。タンポは綿を紅絹等の布で包んで相當の固さに作る。徑一寸位のものゝ小さなものゝ二個あれば結構。刷毛は水をはく爲のもので代りに濕手拭を用ひるのもよい。紙は畫仙紙か、綿紙と云ふ特別なものもあるが、石器時代の土器などでは、畫仙紙でもたくさんである、これを打とうとする遺物の上に載せて、刷毛で水を引く。丸型の土器などでは、紙の皺を少くする様にしてすつぽりと丁寧に包む。その上を濕毛拭で蔽へば一度に水引がすんでいゝ。水が引けたら綿で上を靜に壓して、面の凹凸がきれいに現はれる様にする。少時待つて水の將に乾こうとして、だん／＼紙が白くなつて來たところで、タンポに墨肉をつ

けて濃淡なく軽く手早く打つ。濕度の差とタンポの使ひ方では拓本にむらが出来から、多少の技巧を必要とする。打ち終つた拓本は遺物から靜にはがして乾かして、餘白の所に遺物の發見地名所藏家名を記入する。後で紙の皺をのばして本の間にも壓しておけばきれいになる。

2 寫眞 拓本では扁平なものゝ他は形が編んでとれる。形を見る爲のものではない。形は寫眞と實測圖に依らなければならない。寫眞を撮影する技巧は遺跡の調査の時と同様こゝでも必要である。

寫眞機の大きさはキャビネ型が最も適當と考へられ、これ以下では不自由が多い。何れにしても版を一定する必要がある。而して遺物の場合は、野外に於ける遺跡のそれとは目的が相違してゐて、一個體のものゝ外形と文様等をはつきり出せばよいのである。故にレンズを絞つて時間を永くかける。遺物は正しく位置させて、多くは平光線にするが、特に見分け難い沈紋などのある土器では、片側を犠牲にして片光線を使ふ。なるべく大きくは撮りたいが、一方がピンぼけになる事は避け度い。遺物には必ずスケールを入れてその容量



を示して置く。小さくごちや／＼寫したのでは、後で何の足しにもならなくなる、キャビネ型一枚に完全土器なら二個と云つた見當である。平な遺物で小型のものは、幾つか並べて俯瞰して寫す。この方法は設備の手間と時間を節し、而も形のゆがみが少い。遺物の蔭はあまりつけない様にして、光の反對の側に何か反射物を置いたらいいだらう。

3 實測圖 寫眞のみで材料を得る事は中々に費用を要する。又その形は必ずしも焦點の關係から正確ではない、これ等の缺點を補ふ爲に實測圖が必要となつて来る。

實測圖を作るには紙と鉛筆と物差、三角定規でよい。紙はなるべく目のこまかいセクションペーパーを使ふ。私はカードの裏がミリメートルのセクションになつてゐるものを使つてゐる。セクションの印刷は淡青色だから、このまゝ寫眞にしても圖の他は現はれて來ない。鉛筆はBB位の舶來品。物差はセクションペーパーと同じミリメートルの折尺、これは遺跡兼用である。

私の圖法をお話すれば、カードの大きさが四六版だから、完全土器などはすぐ二分の一に書く。特に大きな土器は四分の一にするのだが、それはなる可く避けて、時には別のセク

ションペーパーに二分の一に書いて、二つに折つてこれに貼りつける。土器以外の小遺物は、物をカードの上に乗せて、大體の外廓を鉛筆で印つけて置いて、その後兩脚器で幅を測りながら書上げる。實大である。二分の一にする時には、紙の中央に線を引いて、遺物―土器等ならばその高さに関するものを二分の一で頸部、臺部、總高等と物差で測りながら紙の上に記入する。

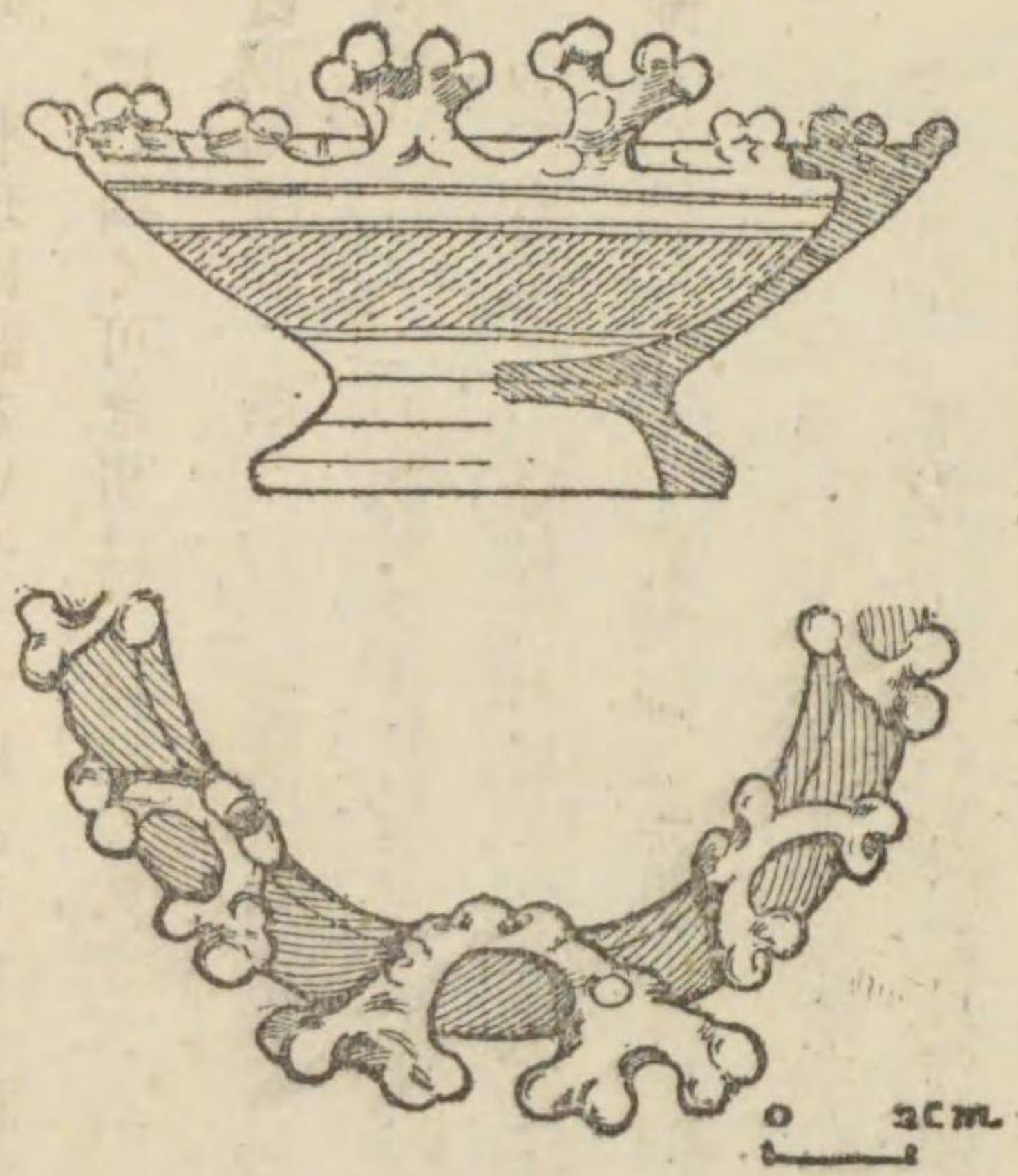
幅に関するものはすべて四分の一で、中央の線を起點に左右に取つてゆく。口邊、最大經部、底部、其他である。これ等の點をすべて入れ終つたら、遺物を片手に見較べながら輪廓をつないでゆく。文様等はその上で入れる。

この方法では形に二ミリメートル程度の誤差は生ずるかも知れぬが、それでも寫眞の焦點關係で生じたものよりは少い時がある。そしてそれ以上の誤差は多少の慣れで發見されて、書直す事が出来る様である。書く時間は材料用の寫眞を吟味して撮すよりは速くとも遅くはないであらう。

實測圖はこの他にも、三角定規を頼つて、すべて實大に撮影して書く事も出来るし、曲



線を描く爲の特別な器械等もある。然し私をして云はしむれば、道具はなるべく少い方がよい、一々自分の研究室でなければ使へない様なものでは、つい億劫にもなる。



第二圖 土器の實測圖

幅れよ構圖  
つたこも取事  
測りだけ見  
左右の半分  
引き四分の  
一線を四分  
中央の四分  
の二片をい  
最の造を添

(陸奥是川發見臺付土器 泉山氏藏)

以上の三種の方法は、それぞれに長短を持つてゐる。故にその長所を利用して並行して用ふべきであらう。即ち平なものゝ外形や土器の破片や、凹凸のある文様を見る爲には、拓本を使へばよい。寫真と實測圖は並行させれば更に結構だが、大きすぎて圖し難いものとか、小さ

ぎて描き難いものは寫真による。完全土器の形や土偶、石器、骨角器等の形は實測圖による事とする。中でも實測圖は、圖してゐる裡に稠密に遺物を觀察しながら再現する事ともなる

ので、經驗の上でも得る所が多く、又圖で説明し得る利益があるから練習を要する。

四 資料の整理

以上の資料は遺物と同様整理の必要がある。一旦紙にとられたものだから、整理は譯ないやうではあるが、疎かにすれば切角こゝまで運んだ仕事が無駄になる。第一に心掛く可き事は、材料の大きさを一定する事である。寫真と實測圖は簡單で、初めから實測圖は四六版等の一定したカードに書く事と定めて置けばよい、種類に依ては玉類とか骨角器では、この版で大きすぎると思へば葉書版にでもする。寫真もキャビネと定めて、尙四六版の臺紙にて貼付すれば、實測圖と同様に取扱はれる。カードの裏には發見地名、所藏家、備考を書入れる。實測圖は鉛筆のまゝでは永い間には手擦れて消えるから、時宜に應じてペンで墨を入れる。

カードが一應溜つたら、地方別とか遺跡別にしてカード箱に見出しをつけて入れる。尙丁寧になれば通し番號をつけて別に臺帳を作る。紛失に備へる爲である。拓本は實大にとるのだから、四六や菊の版では小さすぎる。これは一應質の悪い半紙で裏打して、改めて遺跡別にでもして模造紙の臺紙に貼込む。大きさは新聞全紙の四分の一の大

第四節 遺物と資料



きさ位が適當と思ふ。裏打は不必要な様だが、畫仙紙や綿紙は垂立つものだから、なるべく早く非常に淡めた糊で裏打して置いた方が便利である。そうして若し皺の部分などを修正する考があればこの時にする。黒色クレオンで塗ればよい。

遺物のカードと拓本を別にする事を厭へば、一定した模造紙の臺紙へ、遺跡別にでもして實測圖、寫眞、拓本、並に遺跡の測量圖、地圖等を一括して貼込むのもよい。特に研究の地方が狭かつたり、特定の幾つかの遺跡を研究してゐる場合には、これもよい整理法である、但台紙に餘白が出来たからと、色々の遺跡のものをつき混ぜて貼つては後になつて不便になる。

五 資料の比較 話は多少前後したが、私がこの章で資料と呼んでゐるのは、諸君が自ら遺跡から發掘して來た遺物から執られたものゝみではない、諸君の遺物を同志に公開すると共に、諸君も同志の蒐集品に就てこれを觀察し、材料の比較に借用する場合をも指してゐる。この事は、他人が切角苦心して發掘し整理した遺物を、借りてあなたの比較の材料になさいと云つてゐるのだから、如何にも厚かましい事の様だが、前述の如く、遺物と材料の意義は

明に異つてゐる、而して遺物自身も比較研究のものが與へられて初めて正しい意義を生じて來るのだから、先方の邪魔にならない限りは、お互に徳義心を以て材料は貸與し合ふべきであらう。但發掘者が或る目的の爲に得た一遺跡の遺物全部を、見せて呉れたからとて自分がそつくり材料に使つては意味が違ふ。これは他人の材料を犯してゐる。その主觀をまで奪つてゐるからである。これ等の關係に就ては、尙次章研究の方法を讀んで、諸君の問題のとり方について思考し、先方にどんな遺物がどうして集められてゐるかと思ふ事を察知しなければならぬ。遺物を觀察して自分の比較材料に借りるのはよいが、その研究の考へまで奪つてはいけないと云ふのである。

現今我國には、公開された博物館陳列所等で、石器時代遺物を所有してゐる所は、東京帝國博物館を筆頭に、京都博物館に少量を藏すると聞く。又各地方に極めてまれに公共團體や個人で陳列所を作つてゐる所もある、が全體としては如何にも乏しい。公開ではないが大學や研究所でこれのあるのは、東京帝國大學理學部人類學教室を筆頭に、京都帝國大學考古學陳列館、東北帝國大學部奥羽史料調査所、同理學部地質古生物學教室、同醫學部解剖學



教室、大山史前學研究所等がある。個人では古くからの蒐集家で相當に蒐集をされてゐる人は各地にある。何れも何かの手蔓で見る機會はあるであらう。時々これ等の多く集められた遺物を見て、遺物に對する全體の概念を頭に入れて置く必要がある。全體に通じない部分の知識では、世間に通用しない學と學者が出來上る。

## 第二章 研究と報告

### 第一節 研究の方法

一 層位的研究法 學問の研究法は、その目的に依て自然と決定されて來るものである。然し私は今日の場合、先史考古學の定義を卷頭に記載して、これに依てその方法を順致せしめる様な様式を執りたくなかつた。私見によれば斯學の目的は今日のところ、むしろそれ自身論題の一つとなるべきものである。故に本書に於ては、研究の方法論が先に思考される事となる。

第一章遺跡の調査の條に於て、私は遺跡の發掘は必ず層位的に行はるべき事を述べた。さうしてそこから發見された遺物は、すべて持ち歸らる可きであると云つた、これは次の如き理由に依るのである。



遺跡は當時の人類が居住した地點である、さうしてその地點は、時の経過に連れて次第に埋没されて行つたこの原因は今日のところ明かではない。然し今日の地表から二三尺、時には一丈にも近い深さに遺物が存在し、而も各層の遺物が整然と、あたかも地層のそれを見る様にあるのだから、すべてが突發的な變事で埋没されたものでない事だけは明かである。突發的な埋没でなければ、こゝには時の経過があつた。時の長さや地層の深さが必ずしも一般的普遍的に同一歩調をとらなくとも、同一地點の最下層は、その上位のものよりは以前に埋没されたものである事が考へられる。中層のものは上層のものよりも、時間的に早く地中になつた事も考へられる。而して各層には、それ／＼當時の文化的所産であるところの遺物を含んでゐる。故に最下層の遺物が上層の遺物よりも、早い年代に地中に埋められた事も推察出来るのである。

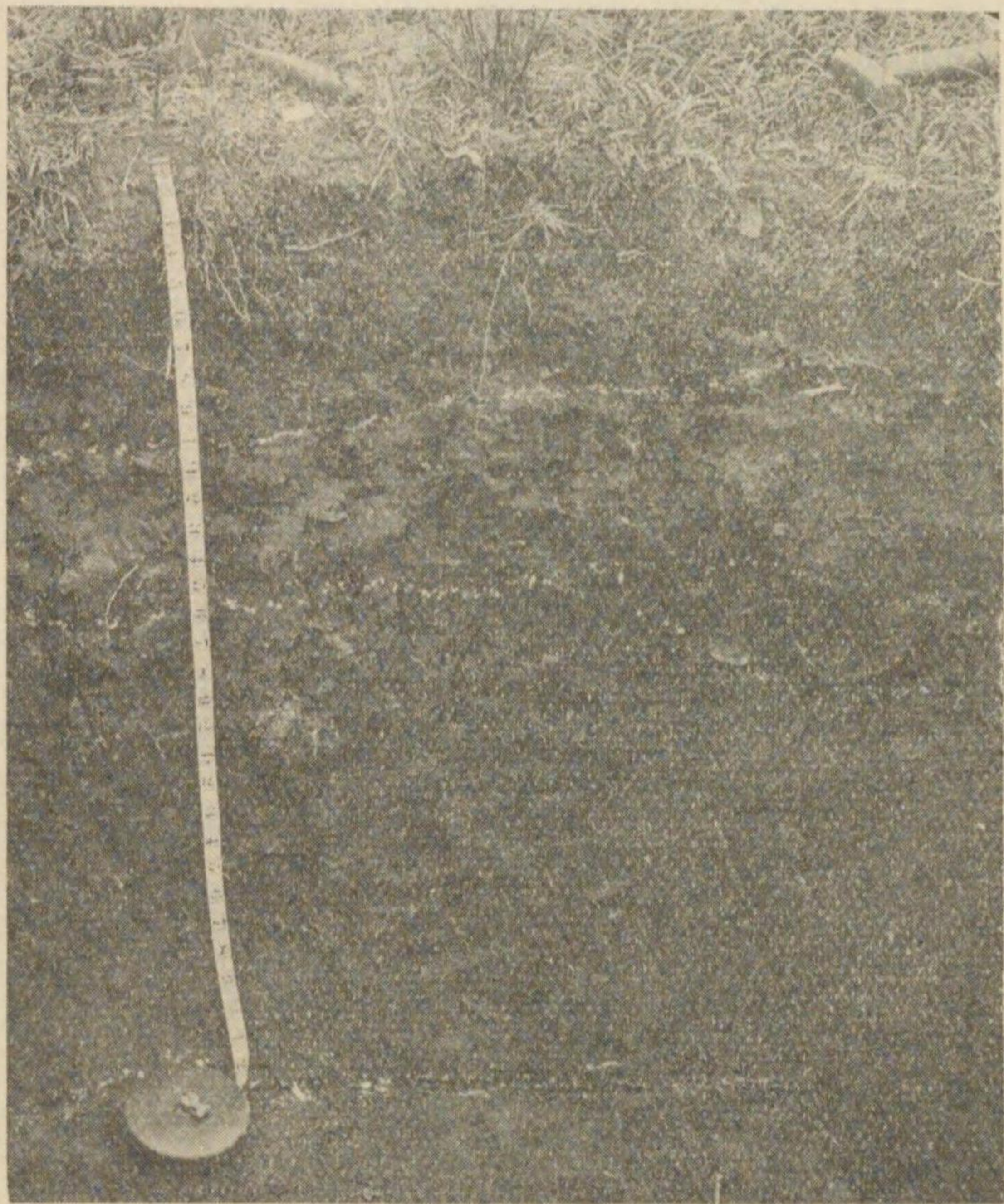
今最下層、中層、上層各層位の遺物をとつて、その間に様式の差異がみとめられれば、この差異を生じた原因の一つには、時間的な因由の存してゐた事は考へに入れる事が出来る。勿論遺物様式の推移と時間の推移とが、必ずしも同一歩調をとるとは限らない、具象化された一文化様式が、比較的永い時間に互つて用ひられてゐた事もあらう、又僅な時間的差で、遽にその様式を變へた事もあらう。然し何れにしても、時間的な差異で遺物の様式が變ると云ふ一つの事が考へられれば、遺跡の層位的研究法から、編年的考察が出来ると云ふ事は許される。

編年的考察とは、先史考古學研究の目的の一つになり得るものである。即ち當時の文化的所産たる各種遺物の様式の上に認められる差異を、時間的に配列する事に依て、文化の推移史、即ち一限定された意味であるにしても一種の文化史を編上げる事が出来るのである。編年的考察の方法は、以上の如く遺跡の層位的發掘法に依て最も安易に又比較的確實に行ふ事が出来る。發掘に際しては、上層から次第に五寸なり七寸なりの厚さに遺物を採つてゆくことは、便宜的手段である。本來ならば遺跡の自然的層位に依て區別を作らなければならぬ。

自然的層位と云ふのは、遺跡の次第に蓄積されて行つた層を見分けて、その變化に依て第一層第二層と定める事である。同一質の土壤で、遺物を包含する状態にも變差なく、密度、



傾斜、上下層との関係からも同質と見られるものは、例へ一尺二尺の厚味はあつても一層と



第三圖 遺跡断面と層位

白点を以て連ねたのが自然層位の境界である。  
(陸前室ヶ原包含地)

認定さる可きであらう。この認定には経験が必要である。例へば貝塚を切斷した時、最上層の表土は考慮外に置いて、貝層に達するまでの土壤層中にも、同質の事もあれば又は帯褐色土壤と黑色土壤の二層を認定される

時もある。又同じ貝層中にも土混貝層を中間に置いたり、單に中間土壤層を挟むものもある。

場合に依れば貝類の相違に依て層位を別にしなければならぬと考へられる様な事も生ずるであらう。貝層下土壤は最下層として、時には一二の層にも細分される。これが遺物包含層になれば更に困難で、目安にする貝殻がない爲に、何處を層の別れとするかは各人の経験に依て定まる事となる。従來遺跡の調査は、層位の研究に缺けたところが多かつた、これは諸君と共に將來尙研究しなければならぬものが多く残されてゐるであらう。

明かな層位差の現象の内にも、擬層と稱されるものがある。色々他の事情を綜合して行くと、その層はまやかして、事實自然的な層位ではない事が分つて来る、こんな時は一括して一層としなければならぬ。特に貝塚發掘に際しては、遺跡の主要部を構成する貝殻の蓄積自身に、人爲的な要素を澤山含んでゐて、土壤が自然に遺物を埋没させる様な意味でないものがある。時には三尺五尺にも、たゞ眞白な貝殻計りがざく／＼と積つたのなどは、どうしてもそこに永い年代の経過を考へる事は出来ない。包含層にして見ても、一時的な河水の汎濫などで、異つた土壤が流れ込んだのでは、これを時間的の層位として扱ふ事は出来ぬ、特にすべての發掘が、一遺跡全體から見たのでは、殆ど限られた一小區域をしか調査しない



のだし、すべての遺跡が、五尺七尺の包含層から成立してゐて、その間明かな中間層を有してゐると云ふ様な次第でもないのだから、層位的發掘に依る編年も、多くの危険を含んだ問題となる。

特に忘れてならない事は、研究對照たる遺物は、要するに文化的所産である。自然現象の様な一般法則的なものを持つてはゐない、甲遺跡に於ける最下層遺物が、乙遺跡の上層に近く存し、反つて甲遺跡上層類品が乙遺跡下層に存する様な場合もあらう、これ等を如何に考へるか云ふ事が、次に與へられた形態的方法の一命題となつて來るのである。

更に層位に現はれた遺物様式の差異と云ふが、この様式をどの點まで違へば異つたスタイルとして考へるか、それも人々の經驗と思考とに俟たなければならない問題である。一と一とを較べて、その相違を發見せよと云ふのなら、稠密にさへ觀察すれば、經驗如何に關はず指摘する事も出來よう、然し百の互に相違した第一層遺物群と、同じ様にまち／＼な第二層遺物群との比較は、日本石器時代遺物様式の差異を、全體に暗んじた程の經驗家でなくては中々に困難である。

我國の石器時代文化は他に比較して高級である、理由は色々であらうが一つには年代が降つた頃まで石器時代のまゝで泰平の夢をむさぼり得たからである。故にその所産たる遺物は精巧であると共に様式の差異に富んでゐる。加ふるに從來遺跡調査に遺憾の點も多かつた。我國に未だ據る可き遺物編年のない事もその爲である。諸君が苦心を要するのもその爲である。苦心してゝもお互に努力し助力し合つて、遺跡の調査をしなければならぬのもその爲である。

## 二 形態的研究法

遺物様式の差異を見る事、そこから文化推移の方向を見ようとする事に、層位的方法以外に今一つの方法がある。形態的研究法である。

層位的研究法が遺跡の發掘を手段とした様に、この方法は遺物の聚成を手段としてゐる。同一種類の遺物を出來得るだけ多く聚めて、その類を分け、様式を集めて、次第に一つの様式内の變差を見、又他様式との關係を見て行かうとするのである。こゝまで運べば分類だが、その以前、單に同類の遺物を數多く聚めると云ふ事だけでも多くの努力と忍耐が期待されなければならぬ。その困難は決して秩序立つた發掘に劣るものではないのである、然しこれが



行はれなければ前述層位的方法に依て遺物を得ても、その差異を確認する事が出来ないし、廣く伴出遺物との共變關係も知り得ない。例へば車の兩輪の如く、相助けて進めて行く可き研究法である。

遺物聚成の技巧に關しては、前章「遺物の調査」に於て記した。各自が發掘に依て得た遺物以外、互に同志相求めて類品を知り比較の材料とする、そうして機會ある毎に博物館其他に就て全般的知識を涵養する。今日では日本の石器時代遺物に關する相當な圖録も刊行されてゐるから、之等も書籍として讀むのではなく、手許の資料として働かす様に座右に揃ふべきである。

聚成の爲の材料は、豫めどれとどれとを選択する事は出来ない、文化的に價値があると思ふものは、何に依らず材料に收めて他日に具へなければならぬ。そうしてその量も、類似のものが材料中にあるからこれは不必要だと云ふ事は出来ない。材料の量を増す事は、一見何の價値もない事の様であるが、類似のものこそ一層大切で、反つて何の形態的の類似もない様な所謂珍品では、たゞこんなものがあつて珍しいと云ふ事以外には、諸君の文化觀を體系づける助にはならないであらう。

同一種遺物の中で、殆ど似寄で見まがふようなものまでも、段々丹念に諸君の材料に收めてゆく中、自然とこれ等遺物の中に共通した部分と然らざる部分の存在してゐる事に氣がつく、例へば東北地方發見の土偶中、所謂龜ヶ岡式又は陸奥式と呼ばれてゐるものに大別して二つの型があること、その一つの型は他のものゝ如何なる部分を誇張してゐるか、形の上の連絡は如何なる部分が主となつて同様式と看做されてゐるのか、又その部分的差の中で、眼の表現は如何に變化し鼻が之に如何にして共變してゆくかと、詳しくなればなる程色々な形態上の云はゞ因果關係が明かになつて来る。こうした研究の爲には非常な微細な各様式の變化を追ふ必要があるので、材料は如何に多くなつても多過ぎると云ふ事はない。

一方にはこんな考へ方も出来る。遺物が文化的所産であり、その形式の變化を追ふ事が直に文化推移の方向を追ふと云ふのならば、文化を決定するものは必ずしも量ではない、即ち量的にA様式の遺物が多くとも、それが必ずしもA文化を代表してゐるとは考へられないではないか、この中に多少でもB・C等の他様式が混在してゐれば、この混在の理由こそ反つ



てA文化に重大な関係を持つものとも考へられる。結局文化を支配する要素は質の問題で、質を決定するものは量よりも質自身である。故に同種遺物を無暗と多く聚成しても、それは勞働力を誇ると云ふ他は大して功績ではないと。

然し文化に於ける量と質の問題は、尙他日の問題として保留する事としても、我國先史考古學の現状では、この一遺物形式(form)内に於けるA Bの型式(type)決定さへも行はれてはゐない、これが先に行はれて所謂珍しいと云ふ概念が反省されなければならぬ。遼東の豚で唯その人にきり珍しくて、少し廣い知識に立つた者にはからきし有りふれたものでは、質の内容にも大變な相違がある。それから先史考古學の方法の一つに、様式推移の問題があれば、この現象を最も容易に觀取出來るのは例品の多いと云ふ事である。又比較研究の爲にはなるべく多くの觀察點が選ばれるべきで、この土器のこの疣狀突起とあの土器のそれが似てゐるから、互の文化に連絡があると云ふのでは、この人の耳とあの人の耳が似てゐるから、二人は兄弟に違ひないと云ふ様なものである。我國の石器時代は相當高い文化階梯にあつた、故にその文化の特質を決定する爲には偶々選ばれた一二の様式では根據は薄弱である。廣く

一般的知識の上から全般的傾向が論ぜらるべきで、これ等の爲にも當時の文化を反映した遺物は數多く聚成されなければならぬ。

遺物の聚成が相當の量に行はれて、これならばその推移の傾向をも論ぜられると云ふ自信にまでこぎつけたとする。先づこれ等の遺物は過去の考古學の經驗に依て一應形式(form)別がされる。形式(form)とは、嚴密に云へば生物學の種(Species)の如く、如何に兩者の變化を追つて行つても、どこか形の連絡しない所があると云ふものでなければならぬと考へる。例へば土偶と土盤の如く、土偶は退化する事に依てどん／＼土盤化してゆく、然し結局土盤は土盤で、どうしても土偶自身に成りきれぬ所がある。故に土偶と土盤は形式の相違である。然し土盤と岩盤を較べると、様式、文様其他に甚だ多くの類似を持ち、たと石と土の材料の差を除けば、文化的には必ずしも嚴密な區別が立たない、この場合兩者を果して形式の差異とする事が出来るかどうか、然し從來の習慣ではこれをはつきり區別して、一方は石製品一方は土製品と、可なり離れた位置に置いた。

土器形式の分類などは、むしろ私から云はしむれば無理が多く、椀形皿形鉢形と、名前は



今日の用具をそのまま使つて勝手に區別はしてゐるが、どこにそれ程はつきりした區別があるのか分らない。これ位なら皿と云つても差支えなからうとか、まあ大きいから甕と云つて置けとかで形式を分けては色々困る場合がある。名稱は物を呼ぶ爲の便宜だから、椀でも鉢でも關はない、然しこれに捉はれて、鉢だけの形態分類をやつて見ようかとか、つたの上にも下にも續かない途中だけを見てゐる事となる。そこへ行けば石器の分類は稍々合理的で、石匕と石鏃では、似たものは中にはあつても大體誰にも區別はつく、打製磨製の石斧にしても、中には手磨製など、云ふものがあつても、大體は類別が出来る。これ等は土製品に較べては、その文化反映の度が弱い爲とも一つには考へられる。

前述の如く、一形式を抽出してその分類を試る場合にも、相當な考慮を要する。遺物の聚成は全般的なれと云ふ理由も一つはこゝにある。一形式が選出されて、それが次第に型式 (type) を分けられて行く時、何を分類の標準に置くかと云ふ事は、結局私は一つの主観的問題だと思ふ。或人は遺物の持つ機能 (function) が之を決定すると云ふ。成程機能は之を使用する場合を想定して立てられたものだから、文化的基準としても相當の意味を持つもの

である。又形が機能に依て支配されてゐる場合も多いのだから、必ずしも不適當ではない、然し次の様な場合を考へて見る。

石斧は物を打斷つ爲の機能を有してゐる、故に今これを基準として分類するならば、先づこれに柄を有したか否かを思考されなければならない。然しこれは一々に就ては決定出来る問題ではない。丸くて長いから手でも握られたらう。この型式に似たものが南洋の土俗品の柄をつけられてゐるから、これは柄のついた部分に入れる。何れもこう考へると云ふ程度の問題で、觀察の結果こうだと云ふ問題ではない、次は双部の主軸に對する角度なども機能の上からでは相當の問題である。然し諸君が双部八十五度角の石斧とか、双部八十三度角のものとかと定められた分類を、普遍的なもの、妥當なものとか考へる事が出来るであらうか、又石斧の重さ大きさ等で一々分類して、その相關々係が巧く何等かの公式で現はされたとしても、結局分類表の主観として認容する他仕様がなない事となるであらう。

形式を分ける爲には、無理が分りつゝも、今日の吾々の器物に對する知識から導いて來てゐた、急須形土器とか土瓶形土器とかである。然しこれを推しすすめて、これは大きいから



爐にかけた土瓶、これは小さいから客用急須とは云ふ人もないであらうし、一步を進めて一々を、南洋あたりの土俗品に較べて見たところで、結局は一糸亂れぬ文化階段説を假定に置いて、たゞ勝手な事を云つてゐると云ふ事になる。

分類は結局主観の問題と云つた。果して然らば、この主観を導くには自づと一つの學の立場が決定さるべきである。それを私は觀察と云ふ二字で置き替へる。客観的な型(Pattern)の觀察である。型は遺物それ自身が相當複雑な文化現象であつても、そのまゝの一個體を一つの型としても認容出来るし、一々その要素(element)をほぐしても、各々の型の集合として見る事が出来るであらう。型を組立てる要素と云ふ問題を後に廻して、遺物各々の個體に現はれた稍々アイデアルなるものを一つの型として考へるならば、比較の方法で、これに最も接近した他の型を選択する事が出来る、この似寄りの型が一つの群(group)を構成する。數個數十個が一群を形成したものとすると、群は群としての一つの型を持つ。この群の持つ型は又互に他の群との近づきを作り、こゝに一つの様式(style)が決定される機縁となる。様式はそれ自身特質的である。群に反映された個體の型は、様式に總示されてこゝに代表された一普遍的

型となる。而して如何なる範圍を以て一様式とするかと云ふ事は、型式(type)と共に多分一文化環境を考慮に入れる必要を生むであらう。一形式(form)にあつては、むしろ日本を一つの單位とした場合、地方的文化環境を考慮の外に置いてゐる、然し様式(style)型式(type)にこれがあるであらうと云ふ所以のものは、問題が既にそこまで分化して來た事を示してゐる。

一個體、並にこの個體から構成された一様式の部分的な要素としての型(Pattern)を抽出し、これを比較する場合、初めて自分は文化を決定する質(quality)と量(quantity)の問題が思考さる可きであらうと思ふ、然しこの問題を追求する事は議論である、故に今は諸君と共に以前の問題に立ち歸らなければならぬ。

遺物の形態による分類的研究法は、斯くの如く一形式の遺物を選んで次第に進めらるべきである、この場合、諸君が發掘によつた層位的研究法と一時遠去かつた事をやつてゐる様に見える、然し兩者の研究が次第に進んで行けば、そこには不可分の共通がある事が明かになるのである。先づ甲遺物と乙遺物の形式の分類が完成されたとする、この時甲乙各形式内の様式相互の變化關係が考慮された様に、甲と乙との遺物内様式が、お互にどんな共變關係



を持つであらうかと云ふ事が考へられなければならない。これは一寸と妙な話である。石斧と土偶とがどんな型の因果關係を持つかと云ふ事は、馬と犬とがどんな相關々係にあるかと問ふにも似てゐる、然し一應は考へて見ようではないか。

石器時代の遺物に現はれた文化と云ふのは一つの既定された命題である。遺物の型からその文化の推移様式を察知しようとするのは形態的研究法に依る前提的な問題である。研究をしようとする人が、石斧から入つても土偶から入つても、要はこれ等の遺物を型として見て、その型の様式推移を見ると云ふ事となる。目的と手段が同一で、その對照だけが異つた様な約束の下では、時には馬と犬の相關々係でも問ふ事が出来るであらう。土偶と石斧の關係も次の如くにして尋ねられるものと考へられる。

今土偶に五つの型式が區分されたとする。而してこの各型式内の様式は、幾つかの型の約束から、その推移順位が大體考察され得る、例へば次の第一表の如くである。

石斧は石斧の立場から、例へば三つの型式に分けられて、第二表の如き關係を推察された事となる。

第一表

土	A 型式	1	2	3	4	5
B 型式		1	2	3	4	5
C 型式			1	2	3	4
D 型式				1	2	3
E 型式					1	2

第二表

石	A 型式	1	2	3
B 型式		1	2	3
C 型式			1	2

各型式内の12の様式は、單なる概念的な一存在ではない、中に含まれた各個體が、一々の遺跡から發見されてゐる實在のものである。今この形態分類を發見遺跡別にして見るならば、甲遺跡では土偶 A 型の2と3 B 型1と2を、石斧 A 型2と3、B 型1と2を持つとする、然らばその各様式は殆ど同時的文化所産と考へる事が出来るのである。これは遺跡の層位的研究に直に當て嵌めて唇齒の如く考へ合す事が出来るではないか。



各形遺物様式の相互共變關係、又は層位的研究の伴出關係など、何れも實際には非常に複雑な關係を持つて來るであらう、丁度當時の文化現象の複雑さを反映して。然しこうした操作を繰返す裡に、諸君の腦裡には、當時の文化を理解するものが生じて來る。文化、然しこの文化は前述の如くその本質を理論的に導出したものではなく、たゞ推移して行つた型の傾向を時間的に觀じたものである。斯くて先史考古學は限定された意味にしても文化史の位置を獲得する事となるのである。

### 三 綜合的研究法

綜合的研究法は、たゞ一つの實際的問題を含むのみである。

遺物が文化的な對照として比較研究される場合、一方には絶えず地域的な擴りが問題となる。即ちAの型は如何なる分布の範圍にあるか、その範圍外の同型の遺物は如何に處理さるべきであるか。Bの型との分布上の連關は如何であつて、それが形の上の連絡と如何なる關係を示してゐるかなどの事である。尙進めば遺物に現はれた文化圈、文化の傳播等が問題になるのであるが、諸君の研究の實際から考へても、これは一應考慮さるべきものである。

諸君が遺跡の層位的研究に於て、他との比較を求むる場合その地域の廣さを考慮しなければならぬ如く、遺物形態の比較研究に當つても分布を考へに入れなければならぬ。東北地方の一遺跡で上中下三層の層位を見、この層位間に各種遺物を考慮して三時期の移り行きを見たとする。一方別に關西地方の遺跡を發掘して、上下二層より二様式を觀別し得たとする。

さうして關西一遺跡の上層期と東北一遺跡の下層期に互に對比さる可き類似があつても、直にこれを以て兩遺跡の順位を決定出来るかどうかは疑はしい、これは經驗の多い少いの問題ではなく、むしろ文化推移の性向に、そこまでも地理的な飛躍を假想せしめてよいかどうかの問題である。フィルドは、假想される危険を棄て、先づ一地理的單位を選ばねばならぬ。これは文化を支配する地理的條件を最小限に縮めて、その中で歴史的な推移を定めて行こうとするのである。

考古學的研究の一地理的單位は、交通、便宜、費用その他の條件を考慮して、大きくて一國を程度とした自然地理的環境、小さくしては一郡を程度としたそれが選べる可きであらう。即ち諸君の研究は、一郡か一國を標準において、これを一つの自然的な地形に改めて、層位的研究なり形態的研究なりが行はれるのが順序であると云ふのである。自然的な地形と



は、信濃佐久郡の如く、一郡が盆地の半分を占めて、他の半分を他郡に占められてゐる場合は、兩郡を合して研究のフィールドとするとか、又は陸中國の如く、海岸地方と北上川流域では全然関連しない事情にあれば、これは二つの地域として、その一つ／＼に手を染めると云ふ事である。然しこの際最も自然的な、合理的な地理的單位を選ばなければ、それは一河川流域を單位にすると云ふ事である。

一フィールド内の遺跡は、選擇された代表的なものが次第に層位的に研究され、この地域内から發見された遺物は、互に相求めて形態的な研究が遂げられる。斯くてこの地域の先史考古學的研究は、完成されてゆくのである。全國に跨る層位の編年や形態上の推移が論ぜられなくとも、たゞ知識として知つてさへ置けば、必ずしも研究の障りではない。さうして他地域のそれと比較する可き場合は、常にその間の地域的隔りを考慮に入れてなさるべきである。

四 土俗的研究法 之に就て思ひ合される事は、本書に於て通常考古學書が論ずる土俗的研究法を書き漏らしてゐる事である。土俗的研究法とは、遺物の形態、使用法其他の例を今日の未開人の土俗品に求めて、この形態は彼の未開人の此の如き利器と形を一にしてゐるか

ら、これは正に彼の如く使用製作されたものであらう等と推論する事を目的としてゐる。例へば我國石器時代遺物中の勾玉は、南洋土人の獸齒等を穿孔して首にかける飾玉と、形に於ても意味に於ても相通するものがあるから、以てその用途を考へ得たりとする如きである。

然し私は失念したのではない、此の如き研究法は、時間と空間とを稍々無視して、一部心理學者の文化階段説を根本假定として出發してゐる事に不安を感じてゐるからである。文化階段説とは、各民族の文化進展の途次にあつては、何れも同じ階梯を踏んで達するものであると云ふ假説である。

然し一方には考古學それ自身が、未だにこの假説を金科玉條としてゐる。即ち石器時代、青銅器時代、鐵器時代の三階段説であつて、これは研究が精密になればなる程、殆ど例外のない公理として受容されさうになつて來てゐるのである。この階段がある以上、今日低文化の状態にある民族は、他の文明民族が通つて來たと同じ道筋を踏んで、やがて文明民族にまで到達すると云ふ事も豫想され、従つて文明民族の過去の文化は、直に以て今日の未開民族のそれに比定される事となる。文化の反映たる遺物が地域を超えて比較されても少しも差支



えがないではないか。然し私は未だそれに多くの疑義を持つてゐる。

最近の民族學が、進化論的な文化階段説を排撃して、次第に各自文化の歴史的推移や、その中心、傳播地域、關係等の特殊問題に入り、その要素を決定する方法論にまで深入してゐるかに見ると云ふ事が、私を勇気づける一つの原因である。眞文化現象は、低文化から高級文化へ、生物の進化論が歩む如く、しかく單純な歩をなすものであるかどうか、又如何に地理的環境が異つても、ヘッケルの宗族發生説の如く、種が宗族の進化を一代に縮めて繰返すものであるかどうか。今日の文明にまで成長した文化の過去には、必然的な順路はあつた、然しこれは法則として今日の未開人の文化を支配するであらうか。文化はむしろ民族の持つ特質である、文明野蠻も文明を以て自任する民族の獨りぎめではなからうか。さうして未開民族の持つ文化が、吾々文明人の過去のそれと同一階梯にあるとなす如きは、餘りに皮相的な觀察ではなからうか。

然し、土俗學は、學としては明かに考古學と非常に密接な關係を持つてゐる。何れも文化の研究を目的とし、而して物質がこれを反映したものと考へて、その様式の推移からは進化論

的な編年を考へ、同一様式の分布からは文化の擴りを考へてゐる。而も研究法は觀察を基礎として、心理學的な考察を次第に避けつゝあるのである。兩者は即ち學としては同じ立場同じ目的にあつて、たゞ時間的に前後關係を持つものではなからうかと私は考へる。然しこれは土俗學が考古學の一部分になる事でもなく、考古學が土俗學の一部分に化す事でもない。故にその比較研究の如きは、今一應考慮された上でなければならぬと考へるものである。

五 心理學的方法 考古學の研究法に、心理學的方法を避け様としてゐると云ふ事は、一應説明されなければならない。嚴密な意味に於ける心理學が、今日如何なるものであるかは私には明かではない、然し從來考古學に許容されてゐた、所謂心理學的方法とは、それは觀察者の推理を意味してゐた。この器物はこうして使用されたのであらう、石棒の形は生殖器に似てゐるから、當時男根崇拜が行はれたであらう。動物土偶があるからアニミズムがあつたであらう、等々である。その専門の人からはこれはどう見えるか知らない、然し考古學本來の立場からは、こゝまで行けばたゞ自分はこう思ふと云ふだけの問題に留つてゐる、斯の如き内容が學として存し得るかどうか。何れにしても學は究極に於て主觀的な問題となる、



然し自分はこう考へるから當時の人もこう考へたであらうでは、そこに何等反省の餘地を残さない問題となる、心理學まで入りたくない。これは私の好みの問題だと考へられるか知れないが、自分には自分だけの理由は存する心算である。

## 第二節 記述の方法

一 遺跡の調査報告 遺跡を發掘調査した場合、その組織なり状態なりを觀察經驗した者は、發掘者自身の他にはない。この經驗を、たゞ自分一人のものとして置いたのでは、成程その人の爲には意義も價值もあるであらうが、學全體の立場からでは、何んの得るところもないことゝなつて、後には破壊された遺跡のみが残されることゝなる。これはどうしても發掘の結果を學界に報告して、一方には自分の經驗を反省すると共に、學問する者の義務を果して置かなければならない。

報告は單に備忘の爲にのみ書かれるものではない。勿論同學への資料の提供をも意味してゐるが、一方自己の經驗を筆にする事に依て、それを深め、觀察思考を緻密にし以て將來を養ふ爲のものである。故に萬一その報告が發表し得られない様な時にあつても、發掘品の整理に次いで、一應稿が起されなければならぬ。自分で書いてみなくては、發掘中折角經驗した事象も、感得した現象も、殆ど自己の思考の養にはならず消散して了ふ事が多いものである。

今日のところこの種報告を發表し得る學界の機關は、専門のものに人類學雜誌と考古學雜誌とがある。共に月刊で、數十年の歴史と學とを守り立てゝ來てゐる。何れは入會して、常に新しい學界の動きと氛圍氣にふれなければならぬものであつて、入會には會員の紹介と直接申込の二つがある。何れも會費に依て雜誌の配布を受ける他責任も資格をも要しない。會員の送付した報告は編輯者の採擇に依て次第に誌上に掲載されるし、掲載された報告は一方では學界が承認した事となる。勿論それは今日の學のレベルまで達したものでなければならぬ。この他近時史學關係の雜誌は次第に考古學的方面の報告を掲載したし、地方發行の郷土史研究の爲の出版物などに依るのも適當である。

報告は簡潔に書かれなければならない。自分だけの思考の手段とするならば、それはいく



ら長くなつてもよさそうだが、一旦發表するとなれば、雜誌等の掲載能力をも考へる必要がある。又考を筆にすると云ふ事自身、一つの簡潔化を約束してゐる。

報告を簡潔にするには、一、文章を簡潔にする事、二、言葉を簡潔にする事、三、内容を簡潔にする事の三つが先づ考へられる。文章は文字を綴つて意志を傳へる爲のものだから、言葉が足りなくて意味が通じなくては何にもならないのだが、讀む相手が専門家か同好者なのだから、考に共通した所のあるものなら、くどくど言はなくても分つて呉れる。美文は理性に訴へるよりも感情に訴へ易いものである。感情を通じて人の思考を呼び覺ました方がより理解し易い様な事象もあらうが、組織的な記述事項が、たゞ感情にばかり訴へられては反つて不理解になる場合も多い。言葉は當然術語を使ふべきである。それは説明を要しないで人々に共通の概念を與へ得る言葉である。但我國に於ける先史考古學の短い歴史が、すべての必要な事象に術語を與へたか、又それが必ずしも適當であるか否か、場合によつては共通の概念を與へられるかどうかは未だ疑問である。むしろ諸君と共に現存のものを慣用語として、次第に術語に成長させると共に、その意義をはつきりとして、尙不足のものは次第に創造して行くより他に仕方がない。

術語の創造は然し濫りに行はれてはならない。先づ從來の語彙全體に通じて、その意味も大體に呑み込め、現在の學問の傾向からも、これならば必ずしも不適當でないと見極められた人がなすべきである。既に我國の先史考古學は、専門家ならざる人々に依て多くの術語が創成され、今日その後始末に困つてゐる様な状態にある。例へば同一形式遺物に時代と人に依て色々異つた名稱が附され、時には同一名で異つたものを指してゐる様な例も少なくはない。狭い地方的な經驗から、すぐ××式などと云はれても、理解も比較も出来ないで、その人きりの言葉になる。それはむしろ無い方が勝つてゐる。

術語を一通り呑み込む爲に、辭典様のものであるのが、専門家の一任務でもあらうが、今日急にはその機運にも向はぬ様だ、諸君は常に専門家の報告に注意すると共に、一方には入門書にも目を通すがよいであらう。本書にあつても各論に於て、一通り從來用ひられた事のある語彙を説明し、これを索引に依て知り得る様にしてある。

## 二 記載の選擇 内容を簡潔にする爲に、觀察事項は豫め選擇されなければならぬ。報告



にしる論文にしる、どんな構成で書くかと云ふ事が、一つにはその人の頭の働の問題にもなる。たゞ譯もなく書き並べて、その間の輕重が自分にも分らないのでは仕方がない。どこが自分の記さうとする要點かはつきり筆をとる前自分に分らせて、それが言へれば先づ一人前の報告であらう。この際たゞ世間をあつと云はせ度いなどで、自分の創見のつもりを書き立てゝは、反つて世間から笑はれる種を播く。今日の先史考古學と雖も、相當なレベルまでは進んでゐるので、さう驚く程の未発見の事象がざらにあるのではない、あれば筆者自身の未知に依てゐる場合が多からうから、一應充分反省して、間違のない報告が書けなければならぬ。

遺跡の發掘報告は、第一にその所在地と地形を明かに書く。地點は誰でも後に行けば分る様に、國郡村字俗稱を、地形は陸地測量部の地形圖を照し合せて、成程と分る程度のものでよい。出來れば遺跡の所在を示した地圖又は他遺跡との關係を示す地形圖一葉を添へる。發掘經過と遺跡の歴史、傳唱等は、自分に大切な程他人には大切でない場合が多いから、省略されるだけは省略して、先づ發掘地點と面積、以前に誰が調査して何の雜誌に報告された事があつたか、又遺跡には如何なる傳唱がまつてゐたかとも、合せて四五行にでも書上げる。遺跡に伴ふ傳唱は、よく土地の故老などから永々と話して聞かされる場合もあり、自分でも大いに興味を動かす話題だが、發掘報告に關しては、殆ど何の大切な役割をも演じないのだから、むしろ土俗學の方にでも廻すべきものであらう。

發掘に依て知り得た遺跡の性質が、むしろこの場合記載の主題となる。これは發掘者自身の他は、文章に依らなければ何人も間接的にさへ經驗されない所である、又發掘中の色々な注意や思考は、この時改めて鍊り上げられる。層の深さ、構成、遺物包含の状態、特別な現象、層位相互の關係、其他。これは斷面圖で説明するのも効果的である。

發見遺物は層位的事實を主として記載する。層位差は土器片に現はれた文様が最も顯著に示すものであつて、量の上から云つても重要な遺物となる。この遺跡よりは完全土器何個、珍品幾つきりでは、むしろ書かなくともよい報告である。必ず層位に現はれたる文様の推移とか遺物伴出の關係、これ等を通じて見たる遺跡の文化的性質、等が觀察され記載さるべきである。然し以上の事は中々に検出も困難な場合が多く、又全般的智識の上に立たなければ



考慮されない事も多い。當初から完全を望んでゐるのではない、むしろ各自の思考を次第に此の如き方面に導いて行くべきを云つてゐるのである。故に正しい観察でさへあれば、必ずしも全般的でなくとも現象は明かでもよい、時には遺跡の記載に含めて僅に記された事でも、充分報告としての責を全うする事も出来る。

報告の挿繪は多い程よいと云つても、實際に當れば充分選擇されなければならない。遺跡全景か又は遺物出土状態の寫眞一二葉、主要遺物の寫眞一二葉、土器片の拓本をまとめて一圖に、他に今一二圖も加へれば、雑誌に掲載するものではむしろ多すぎる程である。正報告として出版するのでは、自づとこの邊の用意も異なるが、雑誌の報告ではどうしても豫報的性質を脱する事が出来ないのだから、要を得た圖を作り、直接説明の補ひにしたい。

正報告として一遺跡の報告を刊行する事は、特別の人にしか必要がないかも知れぬ問題だが、單に豫報の量を増す以外に、こうした機會は充分活用されるべきである。先づ周圍遺跡の大體の性質を知つて互に比較考査する。又發掘の状態は、なるべく充分圖も入れて遺憾なきを期すと共に、それで状態の復原をも考へ合されるやう心掛ける。遺物の研究は他の類品を

も求めて、比較研究し、目標はその地方の先史文化の考古學的研究とか又は同時期類似遺跡の事情を明かにする事に置き度い。分布地圖は折込にする等の方法で相當範圍を廣く、五萬分地形圖を臺にして複製する。コロタイプ圖版は卷末に一括して別にその説明をつける、挿繪にも下に註を添へて、圖としても充分説明の役を働かせる。但挿圖を寫眞でなく實測圖でゆく時には、大きく書いて凸版に縮寫する。スケールは原則として入れるべきである。その廣さは本のサイズに支配されるが、餘り廣すぎるのは一體に見苦しい出來榮になり易い。本の大きさは圖の關係から四六倍版がよく、小さくとも菊版雑誌の大きさは欲しい。四六版(この本の大きさ)では圖に困る。

三 遺物の報告　こんな珍しい遺物を見たと言ふ報告は、以前には多く雑誌にも散見し、所藏者にしても廣く知られた所であつた。然し珍しいと言ふ意味は時と共に變化して、今日一應は反省されなければならなくなつた。その人の經驗で、未だ見たことのないものは珍しいものに相違ない、然しこれは經驗の程度の問題である。君に珍しくとも俺には一向珍しくないでは、わざわざ貴重な紙面を費す事もない。又豫め自分に考へてゐた事があつて、偶



偶成程と思ひ當る様な遺物を見れば、それは所謂珍品である。然しこれも觀た人の主觀の問題に留るであらう。

色々と經驗を積んで行つても、どうも比較する様な類品もなく、何處かにこれに相當する例品がないかと報告された珍品は、確に一つの意義を持つてゐる。又甲地方では有觸れた様式で、今まで乙地方には無いと思つてゐたものを、乙地方で初めて發見したとあつても珍品たるを失はぬ、さうしてこれは從來の分布觀を擴張するものだから、相當價值のある珍品である。然し私の考へでは、「遺物の調査」並に「研究の方法」の章で記した如く、遺物の研究は型の比較研究で、この型の順次的な移り行きが一つの研究對照なのだから、遺物の報告も主として此の如くなさる可きだと考へる。それは一個の珍品ではない、同一地方、又は同一類の遺物を比較觀察して、形の上にこれ程の差異があるとか、又は類似があるとか云ふ、稍々思考を伴つた記載である。この場合思考とは論を指さない、一々の經驗を綜合統一せしめる思考力の意味である。

比較研究は一方面として量的研究の手段を伴ふ。これは研究法の章中でも述べた。量を最も明瞭に示すものは表である。表は最近遺物の研究に屢々用ひられ出して來た、私は一方その利をも考へるが、他の一方ではその弊害をも考へる。統計的な表は研究手段の一表現法である。これを見たものに、圖から受けると略々似た効果の印象を與へ、直截的に或事實を了解させる。然しこれは筆者自身が得るところの効果ではない、表は事實だが表に現はれたものから演繹された思考は必ずしも事實ではない、否多くの場合不知文化事象を知らうとする本來の立場から遠ざけられて、數の計算で文化が測られる様な幻覺を起さないものでもない。文化現象は如何に先史時代の低文化期にあつても、僅な遺物の數や部分の計測から導き出せる程、しかく單純なものではない。表を使ふのはよい、然し表に使はれてはならない。

四 記載様式と圖表 遺物の記述に當つては、必ず出所が明かにされ材料としての吟味が行はれる。所藏家が他にある場合は禮儀としてもその名を擧げ寸法を添へる。その形や様式を呼ぶには一定した術語を以てし、比較研究の場合は觀點、立場等を明かにする必要がある。圖は必要に應ず可きだが、同種のもものは一葉に並べて比較の便宜を考へ、觀點の相違から複雑化する虞れがあれば、同一物を二葉に圖示する等、説明の爲の配慮をする。



特に同種、又は同一地方の遺物の総合的報告書を刊行し得る場合には、分類圖は注意されるべきである。こんな場合には圖版が出来たら報告は半分出来上つたものと考へてよい程である。寫眞、拓本、實測圖等から成立つた材料を次第に目的の下に分類修理して、例へば同一地方の各種遺物に就てならば遺跡別にするとか、又は遺物遺跡双方を考慮して分配するとか特殊遺物に限つて比較の爲一括するとか適宜の方法を執る。拓本と實測圖の大きさの釣合、寫眞と實測圖の明暗の均齊、又同一圖版中の遺物のスケールの統一、仕事は非常に面倒である事を考へて掛らなければならぬ。

同種遺物の比較研究で、圖でその類を分けて示す事は、それ自身一つの研究の結果である。色々の條件から、次第に精しく材料を分類して、この立場でこうしたもの进行分类すれば、これ以上の場合が考へられぬからと云ふところで圖を統一する。本文はむしろこの説明の延長である。この他にも色々の立場からなる説明の爲の挿圖や、又分布圖の如きは必要である。遺物報告の爲の分布圖は、特に狭い區域でもなければ、地形圖を必ずしも必要としないであらう。

五 報告と論文 報告と論文の區別は、形の上からも慣用例の上からも、可なり不明瞭なものである。事實の實驗觀察に基礎を置く自然科学的な學にあつては、それに含まれた創意や立場の如何に拘はらず、報告と云ふ語が多く用ひられ、演繹的な文化科學では、むしろ前説を追隨したゞけのものでも、時には資料の羅列に終つたと思はれるものにも、論文と云ふ名が附けられる。先史考古學は、事實の觀察を學の基礎にすべきだとは云ひながら、目的とするところは文化現象の探究で、多少演繹的なものを根本假定として持つてゐる。觀察、記載に當つての事實の選擇等がそれである。此の如き場合、純報告と考へた記載からも全然主觀的な論を除去する事は出来ないし、又明かな論も事實を離れては成立されない。平たく云へば諸君がこんなものを見たときだけの報告にも、物の見方や考へ方に就ての諸君の論が混つてゐる。自分はかう考へると云ふ論にも、こんなものがあるからと云ふ報告が伴つてゐる。然るに物の考へ方は各人で違つてゐて、同一物から受ける考へ方は各人各様である。單なる記載で終る時にも、又それについての自分の考へを述べようとする際にも、すべて自分の主觀的部分を反省しなければならぬ。



先史考古學の記載が、報告か論文かと詮議立てるのはむしろ空論である。事實それを記するに當つて、自分の立場を詮索して、この點が論を構成するとか、こんな立場で自分は物を見たとかを、追求して明かにしなければならぬ、さうする事に依て、一つには自分の主觀を反省する事も出来るし、人々に安心の出来る資料を提供する事にもなる。主として論を構成する部分は、豫め報告的記載と區分して、自分はどうした立場でこの材料を此の如く見て、これ／＼の見解に達する事が出来たと明記すべきである。報告文の途中で、遺跡は住居跡なれば附近に泉を伴ふべきなりとか、第二層は貝殻層なれば海邊部族としての生活を行ひ、釣針等を伴ふべきなりなど、書き混へては、全體が安心の出来る資料となつてしまふ。

### 第三節 研究の目的

一 先史考古學とは 研究の目的は即ち學の目的を構成する。換言すれば學の目的が研究の目的を制定するものである。故にこゝでは先史考古學の本然的なものが論ぜられなければならない。

考古學の定義を卷頭に記した從來の書には、多くこれを規して——考古學は過去人類の物質的遺物、(又は遺物遺跡による文化)を研究するものであるとなしてゐる。これはすこぶる重要な言葉である。この數語を發見する爲に、考古學は數十年、又は數百年の歴史を必要とした。即ち永い考古學の歴史がこの數語に反映された見解を齎して呉れたものである。吾々はこの語を解剖する事に依て、吾々の學に對する正確なる概念を作り出さなければならぬ。本書は日本に於ける石器時代——即ち先史考古學の研究をのみ取扱つてゐる。此の如く部分的、遍在的なものが考古學の定義に包含され得るかどうか。然し學の定義は全幅的、普遍的妥當の性質のものである、若し日本先史考古學の定義——若しそんなものがあれば——が全考古學の定義にまで演繹されなくとも、全考古學の定義なればこの特殊問題にも當て嵌まるべきである。論を進める。

二 考古學の區分 考古學は今日のところ必然的な研究の便宜から、先史考古學と歴史考古學に二分されつゝある。先史考古學は文献的な歴史が發生しない以前の時代の文化をその遺物から取扱ふ、歴史考古學は文献史學の存する時期の製作物を研究するか、又はこれを通



じて文化史的現象を探索しようとする。この兩者は一つの學として成立し得るものであるかどうか。

歴史考古學は文献史學の補助學、又はその一部分としてのみ學としての存在が許される。何となれば、歴史時代の文化現象は、當然文献に依て組立てられ、製作品の如きはその一反映として見るか、又はその一部分として考へるより以上の價値を與へる事が出来ないからである。歴史學は今日のところ心理学を力學とした文化史への途を歩まうとしてゐるかに見える。少くとも精神文化を主としない文化史は有史時代にあつては許されないことは明かである。考古學は物質文化の研究を出られないと云ふのは次第に落着いて來た斯學の見解であつて、即ち歴史考古學は主要ならざる文化の物質的方面を限つて擔當してゐる事となる全幅的ではなく部分的である。

これに反して先史考古學は、他に心理的精神的な考察を行ふ可き文献の存してない時代の文化の歴史であるから、同じく文化史と云ふ事が出来るにしても、その内容が異つてゐる。而してこの場合の文化と云ふ概念は、先史考古學に心理的考察の許されない以上たゞ物質的なものであつて、而も全幅的なものである。この兩者を一括して一つの學とする事が出来るかどうか。

一方先史考古學と歴史考古學に於ける研究法を比較して見るに、技巧的な點について言へば、前者は編年に層位的發掘法を主とし、後者は曆に合致させる事に依てゐる。然し形態の變遷を追求して、こゝに反映された型(pattern)の推移を見ようとする事は略々同一である。恐らく先史考古學の方法論が確立された時、そのまゝに推して歴史考古學のそれに充てる事は可能であらう。方法は目的を順致する。故にこの兩者は一つの學に合流する事が出来ること考へられる。

然しもう一度疑つて見たい。學の方法と目的が一致して、その意味する内容が異つた場合兩者を一つの學として扱ふ事が出来るであらうかどうかと。若し先史考古學が今一步を進めて、その文化の特質、それを構成する要因、それを推移せしむる理由などが究められた時、そのまゝに推して歴史考古學に臨む事が出来るかどうか。又歴史時代に於ける文化史の發展が、精神史としての發展徑路、若しくは或種の歴史事象の因果關係を求めて、その中に歴史



考古學の結果を取入れた場合、尙兩者は結果を順致せしめた方法の類似を以て、同一學である事を主張し得るかどうか。私は少くとも先史考古學と歴史考古學を、同一の考古學に統一すると云ふ傳統には可なり懷疑的である。

問題を先史考古學と限定して考へて見たい。先史考古學とは何ぞやと云ふことに就て。定義によればこれは遺物遺跡に依て過去の文化を知る事である。文化はこの場合當然物質文化を意味してゐる。然し物質文化を知ると云ふ事はやゝ内容が漠然としてゐる。それは文化の現象か文化自體の本質か何れかでなければならぬ。文化の本質は既に精神的な主觀的な問題である。先史考古學は方法の章に於て述べた如く、遺物を一文化現象と見ての研究であるからこれは文化現象の謂である。

現象は何事に依らずそれが單に個々別々なものとして、は學とはならない、必ず統一が期待されてゐる。然し本質論にまでは及ばれない。

三 關係學科 以上の立場を説明する爲に、今關係學科を考へて見ることとする。歴史學が考古學に最も重大な關係を有する事は何人も説くところである。勿論先史考古學も或意味

での文化史自體である、然しこれが今日の文献史學と如何なる關係、立場にあるかは吟味されなければならない。

先史考古學の有する文化史觀と、歴史學の史觀とは、今日のところ單に時間的な前後關係だと云つて片附けられる程には似寄りのものではない。立場に於て、方法に於て、又目的に於てすら相當の隔を有してゐる。歴史哲學に於ける歴史の意味が、たとへ因果關係や文化の階段説にまで墮したとしても、尙目的を一にしたものとは云ひ難い。むしろ今日の場合土俗學民族學のそれが、先史考古學には最も密接な關係學ではないかと考へられる。

土俗學の意味を、我國從來の慣例に従つて、土俗品の研究として見るに、この物質に現はれた型の比較研究は立場に於ても甚だ先史考古學への近似を示し、又方法にあつても發掘其他の多少の技巧的なものを除いては一致する場合が多いと考へられる。例へば比較に當つても質と量に對する考へ方、文化の擴りの問題、近縁關係等である。而して恐らく物質を文化現象と見ての研究目的にも相似たものが多いであらう。

民族學が民族の精神的な所産たる、神話傳承、言語習慣等に研究の對照を限つても、その



比較研究の方法に於て、これ等を一文化現象として見ようとする立場に於て、少くとも今日の歴史學よりはより近いものを先史考古學に有してゐる様に考へられる。歴史考古學を一括して、考古學とはと尋ねられればこそ、歴史學は不當の優遇を考古學に得、それが反つて本來の考古學——先史考古學の方向を誤つてゐるものはないか。

先史考古學が層位的な編年をもつて、古生物學に密接な關係を有する事は考へられる、然しこれは方法的な近似であつて、學の立場をまで合致せしめてゐるものではない、一は自然科学に屬し一は文化科學に屬してゐる。この間の遠さは又非常に大きいとも考へられる。まして先史考古學的史觀が、生物學の進化論に養はれてゐるとしても、それは教養の問題である。學と學との關係の問題ではない。又發掘遺物の中に、當時の動物植物の遺存物を含み、是等を研究する事に依て、當時の生活環境を考へ合す事が出来るとするも、この理由の下に、先史考古學を先史學又は史前學として、自然科学文化科學の兩者に跨る特別な一つの學として取扱はうとする事は、それ自身の中に多くの無理が含まはしないであらうか、實際的な研究の必要はあるかも知れない、然しその爲に遂に學としての成立に無理を作ることは一考

を要する問題であらうと考へる、研究の必要からと云ふ理由を進めてゆけば、遺物は物質として物理學的にも化學的にも検査されなければならない多くの場合を有してゐる。然しその爲に字が隣り合せになると云ふ理由はない、たゞこうした學の助力を必要とする場合がある

●

●

四 先史考古學の立場 先史考古學の學的立場は、目下化石人類學其他の研究の必要から、多くの場合人類學に附隨して自然科学の領域に置かれてゐる。これは一つの矛盾である。前述の如く斯學の目的は文化現象の研究にある、而して關與するところも文化科學に多い。

然しその研究の實際に就て見るに、その史觀は生物學的進化論の教養に負ふところ多く、又層位的編年は地質學古生物學のそれを借りてゐる。觀察的な立場、分類的な方法もより自然科学的態度を以てなさるべきものであつて、目的とするところ以外は、殆どすべて自然科学の領域に於て學ばれて不都合のないものである。今日の學の状態で、自然科学的方法是、文化科學のそれよりはより専門化し、技巧的方法に於ても複雑化してゐるものが多い。文化科學的教養は、自然科学的教養並に方法よりは得て學び易いものがある。故に先史考古學が



理科の部門に附隨させられる事は實際的な矛盾はないものと考へられる、たゞこの便宜の爲の部屬から、學の目的自身までもが不明瞭にされる事は避くべきであらうと考へる。

先史考古學の目的たる、過去の物質文化の現象を、統一的に思考すると云ふ事を演繹してそこから期待される文化の性質内容等を云々する事は今日の場合保留さるべきである。何となれば現象を観察して、次第に目的に歸納してゆくと云ふ事が斯學の立場であり、今日の場合その結果を記述する程には學は進んで呉れてはゐない、すべては諸君と共に、一々の事業を積んで到達すべきであらう。その歩み方に就てはこの序説の所々に於て協議した心算である。さあ序説を離れて各論に於て、過去の一々の語彙や事實を知らうではないか。

## 各 説



## 第一章 遺跡汎論

### 第一節 遺跡とは何ぞ

一 従來の見解 考古學研究の目的は、遺物並に遺跡による當時文化の研究であると一般に説かれてゐる。然るに従來の考古學書にあつては、遺跡と云ふ語の概念が極めて曖昧であつた事を否定する事が出来ない。煎じつめてゆけば結局遺跡と遺物は同じ概念になつてしまふので、たゞ常識的な便宜的な分け方であると説かれてゐる。その對立の理由はたゞ物の大きいか小さいかに依つてゐると云ふだけで、濱田博士の通論考古學にあつては、考古學の目的を、物質的遺物と云ふ一語に限られてゐる位である。これは定義と云ふものが、僅な言葉で學を内容づけ制限づけるものであると云ふ事に思ひ致せば、當然な、又周刊な注意であつた。



然し遺物と遺跡と云ふ二つの言葉を並べた場合、この兩語から受ける概念は、單に小さい小さいと云ふ量の上の差だけではない。大きな遺物が即ち遺跡であり、小さな遺跡が即ち遺物であると云ふ、無理にもさうだと教へられて了へば、何だか多少不安だが、さうだらうかでも濟ませるところかも知れないが、少し内容に立ち到つて疑がふて見れば、疑へる節は多量にある。第一に大きい小さいと云ふ言葉は、遂に相對的、約束的なもので、どれより大きいで初めて大きいと云ふ概念が成立する。一より大きいが三より小さいで、初めて二と云ふ物の大きさがはつきりして来る。遺物より大きいから遺跡だ、遺跡より小さいから遺物だだけでは、遂に循環論法である。例へばピラミットは大きいから遺跡である、これを構成してゐる積石は小さいから遺物に當らう。然るにその中に收められた王冠、土器其他のものに比せば、積石も大きな遺跡となる。棺と同じ大きさの積石もあるから、否遺物だとても少し妙な話である。

單に便宜的な區分なら、遺跡遺物と二語並べて、その研究上の取扱に、二途あるが如く示す必要はない、然るに事實のところこの二語は、言葉の曖昧さよりは研究上の取扱がはつきりしてゐる。遺跡の研究法と遺物の研究法では、何時の間にか各々獨自のものを作り出して、或場合に於ては二方法の融通を許さないものが多い。これは明かに二つの言葉の概念が、分裂しなければならぬ事を意味してゐるものである。研究の對照をなす言葉の區分が、本來同一である可きものならば、誰がさうと便宜で定めても、大した言葉の歴史も持たずに、研究法まで區別されて來ると云ふ事は有り得べき事ではない。

近時こんな考へ方も我國で行はれて來た。それは遺跡の概念の裡から、どうしても遺物とは合致しない部分を取出して、これに別な名稱を與へようとする事である。八幡一郎氏が遺跡と遺跡地と云ふ二つの言葉を作つて、地理的概念を伴ふ遺跡と云ふものを別に遺跡地と呼ぼうとした。こうでもしなければ、必要から生じた研究法の相違をどうにも發展させられなくなつた爲と思はれる。これはそのまゝ繼承された人などあるが、祖述者程には考へ及ばぬ點などあつて、このまゝでは一つには將來言葉の混亂を招く懼れもある、而して一方では、遺跡地と分けられた遺跡と云ふものゝ概念は、一體どう取扱へばよいかと云ふ問題がすぐ起る。地球の上では生命の起源と云ふ問題が解決つかず、それは他の天體から飛んで來たのだ



らうと云ふ説を立てた人がある、又他の天體から果して孢子なり細胞なりが、地球に到達し得られるかどうかと云ふ證明に成功した人がある、然しこの證明についても、この場合依然として生命の起源の問題は未解決のままに残されてゐる。例は同じである。遺跡の概念が明かにし得ないから、明かな部分だけ取出して他の言葉を充てゝも、明かでない部分は依然として未解決で残されてゐる。たゞこの取扱は、既に従來の遺跡の扱ひ方に不満を感じ、動搖が生じて來たと云ふ事を示す尊い努力である。

二 遺跡と遺物 遺跡自身の概念を追求する以前に、今遺跡遺物と二語並べて、その内容を比較して見ることにする。遺物は今日に遺存された物質である。而してその研究の目的が文化を知ると云ふのであれば、こゝに文化價值と云ふもので選擇されてゐるであらう事が考へられる。然るに一方遺跡は、濱田博士に依ても「遺跡とは形體大なる遺物、若しくは遺物の集團にして運搬に困難なるもの、……或は遺物存在の痕跡を指すことあり」（通論考古學三七頁、遺物と遺跡）とある如く、單にその痕跡をも指す場合がある。痕跡が物質であるか否かは疑問の生ずる所であつて、砂上に印せられた足跡は、砂が物質だからですぐ物質では通ら

ない。生乾の壁に指跡をつけて、この指跡は物質なりや否やと尋ねては、丁度掌を打つてどちらが音を出したかと云ふ様な、禪問答めいた問となる。遺物が意味した物質の概念は、むしろ物體と云つて差支えない嚴然たる實在の物を指してゐる、然るに遺跡の概念中には、如何に廣義に解しても、物質なりと云ひ切れないものまでも包まれてゐるのである。

これは言葉尻をとる爲に述べたものではない、むしろ反對に、私をして言はしむれば、遺跡の概念は抽象的な、頭の中では作り上げられても又こゝだと地點を明示し得ても、物質を以て再現し得ない概念であると云ひ度い爲である。

三 遺跡の概念 遺跡は單なる空間的な概念であると云つたら、むしろ人々から突飛な提案だとして嘲笑されるかも知れない、然し私はずつと以前からこの考を抱いて、一々の場合に當て箴め様としてゐるのである。

遺跡は遺物に對した容量上の相對的概念ではない、そうして兩者を單なるその場その場の約束で便宜上定めたものとしても、實際上言葉の歴史や研究法の差異が許さない地理的概念を伴ふものゝみを切離して他の言葉を作つても、未知なものは依然として未知で残されてゐる。



る。そこで私はすべて遺跡とは先史考古學研究に於ける空間的地理的概念であると考へる。

遺物が自然のまゝに積成された地點は明かに遺跡である。この遺物のすべてが何等かの事情で取去られてしまつても、地點さへ明かにし得たならば、その痕跡は遺跡である。關東附近の貝塚は、土地の開發につれて、貝は取去られ土地は地整されて、全く遺物の片影をだに留めなくなる場合がある、然しこれでも地點をさへ明かにし得ておれば遺跡として考へるに差支へはない。例へば東京市本郷彌生町の、有名な彌生式土器を出した貝塚は、朝夕往復してゐる者にも、ついで一片の遺物をも示して呉れぬが、遺跡として會得する事は出来る。當時から見れば多少の地貌の變化はあつても、舊海岸線を辿つて、こゝに彌生式を含んだ貝塚が存在したと考へる事に依て、研究の對照にもなり得るのである。彌生町の遺跡ももう無くなりましたと、吾々は日常の會話で云ふ。然しこれを、彌生町の遺跡ももう遺物が無くなりましたと云つても、少しも不審でないのみならず、一層はつきり状態を會得する事が出来るのである。

東京の品川の近くにあつた權現臺の貝塚は、色々な珍しい遺物を出したので有名であつた

が、これはその臺地ともすつかり取られて了つた。即ち實在的な地理的條件迄もなくなつたのである。これは正に遺跡が無くなつたのである。それでも嘗てその地を踏んで調査してゐた人の腦裡には、あの位の高さのこゝいら邊であつたと想ひ起す事は出来るであらうが、實證的な經驗とはならない。單なるイメージであるから、考古學の實證的と云ふ先行的公理に當てはまらない事となるのである。

痕跡と云へば痕跡だが、考古學で云ふ遺跡とは、今日に經驗し指示し得る空間的な地點を指してゐる。空間的な地點だから一方では地理學的なのであつて、遺物はその場所を動かして了つても、尙その證明さへつけば遺跡は存在してゐる事となる。例へば外國の例を考へ合せても、羅馬の戰勝門や道路は、遺物としての石材や其他のものが取去られても、こゝにあつたと云ふ證明さへつけば、地點は遺跡として依然として残つてゐる。而してこれを研究對照として、當時の文化其他を研究するにも差支へはないと考へるのである。それでは道路の敷石等は、そのまゝの状態にあれば遺物か遺跡かと問はれる。そこで今一步立入つて考へて見なければならなくなる。



石器時代の遺跡を發掘する事は、遺物を取る事以外に、今一つ研究の目的があるのだから、慎重な態度でなされなければならぬと云つた。遺物以外の今一つのものとは何か、それは遺跡である。

遺物が築積されて遺跡を形作つてゐると云つた。遺物は一々の物體を指してゐる、この場合遺跡の概念を形成してゐるものは何か。それは遺跡の概念をそのままに、持つて來た空間的な地點（又は場所）と云ふ事である。一つくを取出してへばそれは遺物である。然しこれ等の遺物が自然のままの状態で土中に埋没されて居れば、その相互關係、即ち立體的な存在地點が遺跡を構成してゐる事となる。一旦人の手が加はつて、この相互關係を崩してへば、その地點に於ける遺跡は永久に無くなつてしまふ、残るのはたゞ遺物のみとなる。立體的な相互關係は、後日再現して實證する事が不可能であるからである。

先に私は遺物を取去つても遺跡は、證明さへし得れば、依然として残つてゐると云つた。今又一旦遺物を取去れば遺跡は永久に消滅すると説いてゐる。この矛盾はどうなるのか。疑問の先に空間的と云ふ言葉に就て考へて見ようではないか。

四 遺跡に於ける地理的なるものと歴史的なるもの 空間的な存在には、平面的なるものと立體的なるものゝ二つが考へられる。平面的なるものは地理的な擴りである。立體的なるものは先史考古學にあつては、遺物に依て構成された相互關係である。前者地理的なるものは、地理的條件さへ變らなければ永久に存在するところのものである。然るに後者立體的なるもの（これは先史考古學に於ては歴史的條件である事は後に述べるであらう）は、可動的なるものであつて、直にこの立體的條件が變化する事に依て實證不可能となるものである。遺物は取去られても遺跡は残ると云つた、平面的な地理的遺跡は前述の例で了解されたものとして、今一つ遺跡に於ける立體的歴史的性質に就て説明する事とする。

遺跡に於ける立體的なるものは、同一地域内の遺物に依て構成された相互關係で、從來層位と稱されたものに近い。或は層位自身であるかも知れない。そうしてこれは平面的な遺跡の性質を決定すると共に、その内容をも指示してゐる。遺跡の層位的研究の條に於て、私は目的を、同一地點で經過された遺物の様式推移の追求であると云つた。これはとりも直さず一文化様式の推移を知らうと欲するものであつて、歴史的觀念の下に試られてゐる研究法



である。土壤の裡に包含された遺物一片／＼を、取り離しては遺跡は形を崩して了ふ。そのままの状態を観察して、こゝに色々な歴史的事實を發見し得るのである。最下層に於ける黒色土壤の堆積状態、こゝに掘り込まれた堅穴の様式、人骨埋葬の様式、貝層内に於ける中間層の有無、これを境としての土器其他の包含状態、貝殻の堆積其他。これ等は場所を動かせばその意味は無くなるが、そのまゝで觀察すべき點は極めて多い。これ等の裡から目的に従つて遺物を採擇して、これに自然層位を考察に入れて研究する事を、遺物の層位的研究法だとは、既に述べた所である。

今一括して、前述遺跡の概念に就て記載して見るに、

遺跡とは、空間的な位置を指すものであつて不可動的性質のものである。その空間的な性質から平面的なるものと立體的なものに分けられる。平面的なものは即ち地理學的な性質を伴ひ、單に地點を指してゐる、立體的なものは歴史の構成を意味するもので相互關係を指してゐる。故に後者は不再現的な經驗に終るものである。

以上は總て先史考古學の實證的と云ふ先行公理に約束づけられてゐることは論を待たない

ところである。

## 第二節 遺跡の分布

一 居住地と遺跡 遺跡とは何ぞやと云ふ問題は、勢ひ理論的な物の云ひ方を強ひた、然

しもつと平に、現在ある遺跡の考察から入つて行かう。

遺跡が果して石器時代當時の人々の居住地か否かと云ふ事は、學問の性質が實證的であるだけに、殆ど大した問題にはならない。遺跡と云ふ認定が下し得る状態になれば居住地の問題は起らないし、居住地の問題の起り得るのはすべて遺跡の状態にある地域だからである。然し遺跡、即ち遺物の存在する場所がすべて當時の居住地だつたか否かは多少考慮する必要があらう。例へば田の中から發見された一個の石鏃の爲に、こゝは當時の居住地だと云へば、少し妥當を缺いた考察となる。然しこんな場合には、一體遺跡と云ひ得るだらうか、遺跡とは一方には立體的な構成を持つて居なければならぬ。故に遺跡はすべて居住地と見て、遺物が如何なる状態にあれば遺跡かと云ふ事に留意すれば足りるであらう。

## 第二節 遺跡の分布



遺跡がすべて居住地なれば、そこには居住の爲の條件が具はつて居るべきである。最も簡単な條件は地形に依る條件で、高峻とか狹隘とか云ふ地域には、大して遺跡も發展せず終つてゐる事は、實際の例からも考へられる。恐らく最も大きいと思はれるのが、生活による條件で、生活の利便さへあれば、思ひがけない地域にも、多くの遺跡は存在し得たものと考へられる。然し多くの場合地形と生活の條件は、地域的に一致してゐて、地形のよい所は生活の爲の便もあつたと考へられるので、河川流域地方等は非常に多くの遺跡群を持つてゐることとなる。第三に、文化の爲の條件がこれに加はるべきだと考へる。何等かの理由で、或地域に一つの文化が形成されると、この文化に呼び集められたか、又は呼び集められた爲に自づと文化を支持する様になつたか、何れにしても相當期間に互つて遺跡群の存在を許容すべき状態を呈して来る。例へば津輕の岩木山の北側裾に、或一時期に相當する特殊文化の遺跡が榮えた等で、同じ津輕平野の北側には、殆どこの時期に相當するものが見えないのが不思議である。

一々の地域に就て云へば、例へば南側寬斜面の平の端には遺跡が多いとか、斜面の角度が多少遺跡の存否を支配してゐるとか云ふ事はあらう、特に貝塚などはこれが明かでもあるが、全體的に、全國に就てはどんな割合で遺跡が存し、それが地域的にどんな支配を受けてゐるか云ふ事を見ることとする。

## 二 遺跡の國別表

次頁に掲げる表は、東京帝國大學發行の、第五版石器時代地名表に記載された國別遺跡表である。調査の回数は五回に互り、前後三十年の隔りがあるのだから、例へ、最近一九二八年(昭和三年度)の調査に、尙幾多の未掲載遺跡が存してゐたとしても、國と國とを比較しての遺跡數では、大體に満足されなければならぬものである。又單に石鏃等の重要ならざる遺物を一二發見した個所で、遺跡か否か疑はしいものも多數にあるが、ここで先づ見ようとするのは相對的な、どの地方に石器時代の遺跡が多いか少いかと云ふたゞ二つの問題なのだから、相殺させて考へても大過はないであらう。この表で五回の調査を全部擧げたのは、對照してその増加率から、確からしさを吟味しようとする助の爲である。又この際考へられる事は第四回から第五回に移る調査で、一二の人の努力に依て、思ひがけない國が數倍の遺跡數を得て居る事實である。



第二節 遺跡の分布

中部 地方	佐越	渡中	12	14	14	33	145
	加能	賀登	7	13	13	27	72
	越前		18	19	20	19	32
			12	21	22	22	39
			9	12	14	14	22
近畿 地方	近山	江城	3	3	6	7	39
	丹丹	後波	2	2	2	5	22
	大河	和內	—	—	4	4	12
	和攝	泉津	—	—	—	3	6
	伊伊	賀勢	2	3	5	21	146
	志紀	伊馬	6	6	6	9	13
	但播	磨路	—	—	1	4	12
			1	1	3	18	38
			—	5	5	9	16
			—	—	—	1	53
中部 地方	美備	作前	2	2	2	3	9
	備備	中後	1	1	1	4	11
	安周	藝防	3	3	23	26	37
	長出	門雲	1	3	3	4	8
			1	3	3	5	5
			6	6	6	7	18
			63	63	99	85	86
			20	20	22	21	24
			1	1	2	2	11
			2	2	2	4	20
		1	1	1	1	7	
		1	1	1	21	149	

		調査年號				
國名		第一回 1897	第二回 1898	第三回 1901	第四回 1917	第五回 1928
奥羽 地方	陸羽	122	172	193	241	338
	奥後	191	195	383	410	547
	前中	46	68	123	142	224
	陸前	14	64	120	210	605
	岩代	22	25	40	73	173
關東 地方	藏模	56	57	59	76	166
	總總	50	55	69	81	176
	武相	228	313	683	826	1091
	下上	22	49	89	122	199
	安上	94	140	166	275	313
中部 地方	野野	7	7	11	86	144
	野陸	10	10	11	13	23
	常陸	3	15	20	115	283
	駿遠	38	65	86	181	313
	伊豆	71	75	115	292	369
中部 地方	河江	3	3	3	8	33
	豆河	52	52	53	50	77
	張濃	20	23	25	42	93
	濃驛	14	15	23	43	124
	斐濃	4	5	18	22	34
	甲斐	15	17	49	135	357
	信濃	131	131	133	149	151
	越後	27	27	30	40	197
		144	148	195	278	1313
		29	51	72	142	255

第一章 遺跡汎論



第二節 遺跡の分布

北海道	釧路	根室	7	8	8	13	12
	千島		—	3	4	5	5
			7	7	20	21	23
樺太	樺太					15	56
朝鮮	畿北道	—	—	—	—	—	11
	忠清南道	—	—	—	—	—	6
	忠清北道	—	—	—	—	—	6
	全羅南道	—	—	—	—	—	20
	慶尙北道	—	—	—	—	—	53
	慶尙南道	—	—	—	—	—	13
	黄海道	—	—	—	—	—	11
	平安南道	—	—	—	—	—	22
鮮	平安北道	—	—	—	—	—	1
	江原道	—	—	—	—	—	13
	咸鏡南道	—	—	—	—	—	3
	咸鏡北道	—	—	—	—	—	33
	臺	臺北州	—	—	—	—	16
	新竹州	—	—	—	—	5	
	臺中州	—	—	—	—	16	
	臺南州	—	—	—	—	5	
	高雄州	—	—	—	—	4	
灣	臺東廳	—	—	—	—	—	6
	花蓮港廳	—	—	—	—	—	2
	澎湖廳	—	—	—	—	—	1
計			1841	2281	3133	5188	10157

第一章 遺跡汎論

中國地方	石隱因伯	見岐幡者	1	1	1	1	10
			—	—	1	1	6
			—	—	1	10	19
			1	1	1	30	72
四國地方	阿讚伊土	波岐豫佐	3	3	3	33	45
			29	31	31	40	135
			2	2	5	21	48
			5	5	5	5	5
九州地方	筑前筑後豐肥日向大薩壹對琉	前後前後前後向隅摩岐馬球	4	4	10	18	23
			5	5	10	14	59
			9	9	9	11	23
			10	10	10	21	31
			2	2	4	17	45
			21	21	24	51	71
			16	16	58	102	124
			6	7	7	12	100
			1	1	1	7	30
			—	—	—	1	2
11	13	13	31	33			
北海道	渡後石天北膽日十	島志狩鹽見振高勝	12	14	15	31	36
			23	23	23	33	65
			19	24	24	63	74
			3	3	5	11	12
			11	14	17	17	46
			28	28	28	42	48
			18	18	22	26	28
			2	2	2	3	4



さて表の示すところに依れば、本州の東部日本に對して、西半分の西部日本が、極立つて遺跡の数が少い。今一國百個所以下の遺物發見地を、遺跡の少い所とし、百個所以上三百個所以上を中位のところとして見る。それ以上は先づ分布の中心と考へるのである。斯うして見ると、西部日本には濃厚な遺跡分布の國は絶えてない。僅に大和・出雲・讃岐・日向・大隅の數國が、百個所を僅に超えたことに依て、中位の分布量を示してゐる事となる。然るに一方東部日本では、奥羽地方は北寄りの三ヶ國、陸奥・羽後・陸中が最上位にあり、出羽・陸前・岩代・磐城の少きものと謂も中位を下らない。關東地方にあつても同様で、武藏・下總・下野・常陸の中央部は各最上位にあり、上總・相模・上野の邊陲域にして、尙且中位を下らない。この餘勢は中部山岳地帯にも及んだと覺しくて、信濃・美濃の最上位を中心に、越後・佐渡・飛驒・三河・甲斐までは西部に斗出して中位の分布量を示してゐる。

然るに一方北方でも、津輕海峽を一旦渡れば、北海道の各國々は僅かなる遺跡數を示すに止り、北上して千島・樺太に至つて更に數を減じてゐる。これ等は勿論土地の開發の未だ及ばずして、空しく土地に埋没せる遺跡の多い事をも告げるものであらうが、今日のところ到底東北・關東に對抗する遺跡數に達し難い様に考へられる。以上に依て大體に於て、我國石器時代遺跡は、越後——飛驒——美濃——三河を連ぐ以北の地域に多く、北海道に渡つて數を減ずるものと考へる事が出来る。たゞ三河以東の地に於ても、東海道に屬する遠江・駿河・伊豆・安房等の諸國は、事情が西部日本に類してゐる様に觀取されるのである。

三 遺跡數に地方的差ある理由 以上の分布上の性質を吟味する爲に、どうして此の如き地方的多寡を示すに至つたかと云ふ事を考へて見ることにする。

取扱つたのは遺跡の數である。數は色々な事情に依ては不忠實な解答者となる。例へば同一數の遺跡を有する國々も、その國の面積に依ては直に少量ともなり多量ともなる。又近似した面積があつても、生活地表の廣狭に依ては、實際に見て大小の差がある譯である。全國一萬の遺跡と云へば、相當信用して數量的に取扱へるものゝ様にも考へられるが、一方數年を置いての調査で、忽ち數倍の遺跡を持つ國などが生じては、反つて信用の置けない事情などが考へられる。是等の事情を無くするには各國遺跡數をその面積の比に改め、又地名表に報告した人數をも考慮に入れて、遺跡の假想密度を割出す様な方法も執れるであらう。



東部日本の各地の有する面積は、西部に比して確かに大である。それは徳川時代に至つても、尙宮城野以北を陸奥と總稱した傳統の如きからも當然と考へられる所であつて、勢ひ國當り遺跡數を大にしてゐる。又何等かの原因で、この地方に於ける石器時代の研究が盛になつて來れば、擧つて同志相勵まして發見に勉めた事などもあらうが、然しこの影響は今日に至つては最早大ではない。當時東部日本に限つて特に人口密度が大であつたとする事は、どうも遺跡數のみからは斷ぜられない問題である。寧ろそれよりは、西部日本に石器時代文化に代る可き文化が早く行はれて居れば、勢ひ低文化を排斥して、石器時代の遺跡は少くなつてゐる譯である。事實我國青銅器並に鐵器の文化は、支那大陸より西方を通じて輸入された事は明かであり、東北地方の尙石器を使用した時代、早くも一般に金屬文化期に入つてゐた例もあるので、重要な原因としてこれを數へる事が出来る。この考を裏書きするものに、石器時代遺物様式の多様性が、北するに従つて増して來てゐると云ふ事がある。即ち東部日本は永く石器時代の状態にあつた爲、その遺跡が數多くあると云ふのである。

東部日本の新文化に遅れたのは、獨り石器時代に限らず、恰く歴史時代を通じ、又今日に

於てもそれが見られる。この爲、土地の開墾等も進まず、遺跡の増減するものゝ少い事も、小さな一原因として附加する事が出来るであらう。

#### ○ 四 分布と地域

以上數量に依る遺跡分布の考察は、一見重大なる如くして、何等文化に對する決定的なものを有してはゐない。今一步を進めて、その分布が地域的に、如何なる自然環境に支持されてゐるかと云ふ事を見る事とする。卷末挿入地圖は、本州に於ける遺跡の分布圖であつて、上羽貞幸氏の苦心になつたものである。圖は前掲の表と比べて見ても、量的には必ずしも眞を傳へたものではないが、こゝではたゞ遺跡の所在地點のみが問題にされる。圖に對して第一に氣付く事は、河川流域が原始人類を支配する事甚だ大であると云ふ一事實である。東北・中部・山岳地帯の如きは言を俟たず、關東の如き原野地帯にしても、尙大部分の遺跡は河川に據つて分布してゐる。これは河川の獨り交通を助けるのみならず、生活、文化支持の一要因ともなる事を示してゐるものである。故に諸君が一地域に限つての研究に際しては、他の地理的條件よりは、第一に河川を單位にとられる事が最も自然的であると云ひ得るのである。



河川に次での分布圏は、海岸線中の灣入の地方に見る事が出来る。特に貝塚の分布はこれに支配される事が殆ど絶對的であつて、海濱浪荒く灣入に乏しい日本海岸地方にあつては、僅に平野地帯に二三の淡水貝塚を見るのみで、他に絶えてこれを見ないと云つても大した虚張ではない。然るに太平洋岸では、北方より述べて陸奥小笠原沼附近（この沼は當時入江であつた）陸前海岸地帯中特に灣入を示せる個所（氣仙沼郡附近並に松島灣）常陸霞浦附近特にその南側（この浦も奈良朝の頃までは鹹水の入江であつた事が文献にも見えてゐる）東京灣周邊、伊勢灣附近特に渥美半島、備中兒島灣附近、九州有明灣附近等が擧げられる。尙貝塚の所在地域は、入江の海底の状態、背後の丘陵の關係、冬期に於ける風向其他種々なデリケイトな關係が存してゐたらう事も察せられて興味がある。次に地名表第五版に載せられた全國貝塚數を表示して参考に供へ度い。

國名	貝塚	國名	貝塚	國名	貝塚
陸奥	11	河内	1	遠江	10
陸羽	2	伊勢	1	三尾	10
陸奥	10	伊摩	1	美越	5
陸奥	50	伊馬	1	佐越	2
陸奥	22	前中	4	越加	2
藏模	149	後藝	3	越加	1
藏模	11	防雲	1	越加	1
藏模	113	豫佐	2	越加	1
藏模	14	伊土	1	越加	1
房野	2	筑豊	4	越加	1
野野	1	肥日	1	越加	1
野陸	2	大薩	1	越加	1
陸奥	86	陸球	2	越加	1
遠江	10	日向	1	越加	1
河張	10	大陸	1	越加	1
濃後	5	琉球	1	越加	1
渡中	2			越加	1
賀前	3			越加	1
渡中	2			越加	1
賀前	2			越加	1
賀前	2			越加	1
賀前	1			越加	1
賀前	1			越加	1
計	616				



## 第二章 一般的なる遺跡

## 第一節 遺物包含地

一 遺跡の類別 遺跡が色々の名前で、類別して呼ばれてゐるのは、すべて今日の存在の状態に於てである。當時地表に散布した遺物が、永年の風雨の裡に土中に埋没されれば、それは包含地として呼ばれる。同じ埋もれたものでも、貝殻が最も顯著な遺物であれば、それは貝塚である。同一の地點で、貝殻を含む地點と然らざる場所とがあれば、嚴密には××遺跡に於ける貝塚の部分、包含地の部分と分けられるが、これも勿論、必ずしも遺物に依る文化的差の意味ではない。一旦土地に埋もれたものが、再び開耕其他の事由で遺物を現はせば、普通に遺物散布地と呼ばれるが、極めて曖昧な區分法で、全然遺物を現はさなければ包含地とも認定出来ないのだし、包含された全部の層位の遺物が散布する事も殆どないのだから、

何れは踏査者の感じ一つで、どうにでも呼ばれる事となる。近頃では特殊な堅穴や住居の敷石遺跡が現はれ出して人々の注意を惹き、聚落遺跡とか堅穴遺跡とか呼ばれてゐるが、それ等は包含地の下層や貝層の下から現はれる場合なのだから、特殊な文化的構造や、特徴的な部分で名稱が與へられてゐる事となる。又人骨埋葬に依る種々な状態から、それ計りが遺跡の性質を代表して扱はれてゐる事となる。特殊な場所、例へば今日荒涼たる砂丘上の遺跡とか、水底から発見される遺跡とか、火山灰熔岩其他の堆積物の下から発見されたものなどで、一々異つた取扱を受けてゐるものもある。特殊な遺跡は勿論今日の状態から見て特殊なので、遺物から離れて遺跡自身としてその場合／＼の研究が企てられるのである。今これ等遺跡と總稱されてゐるものを、一般的なる遺跡と特殊なる遺跡に二分して述べる事とする。一般的なる遺跡とは遺跡と呼ばれるものが舊生活地點一般を指すべき性質のもので、特殊なる遺跡とは、遺跡内に於ける特殊構造、又はその部分を指してゐるものである。

二 遺物包含地 遺物包含地の事に就ては、既に各所で説明を加へたが、今日の地表から數尺下の土壤中に、石器時代當時の遺物が包含されてゐるものを云ふ。それも山崩れ其他の



特殊な事情で埋没したのではなく、一樣に、永い年月の経過につれて土中になつたものでなければならぬ。年月が経過すれば、必ず平潤な原野に置かれたものが、數尺の土に埋もれなければならぬかどうかと云ふ事は、今日のところ明かではないらしい。第一の原因は植物質のものが上へ積つて、腐蝕して土壌を作ると云ふのだが、五尺六尺の土壌が、獨り斯うした作用で干を單位にした年代の裡に作り上げられるかどうか。第二に風水の作用で火山灰質のもの又は高臺の土壌が流れ寄つて遺物を埋没したとも考へられるが、火山灰を蒙つた遺跡層は稀であり、必ずしも遺跡は附近に高臺を有してはゐない。雨水は反つて土壌を崩壊する作用を營んでゐる。この他洪水、岩石の崩壊色々の事情が考へ合されるが、然し吾々の知らなければならぬ事は、どうして遺物が土壌に包含されたかと云ふ事ではない。包含された遺物がどうあるかと云ふ事だけである。

包含層中には今日の地表から、七尺八尺の深さにまで達してゐるものがある。が多くは二三尺から四五尺迄の間にあつて、時には一二尺の層で盡きてゐるものもある。層が深いから必ずしもそれが古い時期の遺跡であるとする事は、前述の土壤成因が明かでないから一概に



第四圖 陸奥是川遺跡遺物包含状態

この地は特に遺物の保存が良好であつて、獨り完全土器のみならず、木製品等を出してゐる事も後述する通りである。



は定められぬ。同様に包含層に達する迄の表土の厚さから遺跡の年代は決定し得ないものと考へなければならぬ。表土の厚さは表土の厚さとして、層の厚さは層の厚さとして、各々その場合に臨んでの考察が必要となるであらう。たゞ非常に接近した二遺跡で、一方が二尺以上の表土を、他が四五寸の表土をしか持たないと云ふ様なものがあり、その原因に就て他に適當な事由がなければ、一つには年代の差ではないかと云ふ様な解釋は與へられる。

同一遺跡に於ける層の關係は、これと反對に必ず年代的要素を含んでゐる。第一層と第二層で、何等かの差があれば、この主要原因は時代的差と考へられる。故に層位的研究を直に年代的研究に移し得るのであつて、その理由に就ては本書研究法の章にも述べた通りである。たゞこの場合、層の厚さが年代を反映してゐないと云ふ事を注意しなければならぬ。即ち第一層が一尺、第二層が二尺あつたとしても、後者は必ずしも前者の二倍の年代を經過してゐる意味にはならぬ。遺物埋没の經過を、その様に機械的に考へられないからである。この事は、諸君が多少の廣い範圍に亙つて遺跡を發掘されるならば、直に了解される所であつて、A地點に於ける第二層が二尺第三層が一尺あつたとしても、少し位置を變へたB地點で

は、二層が一尺三層が二尺五寸と云ふ風に、實に複雑な状態を示すものである。加之A地點で上下三層に分れたものが、B地點では五層あると云ふ様な事もある。

遺跡の示す各層が、當時の生活地表と如何なる關係にあつたかと云ふ事は、今日明言し得ないところであらう。即ち三つの層位があつて、層の變り目は整然として觀取し得、そこから發見される遺物にも、多少づゝの様式差異が見出し得たとしても、この地點に於ける第一期生活者は、第三層と二層の境の面に於て、今日吾々が地表に活動するが如く活動し、生活して居たのかどうかは、追求し難い問題である。一般的な理論から云へば、第三紀に於ける生物は第三紀の地上に、洪積期に於ける人類は洪積期の各地表に生活してゐた。故に我國石器時代の人々も、A遺跡にあつては第一期の人達は第一層を、第二期の人々は第二層の層位面を生活地表としてゐても差支えない様に考へられる。然し我國に於ける石器時代の年代は餘りに短い。よし今A遺跡が、前後一千年に亙つて生活しつゞけられたとしても、これを三層五層に分つて、その一々の時期を地中から探し出し得られるかは疑問であると思はれる。これは可能であると假定してもよい、然しさうすれば一方層位の決定が、非常に困難にして



重大な意味を持つて来る。これは事實には研究を不可能ならしめる假定である。

最初層位の決定は、遺物包含の状態並にその様式差異に依て決定された。目的とする所は遺物様式の年代的推移である。故にこの層位別に立脚して、問題を當時の生活地表にまで演繹してゆく事は、不必要ではなくとも實證を不可能ならしめる事となる。

當時の生活地表をさへ明かにし得ない場合、更に當時の森林、丘陵、河川の状態を論述し、生活環境を考求しようとする事は、多くの不可能を持つてゐる。その生活環境の謂が、遺跡より發見さるゝ貝類獸骨等による食料品の考證、貝塚分布による舊海岸線の考察等なれば、それは各々の立場と理由と目的を持つた研究法がある。然し單に當時の人々の一々の日常生活を論じ、局所に立つて當時の地形を指呼するならば、それは一篇の物語にしかすぎなくなる。遺跡の研究からは、そこ迄は入つて行く途がないと云ひ度いのである。

### 三 土器塚

土器塚又はかわかけ塚の名は、吾々に舊い想出を起させる。それは今日死語となつて、全く遺物包含地と云ふ新しい名で置代へられたものであるが、言葉の歴史の爲に多少の記載を強請してゐる。

土器塚の名の古い文献に現はれたのは、恐らく私の知れる限りでは、場所としては東京市外目黒町上目黒駒場野のそれ一つである。記載されたものには菊岡沾涼の江戸砂子五（享保十七年）齋藤長秋の江戸名所圖會（天保七年）その他にも古川古松軒の四神地名録、幕府で編じた新編武藏風土記稿にも記されてゐたと思ふが、何れにしても引用があらうから、量は大した問題ではない、たゞこの頃から色々な地誌類に、石器時代遺物の記載が現はれ出し、その名稱も今日ではこの様に改められてゐるものもあるが、依然としてそのまゝ用ひられてゐる貝塚の名の如きがある。土器塚の名にしても、大正初期までは確に一部の方面の人々に用ひ來られてゐたのである。

### 四 泥炭層中の包含地

我國に於ける包含地遺跡中、特殊なる存在の状態で知られてゐるものが二三種ある。その中泥炭層中の包含地が、甚だその例少きにも拘はらず、大なる價値を持つ所以のものは、この中に於ける遺物の保存が非常に良好で、他の遺跡では、到底夢想だにし得ない様な状態にある爲である。

遺物はすべて、常に乾燥か又は浸濕してゐる場所では最もよき保存の状態を示して呉れ

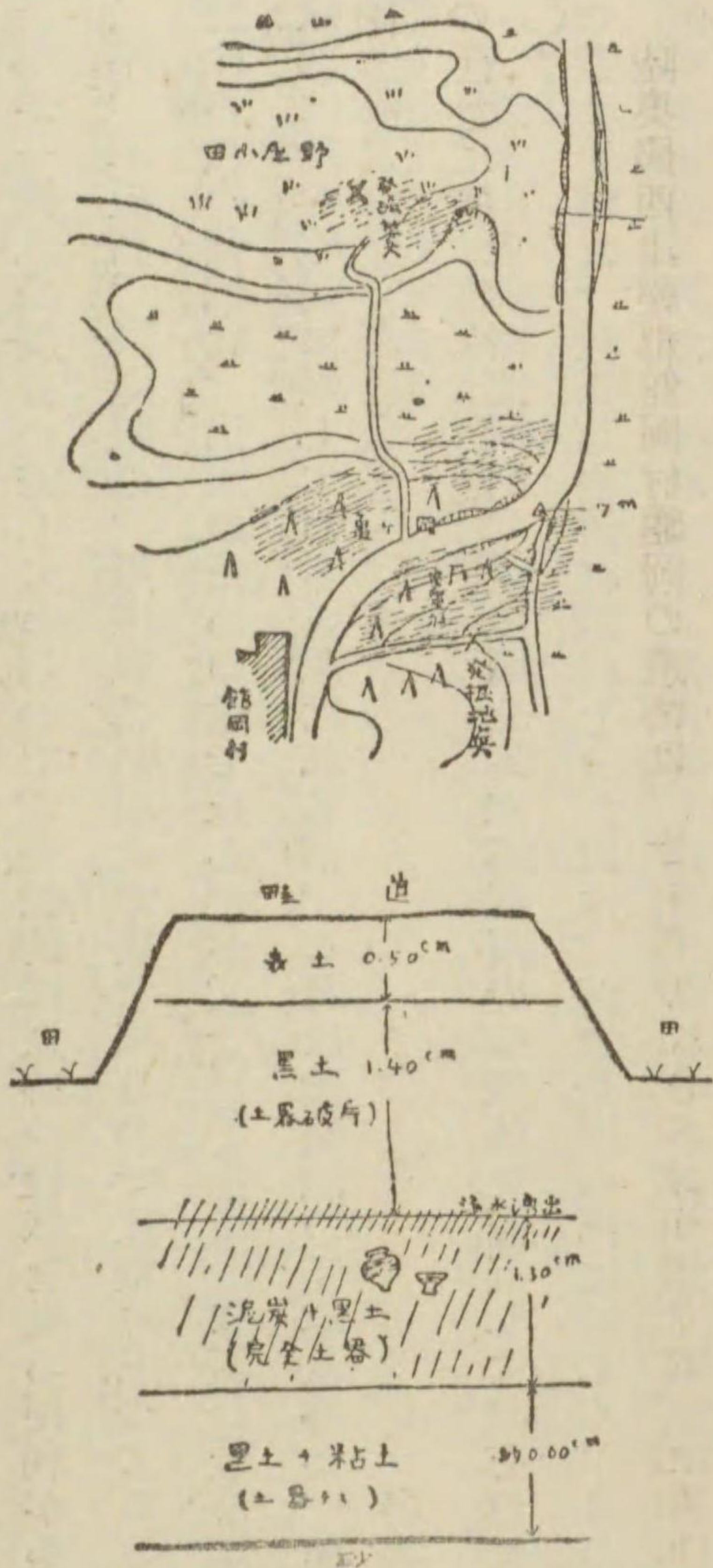


る。中央アジアに於ける砂漠の地や、メキシコ・ペルー人に關する遺物が、生物のミイラ、又は完全な多くの遺物を存するは、常に土地が乾燥した状態にあつた爲である。我國の如きはこの状態に當てざる遺跡はない。然るにこれと反對に、常に浸濕した場所の遺物も亦よき保存を示してゐる。スイスの湖底から、水上住居當時の遺物が、家屋の構造、織物、果實等をも含めて發見されてゐる等である。

我國の泥炭地遺跡は、この常に浸濕せる土地に屬してゐる。故にこゝからは、果實、木製品、骨角器、漆様製品等を多くの完全土器等と共に出してゐるのである。私の知つてゐる範圍では、こんな遺跡は全國三四ヶ所しかない。もつと多くの場所が、發掘法の進歩と諸君の注意に依て將來は發見し得られるであらうが、今その實例に就て多少の説明を加へて置く。

陸奥國西津輕郡館岡村龜岡の遺跡は、津輕舊廳日記の永祿日記に、元和九年正月奇代之瀬戸物を掘り出すと記された、由來では日本最古の遺跡であるが、遺物の豊富だつた事も日本一二を降らなかつたものらしい。遺跡は雷電宮の丘を中心に數丁歩に亘つてゐるが、掘はす

べて現在の苗代田に及び、こゝが泥炭地遺跡になつてゐるのである。昭和三年私の發掘したところに依れば、地表五〇糎は表土で、次の一米四〇糎は黒土層とも稱すべく、二次的に堆



第五圖 陸奥龜岡泥炭地遺跡

龜岡は田小屋野遺跡と相對し互に性質を異にした遺物を出す。龜岡にあつてもその低地の一部が泥炭地遺跡をなすものであつて、こゝでは二米下で泥炭層に達する。(著者實測)

積した土器片が雜然と混じてゐる。この下層より水が湧出し、その下一米三〇糎に亘つて泥炭層に達する。遺物は完全土器を主とし、果實其他を交へて甚だ多く出る。更に六〇糎の粘土を混へし黒土層を隔て、盤たる砂混層に達するのであるが、この泥炭層から骨角器の出る



事は報告に依て知られてゐる。木製品もあつたかと思はれるが恐らく不注意のため逸したものであらう。その證據には大きな木材がそのまま出て来る。

同じ陸奥の國でも東側の、三戸郡是川村中居遺跡は最近その夥しい發見品が知られ、殆ど全部が一個人の所有に歸してゐるので、全般的に遺跡の性状を見る便利がある。特にこゝ一二年、木製品、漆様製品、蓆様製品が相次いで出て来るので注意に上つてゐる。昭和二年春に於ける私の發掘は、出水のため途中で止んだが、次の如き見取圖が發掘者に依て報ぜられた。状態は殆ど龜岡に類してゐると思はれるが、これは發掘法の丁寧な爲か、前述の如き木製品等を出したのである。

最近大山史前研究所は、武藏國北足立郡眞福寺の遺跡を發掘して、その低地から泥炭層中の遺物を得た。發見品中漆様製品を含んだは、前者是川の例に同じく、この他種々な動物遺骸其他を得られた。何れは近く報告書も刊行されるであらうが、關東に於ける此の如き例は一層興味をそゝるものがある。

泥炭地遺跡は多くの有機質遺物を出し、全然相知れなかつた方面の文化様式を知らして呉

れるものがあるが、その發掘は如何にも困難である。地表一二米にして出水し、その盤は多く數米にも及ぶ深さがある。これは植物質等の土壌化するよりは泥炭化する方が植物質等の量を増す爲であらうし、その堆積が容易な事も考へられる。然し將來はこの困難に勝つて、水中に浸された未知の文化を取出す事により以上の努力を拂はなければならないだらう。(こんな場所を發掘するには秋季水の少い時を選ぶか、低い方に井戸を掘つてポンプ其他で水を汲出さなければならぬ)。

泥炭地が生活地點であつたと云ふことは、一寸と考へられないところである。即ち泥炭は常に低濕なる水溜又は浅い水底等に生ずる。今日に於てもこの不完全な土地の利用は、歐洲の低地を有する國々の頭痛の種ともなつてゐるし、我國でも東北地方等で、僅に冬期の燃料を取つて深田の不便を補つてはゐるが、この上に住居を構へようとする人はない。私は一々の傍證から見て、前述二者龜岡・是川は、土地の降下に從つて河水の侵入を見、嘗て乾いた土地に泥炭を生じたものかと考へるし、武藏眞福寺は、發掘者甲野氏の言の如く、流水に依る遺物の低地流下かと考へてゐる。これ等も將來の遺跡學的一問題として残るものであら



う。

### 五 瀝青土中の遺物

蘚苔類植物の沈澱が泥炭地を生ずる様に、石油湧出地方に於ける沈澱物は瀝青土を形成する。このものゝ我國に産するは僅に羽後の一二の地方であると告げられてゐるが、その羽後南秋田郡豊川村の瀝青土層中、舊象の齒牙と共に縄紋土器片を出した事は、發見の當時は相當有名な事柄であつた。この地方にあつては毎冬期農夫が田の下を深く掘つて瀝青土を採集してゐたと云ふから、舊象の齒は深く年代の異つた下層から發見されたものであらうが、今日は確に秋田縣立圖書館に並べて收藏されてゐる。土器片の發見を以て直に遺物包含層と看做し得るか否かは疑問を存するが、この地の瀝青土層は既に發掘され盡して、私の訪れた時もたゞ一塊を記念に與へられた程度だから、再び調査する機會は去つた。然しこんな事が考へられる。東北地方に主として發見される遺物には、膠漆様物質を塗布したものがあつた。例へば石鏃の込みの部分、石匕の柄、土器の破目等にこれを塗つて、膠着劑にしたものである。この中に瀝青土を用いたものゝある事は證明されてゐる。この材料は羽後豊川よりも石器時代の當時から採集されたであらう。この遺跡は斯くて瀝青土中の

包含地としてより膠着劑の原料採集地としての意味を持つて來る。

### 六 火山灰下の包含層

火山灰下の謂が、若し關東に於けるロームの薄い層を指すならば、それは珍しいにしろ時折は諸君の經驗にも上ることがあらう。ロームは到る所に露出して、風と共に散じ水と共に流れ、第二次的な空中沈澱を遺跡の上に行ふ事がある。然しこゝで云ふ火山灰下の遺跡とは、人類居住以後の火山活動に依て、全く地中に埋没された、云はば石器時代のボンベイを意味してゐる。此の如き状態にある遺跡は、我國の如き火山活動の劇しい國土にもそう多くはない。大正九年山崎五十磨氏に依て報せられ大正十年京都大學考古學教室が、調査報告書を出してから有名である、薩摩國指搦郡指搦の遺跡がそれである。

類似遺跡としてのそれは、其後も時折各地で報せられた事があるが、私は果してどんな意味のものだか知らない。それよりも、この火の禍の居住跡は、次の熔岩流下の遺跡に依つて同じ不幸を述ぶべきである。

### 七 熔岩流下包含層

伊豆大島に於ける熔岩流下の遺物は、既に明治三十四年に於て報せられてゐる。當時鳥居博士の調査に依れば、野増村より波浮に向ふ涯濱の、その浸蝕を受け



た個所に二〇糶餘の熔岩流を蒙つて石器時代の遺物が存在してゐる。遺物は高熱に焼爛れて居住者の被害を物語り、人骨獸骨をも伴つた。附近にはこの上層泥流層面に相當して年代の遅れた彌生式遺物を出すと云ふから、慘害を忘却する時日の過ぎてから、再び人々の居住するに到つたものらしい。

この後屢々人々は富士山下等に於て、同じ溶岩流下遺跡の存在を告げる、然しこれ等も學界一般の承認を得るには、尙將來の時を要するのであらう。特にこれ等から附近火山の活動状態を歴史づけるには慎重の態度を要することゝ思はれる。

## 第二節 遺物散布地

一 散布地とは何か 遺物散布地と云ふ言葉は、遺物包含地と云ふに對したものととして一般に取扱はれ勝であるが、それはその一部の状態であるとしか云へない。一旦土壤に包含された遺物が、耕作其他の原因で掘り返されて、今日の地表に遺物を散布しても、それは全部の地下のものを露出した意味でもないし、一方包含地と云つたところで、多少の遺物は地表で

散見するのだから、全く程度の差だけである。散布地の下層には、薄くとも遺物を包含した層を保つてゐるものも多い、たと採集時の便宜から、あそこの遺跡へ行けば、地表でも遺物が採集されるとか、又はあれは發掘には適しないと云ふ、一種の符號の爲の種類分けと考へられる。

然し若しもこゝに、石器時代以來何等かの理由で、嘗て遺物が土中にされた事がなく、そのまゝに散布してゐる個所があれば、これは注意をひくべき遺跡である。北海道に於ける貝塚が、未だ表土を蒙らず、丘状をなして堆積してゐる如く、貝殻を伴はない遺跡が舊態依然たるものも或は地方に依てはあるかも知れない。然し私は不幸にしてさうした例を知らない、又嘗て散布地と稱されて來たものが、そんな遺跡を指してゐたのではないと云ふ事は明かである。

單に一二遺物の發見地で、居住址としての遺跡とは考へられないが、その場所が注意すべきである爲に、特殊なる散布地として扱はれてゐるものが一二ある。水中の遺物發見地、高地に於ける主として石鏃の發見地、砂丘上の遺跡等が是である。



## 二 海中に於ける石器の發見

藤原貞幹の集古圖並に松岡信正の讃岐名所圖會一卷に云ふ。讃岐國高松の海中網を擧げて石劔一枚を得ると。この品は今日にまで傳はつてゐる筈であるが、如何にして此の如き個所より石劔を得たかは今日明かにし得ない所であつて、或は共に齋甕一個を藏すと聞けば、嘗ては陸上だつた地でもあらうかとも考へられる。同じ海中發見品でも、越中海岸に石錘を引上げたと言ふのは、遺物の性質から成程と思はれるのである。

## 三 湖底に於ける遺物發見地

明治四十一年信濃諏訪湖中の淺瀬會根（今日湖岸を去る五百米附近）に於ける石器時代遺物の相次ぐ發見は、湖上住居の問題にからんで、學界に一大センセーションを捲起した。スイス、ジュネーブ其他の湖岸では、これより前、石器時代より金石併用期にかけての湖上住居の遺跡が數多く發見され、原始居住の様式に、湖邊に杭を立て、小屋掛する風の存することを明かにした。當時の遺物は湖底に沈んでよく有機物質をも保存してゐたのである。

諏訪湖底遺跡が果して湖上住居のそれであるか否かに就ては、賛否相半して兩々下らず、久しく問題の中心をなしてゐた。即ち坪井博士に代表さるゝ考古學者の一團は、湖上住居と斷定し、我國古代の風にも之の存する等の考證にまで及んだ。一方神保小虎博士に代表される地質學者は、土地の陥没に依て湖畔の遺跡が中頃湖底に沈んだものである、と云ふ説であつた。然しこの地方に於ける土地沈下の存した考證は、湖上住居説に味方しなかつた爲、何時かその説は止んで了つた。

最近近江琵琶湖々底より縄紋土器其他を發見したと云ふ報告は、人々を驚かした、それはこの地方にあつては、完全なる縄紋土器の發見が既に稀有な事に屬してゐた。而して先の諏訪湖のそれが、湖面僅に數尺の淺瀬であつたに反し、これは數十丈の最も深い部分に當つてゐたからである。

此の如き場合、湖上住居説は勿論考慮の餘地のない問題となる。而して土地が姉川地震帯に當つてゐると云ふので、或は地震による土地の陥没かなども考へれば考へられるだらうが、この證明がつけば、我國に於ける人類居住以後、この地に數十尺、又は數百尺の土地陥没の存したことを斷ずる事が出来る。遺物は此の如き考證には關係なく、時々網に引かれては、既に數個の完全土器を出してゐると云ふ。



四 高地に於ける石鏃發見地 高地に於ける石鏃發見の事實は、たゞ珍しいものとして時折報ぜられてゐる。信濃に於ける五千尺の高地にその形を見、上野の三千尺の山中に見たと云ふ。最近北海道大雪山頂七千尺の個所で石器並に石器原料の散布地を見出したさうだ。北海道に於ける七千尺は、或は雪線を超えてもいよう、こうした所に石器の材料をさへ見出した事は、たとへ一時にしろ居住の行はれた事を示すもので、生活の必要に依ては人は文明の如何に關はず、難所にも身を置く事が想はれて興味がある。たゞ信濃其他に於ける例は今日のところ狩獵者の足跡を想ふ程度のものである。

五 砂丘上の遺跡 砂丘上の遺跡が散布地だと云ふことは、それがたゞ氣紛れな風のために、時々一部分を表面へ現はす包含地だと云ふ位の意味である。

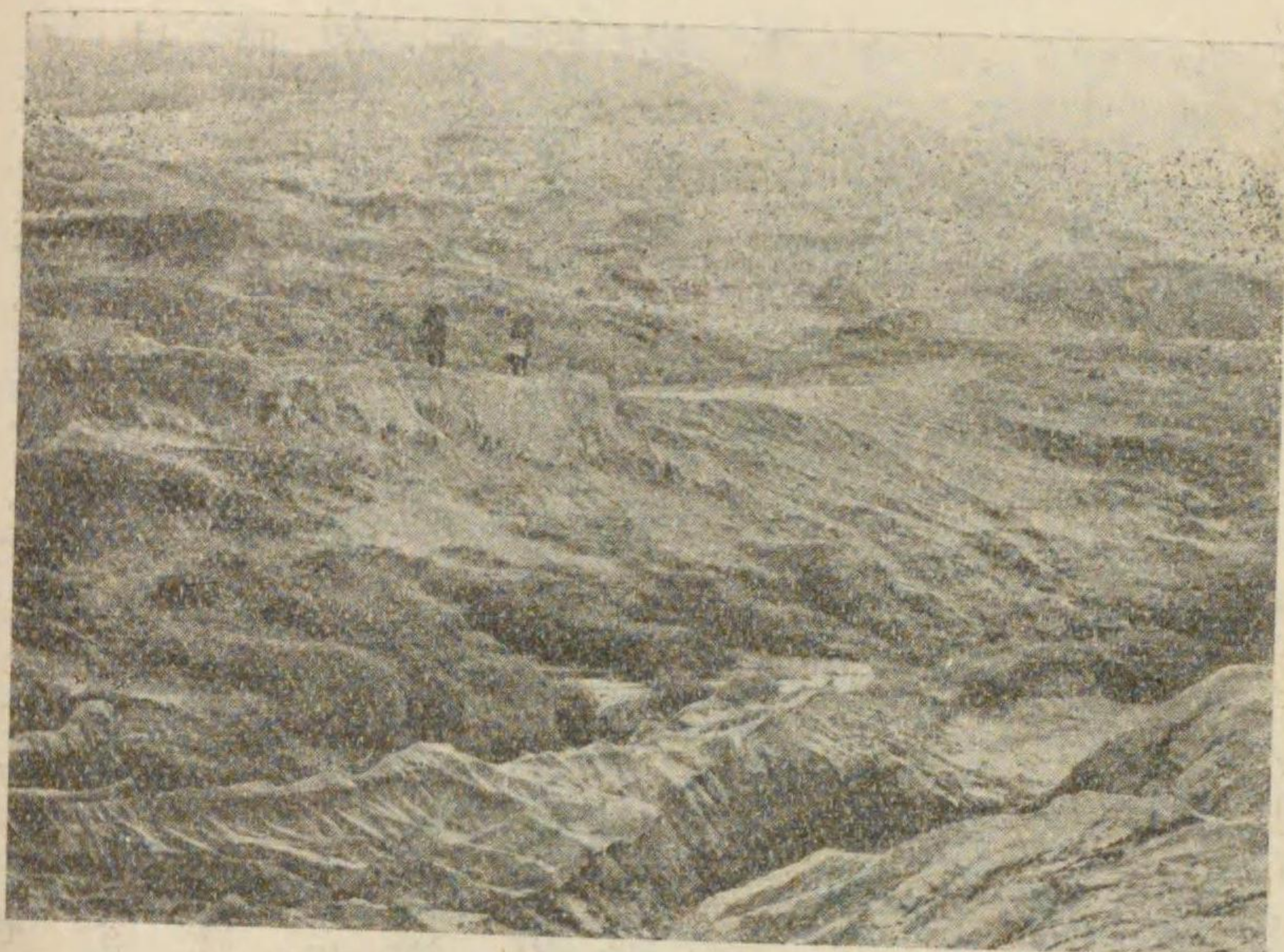
日本海々岸一帯に發達した砂丘は、所々に石器時代の遺跡を持つてゐる。それも今日死砂丘となつて、その移動を止めたものではない。浪荒い日本海に直面して、列風は常に砂を飛ばせ、一年毎にその形を變へる砂丘の上である。こんな所の遺跡は、組織立つた調査にも不便であれば、何時行つても同じ地貌にあるのではない。所々崩れ立つた丘の蔭に、層は見えないが砂に磨り消された土器片などが散じてゐる事が多い。

因幡國濱坂遺跡がその一つである。丹後國熊野郡湊村函石濱のものは既に後列に退いて、砂丘は活動を休止した場所と云ふが、石器時代以後貨泉青磁をまで出して、永い年代に亘る居住を物語つてゐる。

羽後國河邊郡新屋濱に於て、御物川改修工事を行つた際は、百尺の砂丘の下から縄紋期遺物を發見した。更にその地下六尺の個所から、組合式木棺並に人骨を出してゐる。木棺に伴出した祝部土器が一個、私の調査後發見されたと云ふが、所在を失して年代は不明になつてしまつた。木棺所在面は水の湧出面に當り、保存は大變よい。そろしてこの層位には所々大きな潤葉樹の根が立つたまゝに挟まれてゐる。

この事實は次の如く解さるべきであらう。木棺は地下式壙で、先づ奈良朝又は平安朝頃にも、當時縄紋土器を散布してゐた地表から六尺計り掘り下げられて埋葬された。この頃の地は砂丘の害を蒙る事なく、潤葉樹の生繁つた原野であつた。百尺の砂丘はその後に於て、次第に移動して來て一切をその腹に呑むに至つたものであらうと。





第六圖 羽後西目海岸砂丘上遺跡

今日の海岸線に直面し、雨水の浸蝕を受けてゐる所に遺物包含層が露出してゐる。この下方に大なる潤葉樹根並に樹葉層の存するのは、過去にあつては海岸線を遠去かつた森林帯であつた事を證してゐる。

活動しつゝある砂丘は、今日にあつても生活の地點ではない。特に日本海の激浪は、多くの場合原始住民の生活をおびやかすはしても、これを保證する事はしなかつたであらう。今日砂丘下の遺跡は、次第に内地に侵入して來るこの砂丘移動の爲に埋没されたものが多いであらう。

次に今一つの例を擧げる事が出来る。同國由利郡西目の海岸は、海に臨んで可なり舊い時期

の粘土及砂から成る丘を持つてゐる。そうしてその内側に近代までラグーンを抱いてゐた事は、西目潟の存在した事に依つても、現今の地形からも考へられる。この海際の丘の上に石器時代の遺跡がある。一部分は淡水の貝塚で、一部分は包含地——又は散布地であるが、共に今や海に嚙り取られようとして、僅に斷崖に遺物の露出を見せてゐる。而も包含層下には、新屋濱下層に於て見たと同様な潤葉樹根並に落葉の層を有してゐる。この事實は何を物語るか。嘗ては海岸に離れて、潤葉樹の存在をさへ許した土地が、石器時代以後の海岸線の浸蝕に依つて、今日將に海に落入らうとしてゐるのではあるまいか。この以前には、多分深く砂丘下に埋もれた時代もあつたであらう。砂丘上の遺跡は、獨り地盤の相違の問題ではない、絶えず動きつゝある砂丘の、海の歴史が伴つてゐる。

第三節 貝塚

一 貝塚の歴史 貝塚發見の歴史は、我國に於てもさほど新しいものではない。和銅の撰



にかゝると云ふ、常陸風土記那賀郡の一節に、次の如き記載がある。

平津驛家。西一二里有岡。名曰大櫛。上古有人。體極最大。身居丘壟之上。探蜃食之。其所食貝。積聚成岡。時人取大朽之義。今謂大櫛之岡。其大人踐跡。長卅餘步。廣廿余步尿穴址。可廿餘步許。

この一其の食ひし所の貝、積聚して岡を成す。が貝塚か否か疑はしいと云ふ人に、次の享保四年刊行の、佐久間義和の撰する奥羽觀蹟聞老志を示さう。同書磐城國宇多郡手長明神の條に、

新地村中有農家。曰貝塚居。往昔有人。平日居伊具霞狼山。好食貝子。臂肘甚長。屢伸長臂于山巔。而撮數千貝方於東溪中。嚼其子而棄殼於茲地。委積如丘。鄉人稱其神。而謂之手長明神。委殼之地謂之貝塚。其朽腐殼至。至猶存焉。

こゝでは明かに、巨人の貝を棄てた所を貝塚と謂と見えてゐる。巨人傳説は我國にあつてはダイダラボウシ等の名の下に、全國に亙つて聞く所であつて、これが時には地質時代の貝の化石を説明し、又貝塚の起源を物語る事となる。貝塚あるが故に貝塚村の名の生じたのも、

新編武藏風土記稿に見えた武藏葛飾郡の貝塚村があり、遠くは陸奥國上北郡に於てすら見るのである。

明治初期に於ける先史考古學の啓蒙期も、先づ貝塚の發掘調査を以て始められた。米人エドワード・エス・モールズが、明治十一年武藏荏原郡大森で發掘した、あの有名な報告も、貝塚のそれであつた。(當時 Shell mound は介墟と譯されてゐた)その後間接直接氏に啓發されて、後には東京人類學會の創立に關はつた人々も、すべて貝塚を研究の對照にした。貝塚は獨りその發見の容易なるのみならず、東京を中心とした四方數哩、求めて必ず得られるところの遺跡である。故にその記載が、よし江戸名所圖會に現れてゐたにしても、遺物包含層又は土器塚と、一般に通用する言葉が明治三十年頃に生じたものとは格段の差異であつた。

貝塚の名の歴史が舊く、その調査も容易であるにしても、遺跡即ち貝塚と、このものゝ價値を過重視してはならない。前に遺跡分布の章で述べた如く、その分布は地方的に制限される事が多く、全国的に代表させて比較するには不便である。たと人骨等の有機質遺物を多く残してゐるので、さうした方面の調査には自づとこれが選ばれてゐる。



## 二 貝塚と包含地

包含地を、たゞ語義の上から解すれば、貝塚も同じ包含地である。ただ後者は貝殻を多く包含してゐるにすぎない。貝類が主要な生活の料となつたには、自然環境の良き条件が必要であつた事は屢述の通りであるが、或はこの上に時期の上での条件も加へられてゐたかも知れない。と云ふのは、或は一年の中で、限られた季節だけ貝を主要食としたかも知れないし、又永い生活の年々、ある頃にこれを主として用ひたかも知れないと云ふのである。貝塚中に獸骨其他のものも多く挾雜され、人に依てはあそこは貝塚だなど、呼ぶものもある。又發掘してみても明かな様に、一つの貝塚には地域的にも層位的にも、包含地と云はれるものと同一の状態を呈してゐるものが必ずと云つてよい程つき纏つてゐる。貝層下の包含層、又は地點の貝層を伴はざる場所と云ふ様なものはざらにある。これは、貝層生活者が必要貝類のみで生活を支へたのではないと云ふ事を示すと同時に、貝塚築成は一遺跡の歴史としても限られた時期にあつたと云ふ事を示してゐる。

北海道のアイヌは近年まで、山河の獵が乏しく飢饉が迫ると、湖の畔に居を轉じて貝で生活をつないだと云ふ。故にこの地には比較的新しい時期の貝塚がある。石器時代の當時にあつても、こんな事情が無かつたとは云はれない。貝は港灣さへ靜ならば、何時でも採集し易い生活の資料である。山海の幸の他にこの生活の保證があつたから、一層の餘裕を生じて、今關東海岸地域等で見られる様な文化が形作られたとも考へられる。

日本全土を通じて、貝塚築成時代と云ふ様な一時期があつたとも考へ得られないことはない。さうすれば最近大山史前研究所の所謂關東古式第一期遺物は貝塚出土だし、東北地方の所謂圓筒形土器も貝塚發見が多いから、今日の知識で我國石器時代初期に貝塚築成が始つた事は推測される。この一方彌生式や、時には祝部期に於ける貝塚も報ぜられてゐるから、非常に新しい階梯まで及んでゐる證據もある。解釋には未だ遠い問題だが、各地方を單位に一度は考へられてもよい問題だらうと思ふ。

三 貝塚研究の効用 貝塚の持つ遺跡としての長所を述べる事は、その研究に對する豫備知識ともならうと思ふ。

遺跡の發見、發掘等に白い貝殻の堆積が利を與へてゐる事は先にも述べたところである。然しこの他にも多くの特徴が伴つてゐる。土壤中に包含された貝殻は、一見層位の判別に資



してゐる。土と土との隔は、相當の時間的差があつても、中々に認定はむづかしい、特にロームの中間層でもあればだが、いきなり上中下三つの自然層位があるなどと、多少の経験で断ぜられるものではない。これに對して貝塚は、この認定が如何にも容易な事である。過去に於ける遺物主義の考古學では、たゞ物さへ取ればよいのでがら／＼貝を崩したから、かうした注意も一向伸びずに多くの貝塚を破壊したが、今日處女層の貝塚を、少し注意して掘ると實に面白い様な現象を見る事が出来る。貝層には、所々薄い土壤の挾雜があつて、如何にも一時は地表になつてゐて、原始人の土足で踏まれてゐた様な氣がする。同じ貝の積り様でも、上は蛤ばかりの堆積だが、中頃はかき貝をつめ、所々にきしや、ごの挾入があつたりする。貝層の積り方は土壤に比しては非常に速だから、これなどは或は一年毎の食料の選擇の相違が、又は季節に依て食つた貝が異つた爲かも知れないが、兎も角面白い觀察の對照である。貝塚は多く貝層下に多少の土壤層を隔て、盤となる。この土壤層も大部分は遺物を包含しその様式の差異を上貝層發見のものに比較せしめるものがある。

貝層は地下に浸潤した水のはきをよくし、又雨水に含まれた酸によつてカルシウム分を溶かすので、有機質遺物の保存を非常によく助けてゐる。包含地ではよい條件にあつても、人骨や獸骨などはたゞ痕跡を留めてゐる状態で、灰の如く白く土に印を残してゐるにすぎないが、貝塚では、これ等は實に生々しく、時には表面のゼラチン質の色までも留めて保存されてゐる。胡桃等の果實が伴出した事も時々は耳にする。先づ前述泥炭地遺跡と並んで色々な有機質遺物を今日に示すものである。特に人骨採集を目的とする場合は是非これに依らなければならぬ。

發掘の容易な事は、遺物を完全な状態で採集せしめる助となる。少し粘土質な包含地では、目に見えた完全土器などを、みす／＼壊さなくては取り出せない様な經驗に逢ふものだ。貝が土壤に比して土壓の少ないのもこの事を助けてゐるのであらう。

貝殻の堆積の速な事が、一方には時間的な経過を擴大して示して呉れる。多少の注意さへすれば、五尺六尺の層位から、遺物様式の推移を追求する事は易い。關東附近の貝塚では、時には七八尺、一丈以上の深さに達してゐるものがあると云ふ。

四 鹹水貝塚と淡水貝塚 鹹水貝塚とは海濱に臨んだ地域にあつて、包含された貝類が、す



べて海水産のものである事を示してゐる。これまで單に貝塚と記して來たものはすべてこれを指すのであつて、我國では先づ九割以上が鹹水貝塚だと云ふ事が出来るであらう。蜆等が混つてゐても沖蜆等の種類で、鹹水か又は半鹹半淡水に棲息するものが多い、鹹水貝塚は往今日淡水の湖や潟の畔にある事がある。顯著な例では陸奥の小笠河沼附近や常陸霞浦である。これは石器時代の當時には、海の水の差し入つた入江であつた事を示してゐる。霞浦が海水であつた事は、前述の常陸風土記等の文献からも明かで、このほとりで鹽を焼いたり海苔を採つたりした事が書いてあるが、文献はなくとも貝塚の種類からさうと證明もされる。又今日餘程海から引込んだ場所にも、點々鹹水貝塚の存する東京灣周圍などでは、昔はこゝまで海が來てゐたと云ふ事が明かにし得るのである。

淡水貝塚とは、これに反して淡水に棲む貝——主として蜆などで出來た貝塚である。これは數に於ても量に於ても前者には及ばず、僅に河川の下流地などで、昔湖があつたと思はれる土地や、現今湖沼をなしてゐる丘の麓などにある。それも遺跡全部を蜆貝で蔽ふ程の大掛りのものは稀で、僅に包含地の片隅に、兎に角貝を食つた事もあると云つた程度に姿を見せてゐる。

離れた古代堅穴の構造は、石器時代に屬する先住蝦夷の手に成つたことを信するに利つたのである。勿論北海道の事實がこれを助けてゐた。

異民族居住のことは、日本民族構成の複雑さを示しはするが、文化事象の變遷を對照とする考古學研究を絶対に決定するものではない。東北堅穴の研究は、蝦夷先住の如何に關らせず、考古學的方面からなされなければならない。

私の數ヶ所、數年に亙る調査の結果よりすれば、この地表面の窪める堅穴は、陸奥・羽後共に、石器時代を離れた金屬期文化に屬してゐるものであつて、何等關東以西、磐城・陸中等のそれに相違してゐる所はない。遺物は金滓・埴部祝部期の土器を伴つてゐる。先に石器時代と報ぜられその規準となつた陸奥森田村のその如きも同前である。最近喜田博士其他に依ても同じ意見が述べられてゐる。

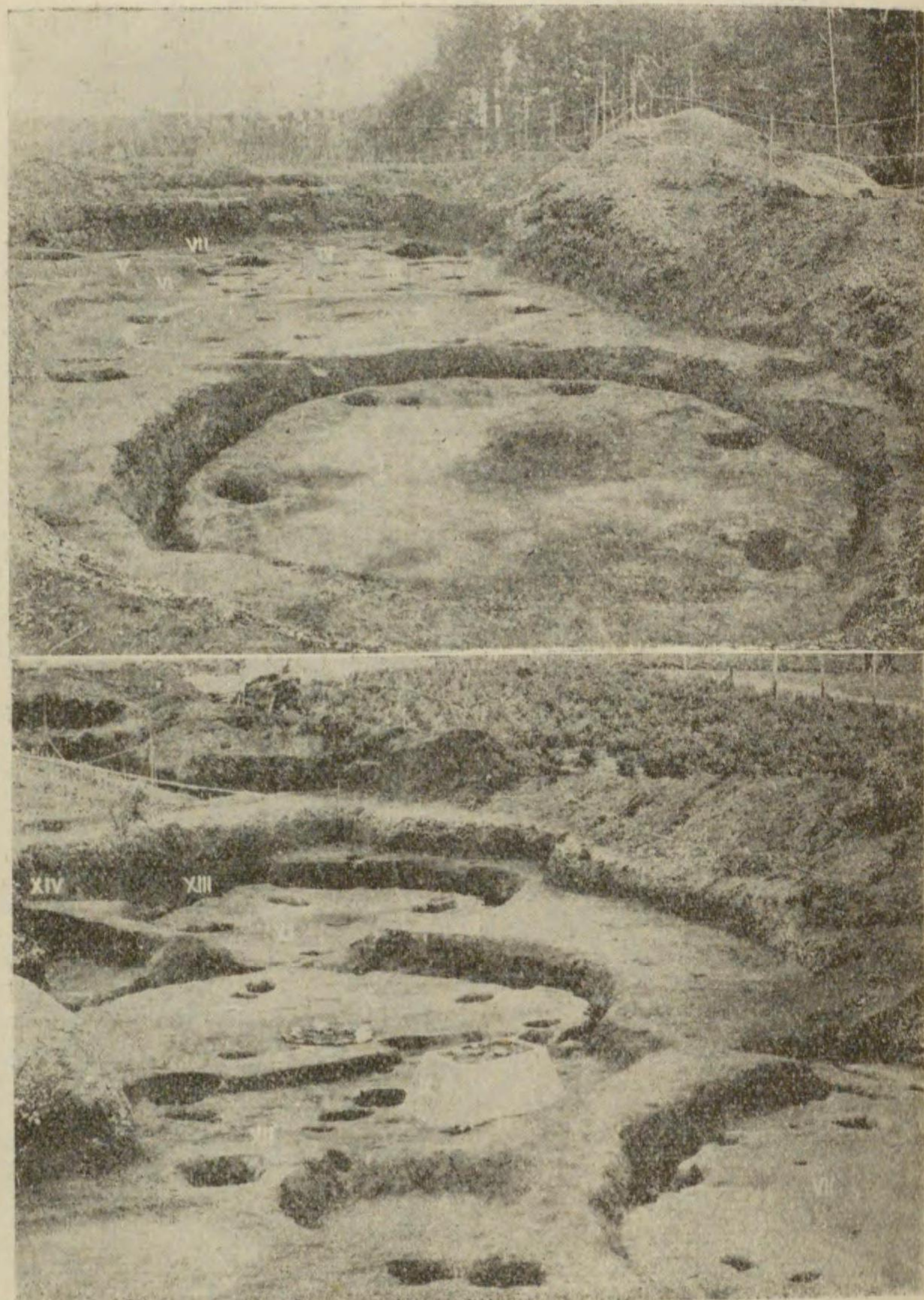
我國に於ける地表面窪める堅穴は、北海道にあつては石器時代に屬してゐるが、内地——東北・關東地方にあつては既に金屬期に入つてゐたものである事が云ひ得るのである。この文化的關係に就ては後説に於て述べる所があるであらう。



三 貝塚層下の堅穴 大正十五年春、東京人類學會は、下總國東葛飾郡大柏村内の姥山貝塚に發掘遠足會を催した。この際偶然にも掘り當てた、一體の骨から、石器時代貝層下に、非常に多數な堅穴群の存してゐる事を發見するに到つたのである。

貝塚層下の堅穴に就ては、既に明治三十年頃モノロー (Munro, G.) 氏が、武藏三つ澤の貝塚を發掘した際に報告されてゐた。然しこれは前者北海道のそれ等と混同された爲か、餘り世人の注意も惹かないで終つてゐた様であつたが、今回姥山の發掘は、その大掛りな作業と共に、學界の視聽を引くに充分であつた。宮坂光次、八幡一郎兩氏の手に依て、數ヶ月に亘る一貝塚の發掘は、單に遺跡の調査史よりするも一時期を劃したものであらうが、この發掘は、遺物よりもその遺跡構造に主力を注いだ點に意義がある。

堅穴の位置は、貝層下黒土層の下にあつて、地盤たる赤土に一尺又は數尺を掘り下げて作られてゐる。形は圓形に近く、壁の内側に沿つて、數個又は數十個の柱痕を示す小さな穴をも周らしてゐた。又多くはその中央に、石か土器片を以て圍み、又時には大形の一個の土器を利用した爐が設けられてゐて、堅穴住居の様式を示すに充分なものがあつたのである。



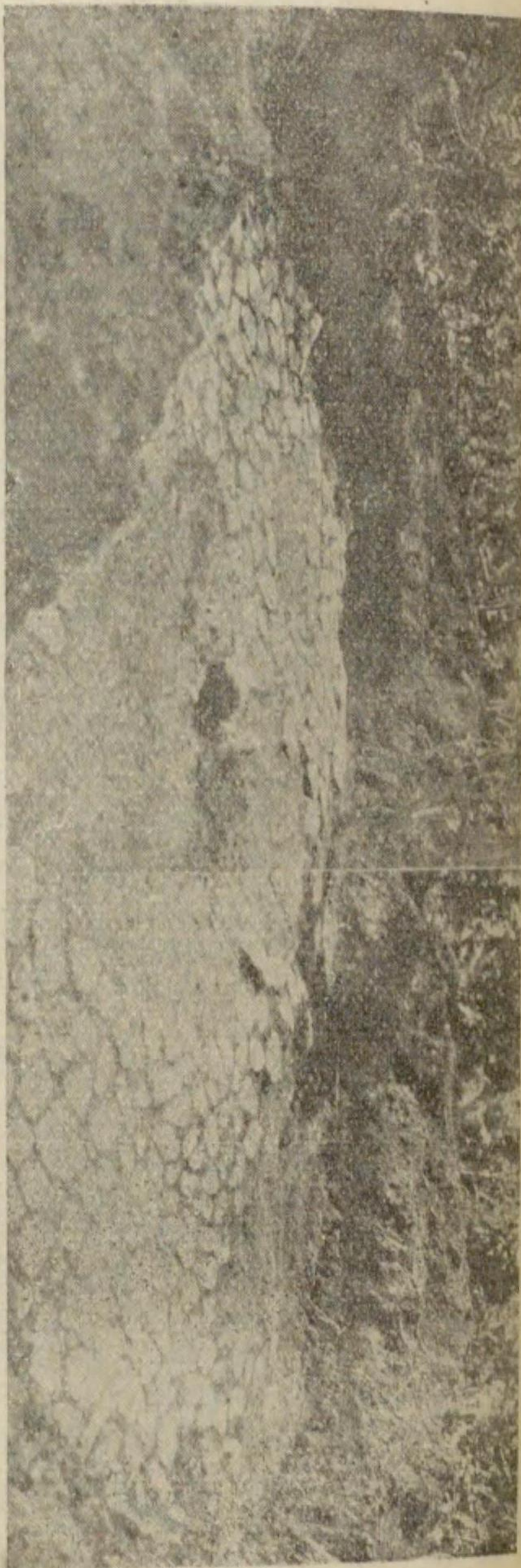
第九圖 下總姥山貝塚貝層下の堅穴

貝層の下に掘り込んだ堅穴があり、その周邊を取巻いて柱痕の孔が發見されてゐる。堅穴底面に高低のあるのは時を異にして居住が行はれたものであらう、下圖 XI とあるは貝層中に存した爐跡 X は堅穴中の石を圍んだ爐である。  
(人類學雜誌四十二卷宮坂・八幡兩氏報告による)

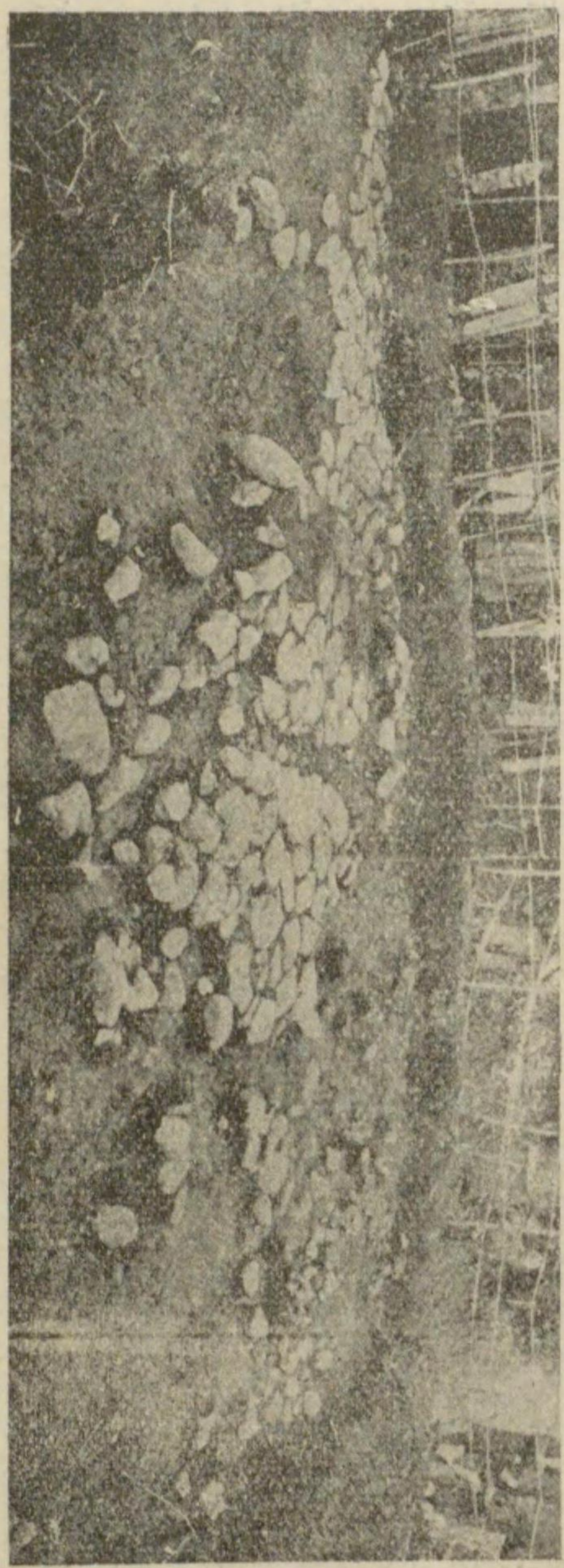


この堅穴の年代に就ては、何人も石器時代のそれを疑ふ餘地がない。厚い貝層の下尙數尺の層位に築成されたものであるからである。又その構造に於ても、前述北海道又は東北地方に於けるそれとは顯著な差があつた。この發見が動機となつて、一方では石器時代住居址の問題が吟味され、又東北地方の前述のものなどが、西日本と大差ない、所謂彌生式文化期に該當してゐる事が考へられるに到つた。近い將來遺跡發掘法の進歩と共に、この種遺跡の例は更に數を増し、彌生式並にその以後にまで發展して來た我國原始住居様式の研究が遂げられる日も餘り遠い事ではないであらう。

四 敷石住居址 貝層下堅穴の發見から、又こゝに別な石器時代住居の址が注意に上される日が來た。柴田常惠氏が武藏北多摩郡多摩陵附近の敷ヶ所に於て、敷石を有する住居址を發見された事である。これは住居の床に相當する部分を、堅穴狀に掘り窪めた代りに、小石を敷詰めたものである。この類似遺跡の發見は、其後も相次で行はれてゐるが、主として最初發見の地域を中心としてゐる様だから、或は地方的な様式であると云ふ事が、將來に明かにされるかも知れないが、兎も角も人々の注意を、遺物から遺跡構造の觀察に移した事に非常



第十圖 武藏高ヶ坂に於ける敷石住居址



(柴田常惠氏發見に依る)



な功献を持つものである。

從來にあつても、遺跡下から石で圍んだ爐や、久しく火を用ひてゐたと思はれる場所を、屢々發見してゐたが、これを極めて、住居の様式をまで分明にしようとする努力が拂はれないで止んだ事が多かつた。

敷石遺跡が單に地方的のものであるならば、問題は堅穴様式のそれに甚しく形態上の連關を持たないで終るであらうが、著者が數年前伊豆國加茂郡下河津村見高遺跡で實査したものにあつては、爐の周圍だけを平石で敷つめ、別に飛石狀の配置を試みたり、或は堅穴かと思はれる黑色土壤の切込等をも伴つてゐたから、これ等が一種中間形式となつて、堅穴から漸時敷石居住の様式を順致したとか、又は敷石を廢して堅穴にまで達しそのまゝ彌生式文化期に及んだとか云ふ様な事を、將來考察する機會が来るかも知れない。何れにしてもこの種遺跡の發見は、土木工事に伴ふ偶然な發見か、又は大掛りな發掘法によらなければ吾人の目にふれる機會の少ないものであるから、永い年月と多くの人々の絶えざる注意が必要である。

## 第二節 配石遺跡と丘陵築造

### 一 配石遺跡

配石遺跡とは、遺跡に於ける自然石配置の構造を指すものであつて、最も代表的なものは前述の敷石住居址である。これ程顯著な構成を持たずとも、從來無關心に發掘の邪魔物扱にされてゐた遺跡層中の自然石は、今になつて或は何等かの構造を示したものではなかつたらうかと思ひ當るものがある。或は人骨を圍つて環狀に配するとか、數個集めて爐にするとか、完全土器を圍つて石があつたとか、後になつて確な例が専門家の注意に上るまで、人々の無感覺の爲に葬られてゐた珍しい例が、次第に多くなつて來たそうである。こんな新しい構造の發見があつたと傳へると、あゝそう云ふ例なら自分も嘗て經驗した事があるとか云ふ話だけでは、どう證明にも使へない知識で、特に構成要素たる石が、一旦場所を動かされて了つては、人工の加はらないたゞ自然石であるだけに始末が悪い。發掘中飛出した大きな石などは、たゞ掘る事の邪魔計りだが、出来るだけその位置を動かさずに、周圍を掘り進めて見る事にし度い。二つ三つと例が増して、その配置の距離から、成程こんな工合



のものだつたかと思ひ當る事もあるのである、意味は分らずとも、伊豆見高の例の如く、爐を圍んだ敷石から、一米二米と間隔を置いて、飛石狀に配したものなどは、將來その例を増せば、確に何かの意味も讀む事が出來そうである。先住者居住地の自然石は動かす前に兎も角實測してその位置を圖面に残す様な心掛が欲しい。

二 爐 爐の發見は、堅穴のそれ等に比して例も多く、構造にも色々な種類が見受けられる。遺跡を發掘中同一地點で永い時期に互つて火を焚いたと思はれる址なども、廣義の爐とも考へられ、相當な灰層と焼土とが見受けられる。たゞ薄い灰層などは貝層等に挾雜して、各所に認められるが、これ等はその程度による認定に任すべく、構造がなれば爐址ではないとも云へる事である。

構造を持つた火焚き場では、手頃な自然石を五六個寄せ合つたものが比較的例が多く、時には石棒の折れや石皿片を利用して作つてゐる。又稍小さ目な石を數十個廻してゐるのも同じ意味のもので、何れも配石遺跡の例である。石ではなしに、土器の破片を丹念に積み合せて作つたものが、下總姥山の貝塚から出てゐるが、これ等は稍珍しい例である。又大型な厚

手系の土器の底の抜けたのなどを一個地盤に埋め込んで、そこで火を燃した跡のあるのは、廢物利用と見受けられる。

爐は必ずしも堅穴住居址のみから發見されてゐるものではない。或は發掘法の不備か住居址の性質から、家屋の構造が發見されないのかも知れないが、打見たところ何等他の構造もない包含層下から、立派な石造の爐址も發見されるし、灰の層に到つては、貝層包含層の隨所に挟まつて薄い層を作つてゐる。堅穴内の爐の址も、必ずしもその中央に存するとは限らず、時には周辺近くに存する事もあるし、將來には一堅穴内に二個の爐が發見されないと限らない。爐と住居との關係も、今少しは突込んで考へて見る餘地は存してゐるであらう。

三 チャシ・蝦夷砦 北海道の地表面窪める堅穴群の所在地等に近く、丘陵を切り斷つて築造した遺跡がある。土人は是をチャシ又はチャシコツと呼び、堡塞の字が當てられてゐる。堅穴が日常の生活址だつたに對し、これは不時に備へる見張場又は山城に相當するもので、こゝに籠つて彼等の尙旺だつた日、シャモと戰つた記録もある。

チャシが石器時代に屬する堅穴に伴ふ場合、それは明かに同時代のものと見受けられてゐ



る、然し北海道の堅穴にも鐵器を伴ふもの、又は鐵器時代に屬するものがあつて、これ等に屬するチャシは鐵器時代に及んでゐるものと認められるのである。堅穴を離れて單獨に、大きな構造を持つたものもある。山頂を切取る堀り切りや、二重三重に及ぶ土壘などを伴つたものでは、形式を異にはしてゐるが、内地の山城と通ずる程の大掛りなものも一二に止まらず存してゐる。

百例以上も發見されてゐるこの地のチャシを、石器時代のそれから漸次金石併用期、徳川時代にまで及ぶ順序に並べ立て、形式の發展を追ふ程こゝでは暇もないが、多分は徳川期に入つて戰の相手が、福島城のその様に異人種たる和人になつてから、團結も大きくなり、和人の陣屋等も見習つて大型のものを作つて止んだのではないかと思はれる。

北海道のチャシはその堅穴と共に、蝦夷即ちアイヌに結びつけるに困難もない問題で、こだけで問題の始末をつけられる程、今日尙遺跡の例も存してゐるが、これにからんで困難な問題となつてゐるのは、日本内地のチャシと云はれるものである。鳥居博士に従へば、大和の三山其他に於て、石器時代の堡塞が存し、これをチャシと呼ぶに差支えないとの説であ

るが、先づその例を北海道に縁近い東北地方にとつて吟味して見度い。

東北の各地に蝦夷館、蝦夷ヶ森等の傳承の存するは數多い例であつて、その蝦夷館と呼ばれるものゝ中に丘陵築造址がある。舌狀に突出した丘陵の根を一重二重の堀り切りで劃し、堡塞としての使用の事が考へられる。又これに堅穴を伴ひ埴瓮土器片、これには石器等を伴つてゐる。この遺跡をこの地の堅穴期以前に持來つて石器時代とする事は困難で、反つてそれ以後の歴史期に入つての築造と考へられる節が多い。勿論關東その他に見る戰國時代前後の山城等とは、形式の上に差異もあるが、同程度の差が北海道のチャシとの間にも存してゐる様である。又蝦夷館の傳承は、すべてをアイヌに結びつけるには、今日新しい意味で疑問も生じて來てゐるから、この名を以て直に内地の堡塞即ちチャシとは云ひ切れないものがある。

先住民アイヌで一切が理解されてゐた時には、問題はむしろ無雜作に片附けられてゐたが考古學本來の立場から云つても、古代の文化現象が、そんなに簡単に考へ切れるものでもなく、むしろ色々な場合を考へる事が必要である。



先に述べた地表面窪める堅穴も、北海道では尙石器時代で存し、東北地方では埴瓮土器等を伴ひ、關東以西では彌生式土器を伴つてゐると云ふ事なども、日本がこんな北西に延びた地形にあり、金屬器文化が常に西方からのみ致された事情では、その傳播の速度、舊文化勢力の強弱に依て、當然起り得る現象である。又文化に伴ふ人種の混交から、東北の蝦夷が北海道のアイヌと同一種と目する事も尙問題があり、その手に成つたとしてもその丘陵上の築造址を、直に北海道のチャシと同一事情のものとも目されない。内地の堡塞が新興民族の影響を受けた時代の差異に依て、地方的にもその地方の年代的にも色々な様式を生む事も考へられる。

丘陵築造が即ちチャシであると云ふ事も、蝦夷館即ちチャシなる説も、共にその年代觀から考へ直すべき日が來たのではあるまいか。

### 第三節 巨石遺跡

#### 一 巨石文化とは

巨石文化の問題は、嘗て全世界の考古學者の興味を惹いた事であつた

が、今日に於ても、マンチエスター學派等の健在に依て、各國の研究が多く期待を以て迎へられてゐる。

新石器時代の初期から、金石期に及ぶ時期に於て、人類は巨大なる石造築營に對する宗教的關心を持つに到つた、最も廣く知られたのは埃及のピラミッド、スフィンクス等であつて、その他殆ど歐洲全地に巨石墳 (Dolmen) 環狀石籬 (Stone circle) 立石 (Menhir) 等が存し、亞細亞に於ても印度、シベリアの各地に及び、朝鮮に巨石墳並に立石の存する事は鳥居博士等に依て立證された。北海道に於ける環狀石籬は周知のところである。

エリオット・スミスに主宰されたマンチエスター學派の文化傳播説に依れば、巨石文化は初め埃及の地に興り、各地に傳播されて全歐洲の地と、一方印度太平洋洲に及んだものと云はれてゐる。この文化一源論の當否は暫く問はずとも、我國に於ける巨石遺跡の存否が先づ問題となる。

朝鮮の調査から、我國本土にもその存する事を確信するに到つた鳥居博士は、近時九州其他の地に於て、巨石遺跡の存する事を提唱され、これに附隨した二三の發見が、各地に



於て告げられてゐる。武藏葛飾郡の立石等がその例である。然るにこの認定は今日のところ色々な困難を伴つてゐる。石器時代に於ける墳墓形式が極めて稀なる發見例をしか持たず、その様式、推移は殆ど部分的にしか知られて居らない。又比較的巨石を用ひた古墳が各所に存してゐても、直に巨石文化を主張する程な材料とはならない。確に我國の古俗又は近代に於てすら、石又は巨石に對する信仰形式があつた事は色々な點から視はれるのであるが、これが巨石文化と云はるゝ様な型を持つたか否かと問題である。巨石文化は、むしろその特別な文化の型として考へらる可きものではなからうか、用ひられた材料は必ずしも大とか巨とか云ふ制限は受けなくとも、又極東の地我國にまで傳播された時、それが必ずしも或る限られた文化期に於て受入れられてゐなくともよい場合があると考へて見なければならぬ。斯く見ると、これは獨り考古學者だけの問題ではなく、民俗學、宗教學的な方面の助力を待つて改めて思考さる可き事の様に考へられる。

二 北海道の環狀石籬 北海道に於ける環狀石籬(Stone circle)は、忍路郡忍路村字蘭島、岩内郡岩内町、空知郡音江村オキリカブ等に存し、大小の石塊を環狀に樹てたものである。

歐洲に於けるこの種遺跡は甚だ巨大なる構造を持つてゐて、眞に巨石遺跡の名に背かないものであるが、北海道のこれは大なるものも僅に直徑十八尺を出でず、小なるものに到つては七八尺に止んでゐる。而して樹立された石も地表に二三尺現れてゐるのみで、環内にも小さな石が雜然と存してゐる。類似のものが東北地方其他で發見されたなどと傳へられた事もあつたが、何れも、直に同視を許さないものであつて、たゞこの地にだけ僅な例ではあるが此の如き明かな巨石遺跡の存在を許してゐると云ふ事は、小樽手宮の洞窟彫刻等と共に、興味ある存在である。

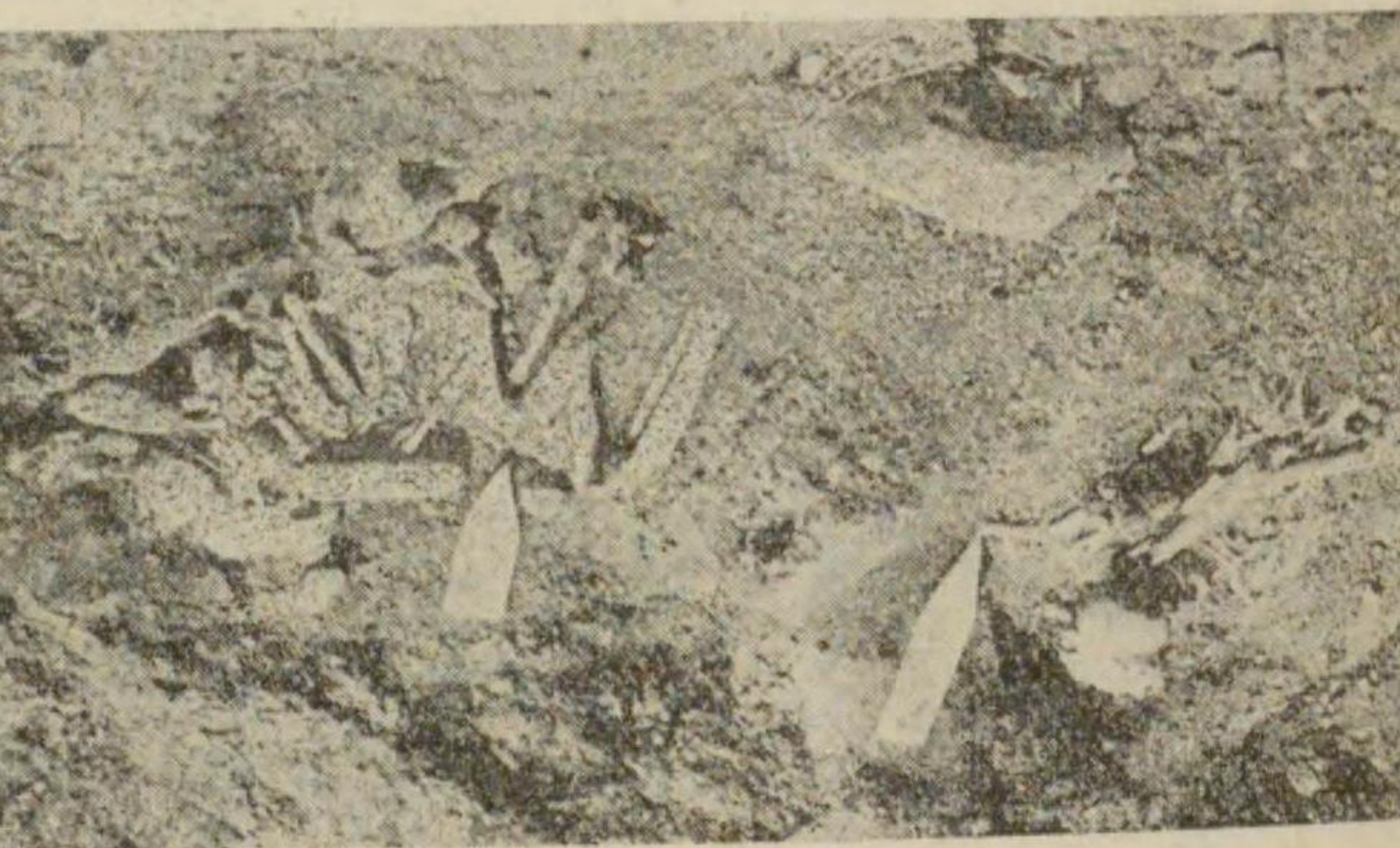
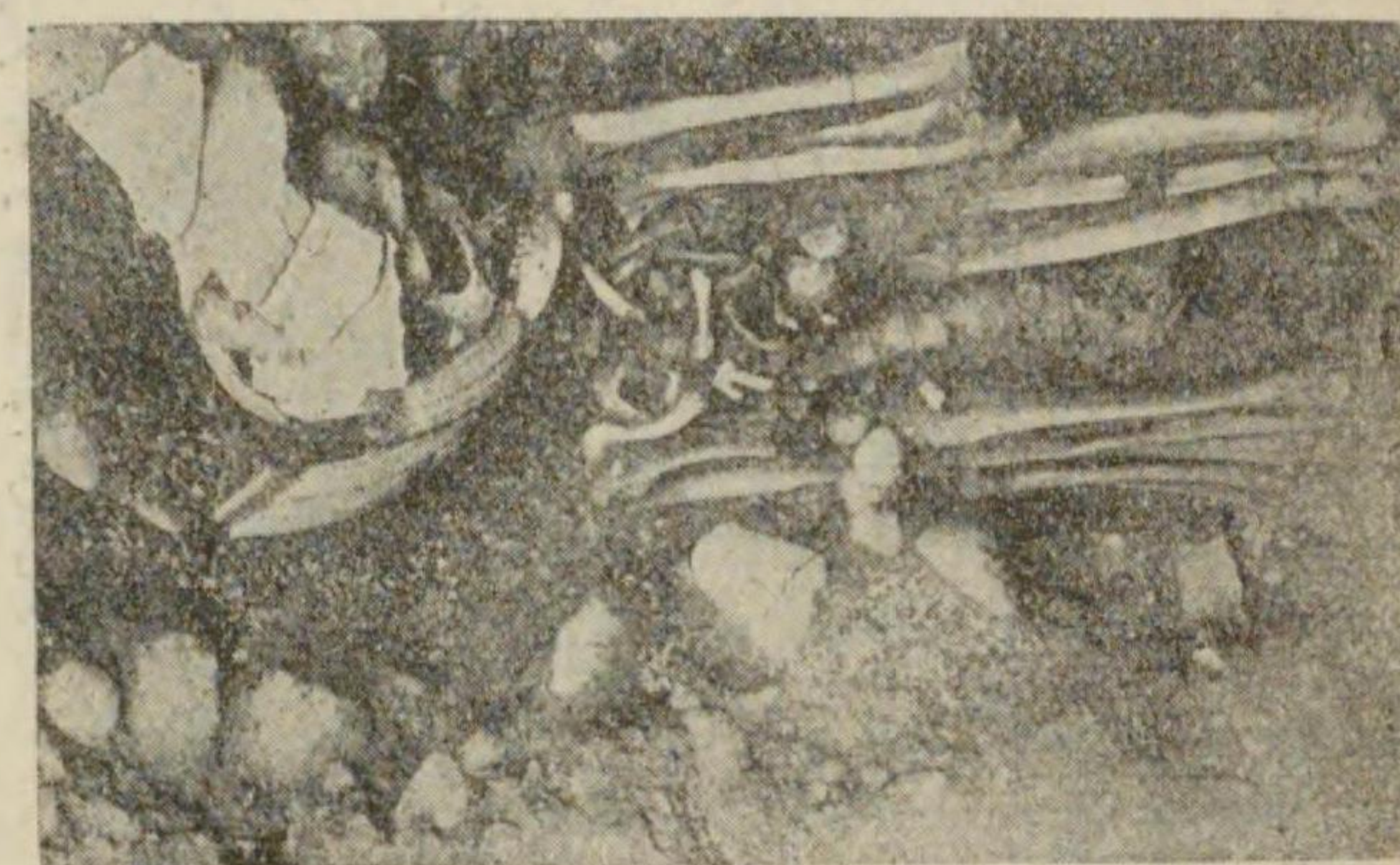
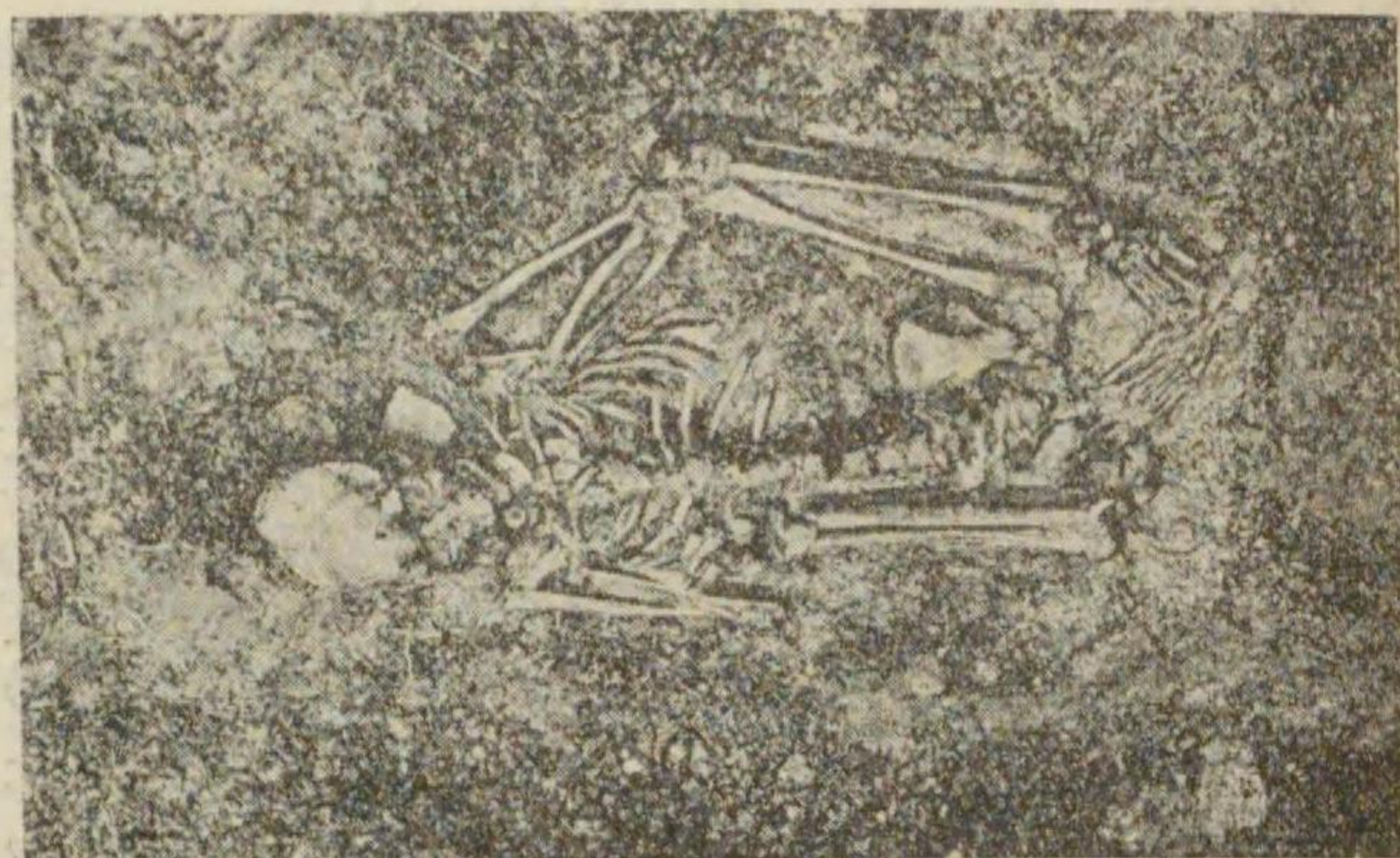
#### 第四節 人骨埋葬

一 埋葬と云ふ事 石器時代人骨の發見は、最近十年間に相次で行はれ、今日では全國千體を以て算ふ可き數に達してゐる。發見個所は勿論貝塚がその殆どすべてを占めてゐるのである。この發見の爲に先住民の人類學的研究は、完全に解剖學者の手に移され、當然行はるべき學の分裂が行はれた。然し人骨發掘の事自身は、そこに埋葬と云ふ宗教的な問題が残



されてゐる爲に、遺跡學的關心を離れる事が出来ないのである。

我國石器時代人は、多くの場合明瞭な墳墓的構造を伴はずに地下に眠らされてゐる事が多い。屈葬伸葬と云ふ様な、埋め方に差別はあつても、それはむしろ埋め方の差であつて、特に埋葬としての施設を伴つたと思はれる例は稀有に屬してゐる。而してその埋葬地點もむしろ居住地附近の地形や便宜に従つたものらしく、一定の方位、區劃に墓地が存してゐたと考へる根據は薄弱である。清野博士に従へば、人骨埋葬地點に一種の脈があつて、この遺跡なればこの地點にと云ふ様な斷案が下され得ると云ふ。この事は博士の發掘成績に依ても立證されてゐる所であるが、むしろ經驗と直感が或る部分を占めてゐるものとも考へられる。確に人骨埋没地點は他遺物のそれよりは深い層位にある事は事實で、大體遺物も盡きたと思はれる層位に達して、初めて人骨の上位(頭蓋骨とか膝蓋骨等)に出會する場合が多い、これは當時の居住地面から二尺でも三尺でも掘り窪めて、死屍を蔽ひ得る程度に埋めた爲である。然し今日の遺跡の地表からと云つては、其後の事情の相違で、むしろまち／＼と云ふ方が本當である。



第十一圖 人骨埋葬の狀態

右圖は屈葬人骨の例で、兩手を胸上におき正しく屈げてゐる。玦狀耳飾二個が胸上に轉落してゐるのはその器の用途を示してゐるものである。中圖は甕被葬の例で甕部を大甕で被つたのが今は甕が破れてゐる。又手足は結縛した如く軀幹部に密着してゐる。下圖は抱石葬の側で胸上に數個の石が載せてある。  
(河内國府遺跡發見人骨 松蔭藏塚區による)



時々發見される例で、明かな墳墓的構造を伴つたものがある。時代に依る發生か、地方的な風習か、種類も一二に止らず、地域も廣くに亘つてゐる割に、報告された例が餘りに僅少な爲今日のところどうとも云へない問題である。

## 二 伸葬屈葬

發見人骨の大部分は、今日に残つた埋葬施設を伴はないもので、當時何等かの土壤との隔てが作られてゐたかも知れないが、それは今日に跡を留めてゐないのである。而してその埋め方に依て伸葬屈葬の二種に分たれてゐる。

我國に於て特に膝を屈せしめて埋葬したものゝ存する事を初めて指摘されたのは、記憶に誤なくば大正六年濱田博士等の河内國府發掘の際である。此の如き例は我國ではむしろ伸葬よりは多く又諸外國にも存してゐる事で、見易き事實であるが、この時までは人骨の發見そのものが、極めて稀有の事であり、むしろ偶然的な發掘が多かつたので、その埋葬法にまで注意を及ぼすに到らなかつたのである。膝を屈して人を葬むる事は、或は此靈の再び現世に現れない呪の爲とも云はれ、又埋葬面積を小にする勞力經濟の爲とも云はれてゐる。アメリカの一地方にあつては、石器時代の古式埋葬に屈葬が多く、年代が降るに従つて伸葬になつ

てゐると云ふ様な報告もあるから、或は我國の屈葬も、發掘具の不便な當時、地を掘る勞力を厭ふ爲に生じた便法であつたかも知れない。而して又伸葬法との間には、それは漸進的で多く並行した事が存するにもせよ、何か年代的な順序がある事が將來に明かにされ得る日があるかとも考へられるのである。

屈葬の姿勢に依て、色々な區別を立てられてゐるものがある。例へば膝を立てたまゝ横倒れになつてゐるものや、手で膝を抱いて蹲つてゐるもの等、又は頭部を高くして立てかけたものや、土壓で下半身だけよぢれたもの。上肢骨の位置からでも色々埋葬時の配慮は伺はれるであらうが、之等は發掘に際しての注意としては當然拂はるべきものであるが、今こゝで一々區別して述べる手数をさげ度い。

伸葬とは膝を屈せしめずに、眞直に伸ばして葬つたもので、長々と寝てゐたと、發掘の人夫を恐怖せしめる。

これ等の埋葬の無雜作さは、獨り副葬品に乏しいと云ふ様な事計りではなく時には一旦埋葬した場所へ、時間が経つて再び他の人骨を重葬する場合、以前の既に白骨になつたものを



掻き散らす事や、上へ重ねてゐる例などでも知れる。然しこんな例は今日に於ても土葬の墓地では行はれてゐる事であるから、異とする事でもないであらう。下總姥山貝塚の一つの堅穴からは、五體の人骨が床の上に重なり合つて埋まつてゐた。何か突發的な事變で土中になつたもので、もなければ、廢屋の中に上へ上へと死屍を投込んだもの、如くも想はれて、無氣味な様な事實である。

三 合葬並に抱石葬 陸前桃生郡宮戸島の貝塚から、嘗て屈葬の老人々骨に抱き合つた小兒骨のあるのを發見した。互に手を交又せしめた姿から、埋葬時に於て互に抱き合せて葬つたものである事が明かである。こうした例は其後も一二發見が告げられてゐるが、何れ同時期に死んだ小兒を、その慈み深かつた人の懷に抱かせたものであらう。而してこゝには明かに埋葬に對する配慮、——それは來世に對する信仰か、又は現世の生活を死後に延長せしめて考へたか何れにしても——が行はれてゐる事が考へられる。この式の埋葬法を、合葬又は抱合葬と人々は呼んでゐる。

屈葬人骨の胸部又は腹部に、大きな石を置いたものが、河内國府、陸前氣仙郡の貝塚等から發見されてゐる。死屍の上に石を置く事は、墓標等の目印として以外は、別に埋葬時の勞力經濟にもならない事である。而して石は骨格に直に接し、時には兩手に抱かれて存する場合なのだから、一旦土をかけた上の目印とは考へられない。石を抱かす事に依て、或は靈魂を鎮める爲か、死者の現世に再歸する事を防がうとする呪的意企だとも考へられてゐるのである。

抱石葬とほゞ形式を同じうしたものに、死屍の周圍に石を廻らせたものがある。棺を築くと云ふ程の構造ではなく、たゞ拳大の石を數十個、同一平面に並べ立てただけのもので、陸前氣仙郡大洞貝塚等に發見されてゐる。長谷部博士の命名に依て環狀列名と稱されてゐるが、稍文字のまぎらしい環狀石籬と、如何なる直接的關係を持つてゐるかは今日の所不明であつて、或は埋葬區域を設けた意企なのかも知れない。そうして内面的には石を抱かす事とも相通するものがある様にも考へられる。

四 壘葬・壘被葬・附壘棺 人骨を壘に容れて葬る事は、石器時代の當時から既に存してゐた。然しその壘は、特に埋葬用として作られたものではなく、有合せの大壘を利用したもの



で、次の乳兒骨埋葬の場合の他は、埋葬の一形式として特筆すべき程の意義を持つものであるか否かは疑問である。

乳兒骨の甕葬は、嘗て陸前國中澤濱貝塚河内國府、備中津雲貝塚等から各一二例を發見してゐたにすぎなかつたが、近時清野博士に依て三河國稻荷山貝塚より數例、同國矢崎貝塚より二六例、長谷部博士に依て陸前海岸地方の貝塚より數十例を發見された爲、それは稀有な例ではなく、むしろ全國的に——或は或時期に於て——一般に行はれた風習であつたと考へる事が出来る様になつた。但乳兒骨にして甕に收められないで直に埋葬された例も、その腐蝕の容易にも關はらず發見はされてゐるのである。

乳兒骨を容れた甕が口徑一尺内外、高さ一二尺の廣口甕形、又は壺形の土器に收められてゐる事は、その必要が作つた制限で、やはり特別な製作品ではない又埋葬の當時、この上に木の枝を並べたか、又は木製の蓋のあつた事は、土砂侵入の状態から考へられてゐる所である。

さて成人骨を甕に收めて埋葬した例は、笠井氏に依て陸奥國南津輕郡北中野村天狗岱で發見されてゐる。氏に依れば繩紋土器の上部に石を積んで蓋としたもので、收められた人骨は

一部分で、甕は勿論成人死體をそのまま容れる程の大きさはない。故に一旦死屍を曝して、その軟部の腐朽後洗骨して收めたものと考へなければならぬ。此の如き例は他に殆ど見ないのであるが、清野博士三河矢崎貝塚——この貝塚は同博士に依て三百數十體の石器時代人骨を出しむしる世界的のレコードを作つた所である——の發見例中、一個の無紋の壺中、燒けた非常に多くの成人骨が入つてゐた事がある。我國石器時代に火葬の風の存した例は殆どないのであるから、これは火災等の爲に燒死した骨を葬つたものではあるまいかと云はれてゐる。(人骨が燒けてゐると云ふ事と、軟部の存する死屍を火葬に附したと云ふ事は勿論別な事柄である)

改葬又は洗骨と云ふ様な事とは多少意味も違ふであらうが、前記三河矢崎貝塚發見人骨中には、骨を盤狀に集めた例が發見されてゐる。埋葬時に以前埋めた骨が掘り出され、それを重葬する際整理する様な意味で並べたものかも知れない。

甕被葬と呼ばれてゐるものがある。成人骨の頭部を大型な甕の破片で蔽ふ様にしたもので、當時は完全な甕をすつぽりかぶせたと思はれる例もある。河内國府、備中津雲等に於て少數



例發見されてゐる。

甕棺に就ては本書に於て詳細な記載は避くべきであらう。何となればこれは年代の更に降つた、金石併用期又は青銅器時代に於て用ひられた埋葬法であつて、石器時代のそれと並記する事は却つて誤解を招く恐れがあるからである。たゞ混同を避けて一言すれば、九州を中心にした我國金石併用期その以後の時期に於て、特別な大型甕を一個、又は二個三個を接せしめて、この中に死屍を容れて葬つたことのある事である。この分布は北九州が中心であるが、北邊は中部地方信州の一部にまで及んでゐる。甕は所謂墳壙期のそれに通ずる手法を示し、形は大きくて厚く、一見小破片を以てしても甕棺たるを證し得るものである。口邊部又は腹部等に一二條の凸帯を廻らせてゐる場合が多い。

此の如き中間文化に於て甕棺を有した事は、殆ど全世界に見る所の現象である。

#### 五 石棺積石塚

石器時代人骨に一種の棺或は槨の存する事は備中津雲貝塚發掘に際して清野博士の提唱された所であつたが、その後不幸にして的確な例證が現れないでゐた。然るに近時肥前有喜の貝塚より、同時代に屬する組合式石棺が發見され、同時に之には鐵鍬が伴

つた。又朝鮮金海の貝塚層下數尺の個所よりも、立派な棺が發見されてゐる。これ等はこの地方が金屬文化に移行した後も、尙石器時代文化期に取り殘されてゐて、偶々石棺を築くと云ふ風習を取入れたものかと考へられる。

石器時代に一種の木棺が存してゐたであらうと云ふ事は、先にも述べた如く、今日人骨發見の姿勢等より類推されてゐる所で、埋葬當時或年月の間は死屍の周圍に空隙の存してゐた事が考へられるのである。勿論實證すべき直接材料は腐敗して殘されてゐないが、考慮さる可き問題である。

榊原氏が遠江蜆塚貝塚に於て發見した例によれば、人骨上に拳大の河原石百數十個を積んで、積石塚の狀を呈したものがあつたと云ふ。積石塚は古墳時代に入つては各地に發見する墳墓様式で、四國地方を中心に對島南鮮地方にも及び、又筆者が昨年夏實査した所によれば陸奥、南津輕地方にも數例を見てゐる。而してこれも全世界を通じて見る様式のものである。たゞ我國の石器時代にあつては前述蜆塚以外に確實の例を欠き、嘗て南伊豆に於てその例品と稱されたものを實査しても、たゞ遺物散布地上に石を積上げた個所があり、崩せ



ば病を得ると云ふ傳承以外には何等確らしさに乏しいものであつた。

六 赤い人骨・燻火 貝塚其他より發見される人骨の、主として頭蓋部並に胸部、時には腰部等を、赤色——酸化鐵を以て塗つたものゝ存する事が、小金井、松本博士等に依て注意されてゐる。發見例は陸前河岸地方の貝塚に多く、又越中氷見彌生式の洞窟人骨にも見えてゐた。赤色人骨には男女性の區別はなく、又古墳人骨にも此の如き例はある。一説には死後面部に丹をふりかけた爲とも云はれ、又生前顔面部を赤く染めてゐたのが、その軟部消失後骨にしみ付いたとも云はれてゐる。或は衣服其他の染料が骨を染めるに到つたと稱されてゐる。別に埋葬時に殊更丹をふりかけた儀式的なものではないと考へられるのである。

死者に對する一つの風習として、埋葬個所に燻火を行つたであらう事が、津雲其他二三ヶ所の例で主張されてゐる。やはり鎮魂等に關する一儀禮を意味するものであるかも知れない。

七 副葬品 人骨に伴ふ發見遺物を以て、直にすべてを副葬品と稱するは疑問が多い。遺物埋没の状態が一般にすこぶる亂雑なものがあり、發掘者は偶然その個所に轉落して來たものか、特に死者に供へたものかを、判斷するに苦しみ場合が多いからである。一般には身體

に直に伴ふべき性質のものが伴出する事が多く、これを副葬品と呼んでゐるのである。故に裝身具が最も場合に於ては多い。

玉類は白玉、小玉、骨牙製勾玉等に關はらず、頸部に當つて位置してゐる事が多く。紐を通じて頸にかけた事は明かである。陸前宮戸島發見の人骨は、數十個の鳥の長骨を切つた管玉を廻らし、又著者が松村博士上羽氏等と掘つた下總古作貝塚人骨も骨製勾玉二個を胸部に置いてゐた。

耳飾は初め玦様石製品と稱する製品が、河内國府の發掘に初めて人骨耳邊に發見されてその耳飾たるを知り、宮戸島合葬人骨の幼兒右耳に石製小玉八個の存する事が明かにせられた。又滑車狀、漏斗狀、或は鼓狀等と稱せられた小形の土製品も、一對揃つて三河伊川津人骨等に發見されてゐる。この他種々形状の骨角製品が、耳飾であつた事を知る發見例も今日では相當數に上つてゐるのである。

貝輪が人骨の腕を貫いて發見されたのは明治四十年陸前中澤濱貝塚に於てであつたが、其後備中津雲貝塚等に於ては左右上肢骨に數個を嵌めたもの等が發見されて、稀有な例ではな